

2014 こです HOKKAIDO

～ 60周年記念号～

**Collected papers
Domestic Science
Studies**

北海道高等学校長協会家庭部会

2014 こです HOKKAIDO
～60周年記念号～
目次

○ 巻頭言

北海道高等学校長協会家庭部会長 北海道江別高等学校長	加藤 和 美	1
-------------------------------	--------	---

○ 巻頭挨拶

北海道教育庁上川教育局教育支援課 高等学校教育指導班指導主事	石川 博 史 様	2
-----------------------------------	----------	---

I 六十年の歩み

1 はじめに	5
2 家庭部会六十年史概観	5
3 五十年からの十年を振り返って	10
【資料1】 「家庭科技術検定」実施校等の推移	15
【資料2】 家庭部会関連組織歴代校長名簿一覧	16
【資料3】 学科設置校数の変遷	17
【資料4】 家庭部会関連の規約（平成25年5月現在）	18

II 平成25年度家庭部会の報告

◆平成25年度全国高等学校家庭科教育振興会・全国高等学校家庭部会報告

北海道高等学校長協会家庭部会長 北海道江別高等学校長	加藤 和 美	25
-------------------------------	--------	----

◆平成25年度第57回全国高等学校家庭科実践研究会〈北海道大会〉

第57回全国高等学校家庭科実践研究会〈北海道大会〉報告	28
-----------------------------	----

1 開講式

○主催者挨拶

全国高等学校長協会家庭部会理事長	山形 昭 夫 様	29
------------------	----------	----

○来賓挨拶

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官	望月 昌 代 様	30
------------------------	----------	----

○来賓挨拶

北海道教育庁学校教育局高校教育課長	小山 茂 樹 様	30
-------------------	----------	----

○来賓挨拶

北海道高等学校長協会会長	山本 伸 弘 様	31
--------------	----------	----

2 基調講演「新時代の家庭科教育の充実に向けて」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官	望月 昌 代 様	32
------------------------	----------	----

3 講演「日本文化と“着もの”」

NPO法人日本時代衣装文化保存会理事長	宮島 健 吉 様	35
---------------------	----------	----

4 実践報告「防災の視点を取り入れた家庭科の授業～理論と実践をつなぐ～」

北海道教育大学札幌校教授	佐々木 貴 子 様	37
北海道札幌丘珠高等学校教諭	黒田 さとみ	

5	学習成果の展示について	4 1
6	三笠高校プロデュース『北海道大会弁当』	4 2
7	アラカルト研修	
	A「伝統衣裳と色の文化」	4 2
	B「食品の生産と加工の実際」 C「北海道の食産業」	4 3
	D「北国の暮らしと住まい」	4 4
	E「アイヌ文化とものづくり」	4 5
	F「食と観光・環境」	4 6
	G「北海道のエコ・福祉」	4 7
	H「子どもの発達と表現活動・北海道の生活文化」	4 8
8	運営研究員氏名及び事務局校	4 9
	【資料】 「新時代の家庭科教育の充実に向けて」	
	※ 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 望月昌代様の基調講演から	5 0

◆平成25年度家庭部会調査研究委員会報告

調査研究委員長 北海道洞爺高等学校長 佐々木 淑 子	5 4
----------------------------	-----

Ⅲ 平成25年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動

1	北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について	
	北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長	
	北海道名寄産業高等学校長 田 邊 孝 次	6 1
2	第54回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して	
	北海道江別高等学校教諭 高 坂 瑠 美	6 2
3	第61回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として	
	ホームプロジェクトの部	
	北海道札幌北高等学校教諭 田 畑 優香里	6 3
	学校家庭クラブ活動の部	
	北海道札幌丘珠高等学校教諭 黒 田 さとみ	6 4
4	第62回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて	
	北海道札幌丘珠高等学校教諭 黒 田 さとみ	6 5

Ⅳ 平成25年度北海道家庭科技術検定委員会の活動

1	家庭科技術検定の実施について	
	北海道高等学校家庭科技術検定委員長	
	北海道当別高等学校長 杉 本 祐 子	6 9
2	平成25年度全国高等学校家庭科技術検定全国専門委員会に参加して	
	北海道当別高等学校教諭 福 本 智 子	7 0

V その他の家庭科教育・研修会等に関する報告

- 1 平成25年度第51回北海道高等学校教育研究大会教科別集会家庭部会を終えて
事務局 北海道札幌白石高等学校教諭 北村 仁 美 73
- 2 平成25年度北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して
事務局 北海道江別高等学校教諭 上野 博 美 74
- 3 平成25年度北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会最優秀賞
(1)最優秀賞生徒を指導して 北海道札幌手稲高等学校教諭 東 昌 江 75
(2)生徒原稿 北海道札幌手稲高等学校2年 山 田 千 裕
- 4 平成25年度北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して
北海道当別高等学校教諭 今 多 靖 子 77
- 5 平成25年度高等学校初任者研修〔一般研修〕を受講して
北海道江差高等学校教諭 新 海 真 梨 子 78
- 6 平成25年度10年経験者研修〔教科指導等研修Ⅰ・Ⅱ〕を受講して
北海道平取高等学校教諭 高 橋 あ き 79
- 7 平成25年度北海道立教育研究所「家庭、技術・家庭科教育研修講座」を受講して
北海道広尾高等学校教諭 藤 枝 沙 香 80
- 8 平成25年度産業・情報技術等指導者養成講座を受講して
北海道美瑛高等学校教諭 森 本 鈴 奈 81
- 9 平成25年度北海道高等学校産業教育実技講座を受講して
北海道池田高等学校教諭 館 山 宏 美 82
- 10 平成25年度第14回福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて
函館大妻高等学校長 池 田 延 己 83

VI 各管内（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況等

- ・石狩管内、渡島・檜山地区 87
- ・後志管内、空知管内 88
- ・旭川地区、名寄ブロック、留萌管内 89
- ・宗谷管内、オホーツク管内、釧根地区、十勝管内 90
- ・胆振管内、日高管内 91
- ・各管内（ブロック）の家庭科研究会事務局・加盟校数一覧〔平成25年度〕 92

VII 特別寄稿

- 北海道登別青嶺高等学校長 松 澤 正 枝 95
北海道南幌高等学校長 阿 部 広 美 96

- 編集後記 北海道洞爺高等学校長 佐々木 淑 子 97

巻 頭 言

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 加 藤 和 美

平成 25 年度家庭部会の事業は役員・会員の皆さまのご協力のもと予定通り終了することができました。特に 7 月 30 日・31 日に開催しました 第 57 回全国高等学校家庭科実践研究会（北海道大会）におきましては、全道・全国から約 200 名の参加のもと、衣・食・住・保育及び防災教育について研究協議を行いました。また、北海道らしさを全面に出したアラカルト研修も高い評価を得ることができました。運営に関わりました校長先生や運営委員の先生方に心よりお礼を申し上げます。

さて、この 4 月から年次ごとに学習指導要領がスタートいたしました。グローバル化が急激に進行する社会の中で、生徒には自らの在り方生き方を考えさせ、「生きる力」を身につけさせるよう「教育の質の保証」が強く求められています。また、中教審の教育振興基本計画では教育行政の 4 つの基本的方向性が示され、①社会を生き抜く力の養成②未来への飛躍を実現する人材の養成③学びのセーフティネットの構築④絆づくりと活力あるコミュニティの形成が答申されています。これからの時代に求められる能力とその育成に向けた指導を具現化し、生徒の資質・能力を最大限に伸ばさせることが緊要です。このことを十分に理解した上で教育活動の展開を図らなければなりません。中でも、言語活動を取り入れた授業改善や観点別評価を実践しなければなりません。生徒が身に付けなければならないコミュニケーション能力・プレゼン能力を「ものづくり力」と言語活動力をセットで日々の授業や課外活動にて育むよう努めていかなければならないと思います。

家庭科教員とコンタクトを取り趣旨を理解し指導や意識啓発に努め支援体制を整えるようお願いいたします。併せて、「ホームプロジェクト活動」「学校家庭クラブ活動」との関連を図り、学習効果を高めるとともに、計画的・系統的に指導計画に位置づけるよう学習指導要領に記載されています。なお、平成 27 年には全国高等学校家庭クラブ研究発表大会（北海道大会）が札幌教育文化会館にて 7 月 30 日・31 日に開催されます。家庭科教員や生徒には、全国のブロックから選ばれた素晴らしい研究内容や発表力を見て授業実践に生かしてほしいと思います。

団体会計の縮減については、指摘された部分の改善に努めてきました。生徒への還元をねらいとして会費の値下げや意見発表大会を実施しました。また、技術検定委員会との会計の一元化も行い、事業の見直しに着手した改革の年でもありました。今後とも部会の事業の在り方を検討していかなければならないと思います。

これからの時代の家庭部会は、キャリア教育・消費者教育・食育等そして福祉教育との関連を重視した教育活動の展開が求められることから各学校での実践の成果をネットワーク化し情報の共有化及び交流活動がスムーズに行い、家庭科教員が多様な指導方法や教材を選択しながら授業改善に積極的に取り組み、更なる自己研鑽の場として環境整備を進める必要があると思います。今後の大きな課題として提言しておきます。

終わりになりますが、加盟 180 校の校長先生の理解のもと運営しております。家庭科教育の充実・発展のために引き続き多くの校長先生に加盟いただきますようお願い申し上げます。

巻頭挨拶

男女必履修家庭科三代目学習指導要領

北海道教育庁上川教育局教育支援課高等学校教育指導班
指導主事 石 川 博 史

日本の家庭科は学制発布以来、家事・裁縫を学習する教科、良妻賢母主義教育の要の教科になっていました。戦後の一時期を除き高等学校家庭一般も、長いあいだおおむね女子のみ必修の科目として扱われてきました。しかも、性別役割分業意識を前提としていたために、教育理論や教育内容にも多くの問題があったことは周知のとおりであります。

1994（平成6）年から学習指導要領の改訂に伴い、家庭科の履修方法が変わり、男女ともに、「家庭一般」、「生活一般」、「生活技術」の3科目から1科目4単位を選択し履修することとなりました。この大きな改革の直接的なきっかけは、1985（昭和60）年「女子に対するあらゆる形態の差別に関する条約」を批准するために第10条の教育条項「男女同一の教育課程」に抵触する実態の見直しがなされた結果であります。

私は家庭科が男女必履修となった2年後の1996（平成8）年に新採用として本道の高等学校家庭科教員となりました。その頃の家庭科に対する高校生の意識は、男女ともに「家庭科だけが共学でないのは不自然である」、「これからの社会生活では男性も家庭生活に必要な家事や育児等ができなければ不便である」といったものであります。

意外にも生徒にとって性差で履修教科に違いがあることは納得できないことであり、進学や就職に伴っての一人暮らしや家族を離れての単身赴任者の増加等は、良否はともかく普通の社会現象となっており、それに対応できる知識や技術が習得できる教科として捉えていることが

うかがわれ、女子のみ必修の家庭科を知らない生徒にとっては家庭科の男女必履修は時代の変化に伴う当たり前の出来事としてスムーズに受け入れられていたように感じました。

その後、2003（平成15）年から実施の学習指導要領の改訂を経て、家庭科にとっては、男女が必履修となり三代目となる新学習指導要領が平成25年より高等学校で全面实施され、家庭科が男女必履修となり20年目を迎えております。一代目で家庭科を履修した男子生徒が30代中盤となり、徐々にではありますが男女必履修の成果があらわれており、家庭科にとっては開花の時代といえます。

変化の激しい知識基盤社会である現代において、これまで以上に家庭科教育の果たす役割が重要になっております。今後も家庭科の活性化に向けて、先生方には①積極的な研究会等への参加による授業力の向上、②家庭科が料理・裁縫だけではなく生活そのものを学習していることの可視化、③学校家庭クラブ活動等の家庭科の学習成果が見える取組の外部への発信の3点についてお願い申し上げます。

最後に本家庭部会60周年を迎え、部会が家庭科教育の活性化のためにご尽力いただいておりますことにあらためて御礼申し上げます。また、平成25年度全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会の開催等、長年にわたり家庭科教育の充実や発展のために、並々ならぬご尽力をいただきました部会長である江別高等学校加藤和美校長をはじめ、登別青嶺高等学校松澤正枝校長、南幌高等学校阿部広美校長に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

I 六十年の歩み

六十年の歩み

～家庭部会設立五十年からの十年を中心に～

1 はじめに

北海道高等学校長協会家庭部会は、昭和28年(1953)に北海道の女子教育の活性化を支える組織として創設され、今年平成25年度(2013)で60年の節目を迎えた。

本部会設立50年目であった平成16年度(2004)においては、家庭科の校長・教頭を中心とした家庭部会50年史編纂特別委員会を組織し、半世紀にわたって本部会が取り組んだ数々の事業や活動等について資料としてまとめた。そして、「五十年の歩み」と題し、本誌「こですHOKKAIDO特別号 2005年版」において、家庭部会年表・研究協議会、家庭に関する学科及び部会規約の変遷など、家庭科教育の振興を図ってきた数々の歴史を、35ページにわたって掲載した。

その「五十年の歩み」の中で、当時白老高等学校長であった畠中康子氏が、家庭部会50年史編纂特別委員会委員長としてこう述べている。

『・・・(略)・・・これから部会に関係なさる方々には、この「五十年の歩み」を基として、今後10年、20年と節目毎に本部会の記録を整理してくださることを望みたい。・・・』

本部会設立60年の今年度においては、このような経緯を踏まえ、本部会組織にある調査研究委員会が中心となり、家庭部会及び家庭科教育に係わる記録をまとめ、本誌に掲載することとした。

特に、家庭部会設立50年目からの十年間の取組等について重点を置いたまとめとしたため、「こですHOKKAIDO特別号 2005年版」と併せてご覧いただき、本部会設立60年の歴史資料としてご活用くだされば幸いである。

2 家庭部会六十年史概観

五十年史を引き継ぎ、六十年間の歩みを概観すると次の5期に分けられる。

- (1) 第1期(昭和28年～昭和40年)
設立から規約が制定されるまで
- (2) 第2期(昭和41年～昭和53年)
普通科等の学校加盟の動きが見られるまで
- (3) 第3期(昭和54年～昭和63年)
会員数増加と家庭科教育の新しい方向性が示されるまで
- (4) 第4期(昭和63年～平成16年)
「こですHOKKAIDO」の発刊と調査研究委員会の充実が図られるまで
- (5) 第5期(平成17年～平成25年)
福祉教育を含めた組織・規約等の見直しと教員自身による研究協議会の運営まで

ここで、各期ごとに特筆すべき事業や活動等について年度を拾い記述する。

- | |
|--|
| (1) 第1期(昭和28年～昭和40年)
設立から規約が制定されるまで |
|--|

○昭和28年(1953)

- ・本部会設立、会員校19校、初代部会長は岩見沢西高校長 白岩 教氏(～昭和39年まで)
- ※全国校長協会家庭部会は昭和26年に創設
- ・高等学校産業教育研究集会(家庭科教育)が道教委と本部会との共催(～昭和40年)にて初めて開催(会場:室蘭清水丘)
- ※この研究集会が現在の「北海道高等学校家庭科教育研究協議会」に引き継がれている。

○昭和29年(1953)～昭和38年(1963)

- ※この期間の部会事業は「高等学校産業教育研究集会の開催運営」の記録が残るのみ。

○昭和33年(1958)

- ・全国家庭クラブ研究発表第6回大会を札幌市民会館にて開催(8/3~4)

○昭和38年(1963)

- ・本部会初の総会を開催(全国家庭部会総会のための特別委員5名を選出)
- ・全国校長協会家庭部会第13回夏期総会を札幌旭丘高校で開催(8/8~9) 300余名参加

○昭和40年(1965)

- ・部会規約の制定(8/6)
- ・家庭科技術検定が定着し、道内受検者数が食物・被服合せて2万人余りとなり、新潟県とともに全国最多に。

(2) 第2期(昭和41年~昭和53年)
普通科等の学校加盟の動きが見られるまで

○昭和41年(1966)

- ・全道家庭科研究集会を本部会主催で開催(8/20~21 会場:赤平西高)

○昭和42年(1967)

- ・総会にて、部会費を全日制2,000円、定時制1,000円に決定

○昭和43年(1968)

- ・本部会総会にて、連絡校を12支部に設置することを承認

○昭和44年(1969)会員校45校

○昭和45年(1970)会員校46校

- ・道教委へ家庭科教育に関する陳情及び要望事項を提出
- ・家庭課程校44校、家庭科技術検定実施校54校、学校家庭クラブ加盟校99校。

※全国校長協会家庭部会創立20周年、家庭科技術検定10周年記念式典挙行(11/17 東京都)

○昭和46年(1971)会員校40校

- ・文部省→道教委→道校長協会経由で補助金交付の通知を受ける。
- ・補助金をもって研究集録第1号を発行

○昭和47年(1972)会員校44校

- ・本部会から家庭科技術検定委員会を独立
- ・事業促進のため協力委員会(10名)を発足

○昭和48年(1973)会員校40校

- ・「家庭一般実習ノート」編集委員会開催

○昭和49年(1974)会員校39校

- ・本部会編纂「家庭一般実習ノート」発行・販売(一冊250円)
- ・全国校長協会家庭部会第32回秋季総会を札幌経済センターで開催(8/6~7) 223名参加
- ・第2回全国家庭科教員海外視察研修(ヨーロッパ五カ国) 副団長として岩西高:岩村校長

○昭和50年(1975)会員校37校

- ・「時代の進展に対応する産業教育振興方策についての研究~家庭科教育について~」発行

○昭和51年(1976)会員校35校

- ・全国家庭クラブ研究発表第24回大会を札幌市民会館にて開催(8/5~6)

○昭和52年(1977)会員校36校

- ・調査研究委員会は、①実習ノート改訂委員会 ②継続教育研究員会 ③新教育課程委員会の3つで構成

○昭和53年(1978)会員校56校

- ・普通科高校等の会員が増加(前年度2校から24校へ) 家庭に関する学科設置校32校
- ・「家庭一般実習ノート」改訂版を発行
- ・全国家庭クラブ研究発表大会にて美唄南高校が2年連続6度目の文部大臣賞(最優秀賞)を受賞

(3) 第3期(昭和54年~昭和63年)
会員数増加と家庭科教育の新しい方向性が示されるまで

○昭和54年(1979)会員校91校

- ・会員が大幅に増加(家庭に関する学科32校、普通科等59校)
- ・調査研究委員会は、①実習ノート委員会

- ②教育課程委員会 ③研究集録委員会 の
3つで構成
- ・家庭部会報創刊、研究集録15号記念号発行

○昭和55年(1980)会員校103校

- ・調査研究委員会は、①実習ノート委員会 ②
教育課程委員会 ③体験学習委員会 ④広報
委員会の4つで構成

○昭和56年(1981)会員校102校

- ・北海道版「家庭一般実習ノート」を廃止、全
国版「実験実習ノート」を採用（申込み73校
9,364冊）
- ・体験学習委員会は「家庭科体験的実習実践研
究集録」を発行

※「婦人差別撤廃条約」の「男女同一の教育課
程の確保」の条項を受け、全国家庭部会等で
「家庭一般」の履修の在り方が検討される。

○昭和57年(1982)会員校123校

- ・体験学習委員会は報告書を作成

※全国校長協会家庭部会30周年記念誌発行

○昭和58年(1983)会員校128校

- ・会員総数の中で普通科等の会員数が三桁へ
（家庭に関する学科32校、普通科等102校）
- ・学校家庭クラブ連盟加盟校70校
- ・全国校長協会家庭部会第50回秋季総会・研究
協議会を札幌市定山溪ホテルにて開催（9/28
～29）245名参加。「婦人差別撤廃条約」の
批准に対応し、家庭科教育の振興に関した要
望書を提出することを決定
- ・「実験実習ノート」採用校76校 10,511冊

○昭和59年(1984)会員校137校

- ・『「婦人差別撤廃条約」と「家庭一般」の履
修問題』資料集を発行

※文部省は「家庭科教育に関する検討会議」を
設置

○昭和60年(1985)会員校150校

- ・本部会に「家政科振興対策協議会」（2年間）
を設置し開催（7/8・9/24）

○昭和61年(1986)会員校147校

- ・「家政科振興対策協議会」を開催（11/18・
2/18）

○昭和62年(1987)会員校143校

- ・新しい家庭科教育を研究し推進するため、
「家庭科教育推進委員会」設立総会を開催し
（9/3）①家庭科教育検討小委員会 ②情報
教育推進小委員会 ③学校家庭クラブ推進小
委員会 の3つで構成

（4）第4期（昭和63年～平成16年）

「こですHOKKAIDO」の発刊と調査研究委員
会の充実が図られるまで

○昭和63年(1988)会員校138校

- ・「家庭科教育推進委員会」の3つの小委員会
が研究活動を進める。

○平成元年(1989)会員校146校

- ・第3小委員会（学校家庭クラブ推進小委員会）
は「北海道の家庭クラブ」を発刊。全道配布。
- ・本部会総会は年1回の開催となる。
- ・道教委へ「高等学校における家庭科教育に関
する要望書」を提出。陳情（7/31・8/8）
- ・第37回全国家庭クラブ研究発表大会を札幌市
民会館にて開催（8/2～4）

※高等学校の学習指導要領が告示。「家庭一般」
「生活技術」「生活一般」の3科目から男女
とも1科目選択し4単位を必修とする。

○平成2年(1990)会員校145校

- ・家庭科研究協議会の参加者が150名を越える。
- ・第1小委員会（家庭科教育検討小委員会）は
「新しい時代を創る家庭科教育」を発行

○平成3年(1991)会員校168校

- ・平成4年度秋季全国家庭部会総会北海道大会
準備運営委員会を発足させ、年5回の会議を
開催
- ・第2小委員会（情報教育推進小委員会）は「家
庭科教育における情報教育」を発行

○平成4年(1992) 会員校185校

- ・北海道高等学校家庭科研究集会から北海道高等学校家庭科教育研究協議会と改称し開催(7/29～30 函館市)、現在に至る。

- ・全国校長協会家庭部会第68回秋季総会を札幌市厚生年金会館にて開催(10/14～16) 全国各地より333名の参加を得て、史上最大規模の大会となる。

- ・調査研究委員会は、家政科関係と普通科における家庭科教育について研究する体制へ。

※全国校長協会家庭部会50周年記念誌発行

○平成5年(1993) 会員数193校

- ・家庭科設置校教頭会規約制定

※中学校新学習指導要領全面实施

○平成6年(1994) 会員校206校

- ・家庭科設置校科長会規約制定。

- ・部会報を「こですHOKKAIDO」と改名し発行
こ～Collected papers・・・集録
で～Domestic Science・・・家庭科
す～Studies・・・・・・・研究

家庭部会が研修してまとめ上げ、こうして仕上げる～「北海道はこうですよ!」の意味。

※高等学校新学習指導要領本格実施へ。高等学校家庭科男女必修となる。

※文部省は職業高校の名称を専門高校へ変更

『スペシャリストへの道』最終報告書完成

○平成7年(1995) 会員数215校

- ・道高等学校産業教育いきいきフェア開催

※福祉科校長会設立総会を開催

○平成8年(1996) 会員校224校

- ・第2回全国福祉科校長会を釧路市で開催(7/25～26)

○平成9年(1997) 会員数245校

- ・家庭科教育の推進のために、「家庭科教育推進準備会議」を開催(12/24)

※新教科「情報」「福祉」の創設

○平成10年(1998) 会員校251校

- ・特別委員会として、①家庭科教育推進委員会 ②家庭クラブ在り方検討委員会 の2つを設置(平成12年度まで)

○平成11年(1999) 会員校254校

- ・過去最高の会員校数を得る。

○平成12年(2000) 会員校252校

- ・福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を開催(11/17)

○平成13年(2001) 会員校250校

- ・特別委員会として、①家庭科新教育課程検討委員会 ②家庭に関する学科等検討委員会を設置

- ・全国校長協会家庭部会第86回秋季総会・研究協議会をホテルライフオー・札幌で開催(10/17～18) 314名参加

○平成14年(2002) 会員校249校

- ・第50回全国家庭クラブ研究発表大会を札幌市民会館にて開催(8/7～8)、50回記念大会として全国より1,170名参加。本大会は、全道家庭クラブ指導者養成講座を兼ねて各支部より参加(総会は中止)

- ・北海道産業教育フェア(全国産業教育フェアプレ大会)を札幌市で開催

○平成15年(2003) 会員校251校

- ・本部会50周年～次年度「五十年の歩み」として部会報「こですHOKKAIDO」特別号として編纂するための特別委員会「家庭部会50年史編纂特別委員会」を設置

- ・第13回全国産業教育フェア北海道大会を開催(10/17～19 月寒グリーンドーム)

○平成16年(2004) 会員校250校

- ・部会委員会として、①企画委員会 ②調査研究委員会 ③家庭部会組織等検討委員会 ④五十周年記念誌編集委員会 の4つで構成。

- ・「五十年の歩み」を部会報「こですHOKKAIDO」特別号として発行

- ・北海道産業教育フェア開催(11/6～7)

第5期（平成17年～平成25年）
福祉教育を含めた組織・規約等の見直しと
教員自身による研究協議会の運営まで

○平成17年(2005) 会員校246校

- ・ 委員会は、①企画委員会 ②調査研究委員会 ③家庭部会組織等検討委員会の3つで構成。家庭部会組織等検討委員会では、組織の見直し、規約の改正等について検討
- ・ 北海道産業教育フェア開催（10/29～30 札幌コンベンションセンター）

○平成18年(2006) 会員校244校

- ・ 家庭部会組織等検討委員会において、本部会と「学校家庭クラブ連盟」及び「家庭科技術検定」を一本化する組織の改編案が決議。平成19年度から施行予定
- ・ さんフェア家庭部会担当者会議開催（6/30）。
- ・ 北海道産業教育フェア開催（10/28～29 札幌コンベンションセンター）

※全国高等学校長協会家庭部会より福祉系校長会が独立（福祉部会）

○平成19年(2007) 会員校202校

- ・ 「学校家庭クラブ連盟」と「家庭科技術検定」を家庭部会の傘下に収め、新体制に。
- ・ 委員会は、①企画委員会 ②調査研究委員会の2つで構成

○平成20年(2008) 会員校187校

- ・ 本部会の活動として、①全国家庭部会との連携 ②家庭科教員による自主的な研究協議会の開催 ③家庭科技術検定の普及及び検定委員の養成 ④道家庭クラブ活動の支援 の4つを柱として取り組む
- ・ 道高等学校家庭科教育研究協議会が初めて家庭科教員が組織する運営委員会方式にて開催（7/29～30 札幌市教育文化会館）
- ・ 拡大役員研究協議会として役員に各地区理事を加え組織（役員10名+14名 計24名）

○平成21年(2009) 会員校192校

- ・ 本部会組織の活性化を図り、委員会活動を一層の充実させることに取り組む。
- ・ 調査研究委員会を、①Aグループ「キャリア教育の視点を踏まえた家庭科教育の在り方を目指して」 ②Bグループ「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の活性化を目指して」に分け、アンケート調査を実施
- ・ 平成22年3月 調査研究員会『調査研究のまとめ』発行

○平成22年(2010) 会員校191校

- ・ 全国校長協会家庭部会第104回秋季総会をホテルライフオート札幌にて開催（10/14～15）114名参加
- ・ 地区理事の名称を地区代表委員と改正
- ・ 委員会として、①企画委員会 ②調査研究委員会 ③福祉委員会（新規）の3つで組織
- ・ 道産業教育振興会（道産振）主催による意見発表大会において、福祉系分として一枠を増やし、本部会2校が発表（10/13）
- ・ 平成23年2月 調査研究員会『特色ある実践事例集』発行

○平成23年(2011) 会員校197校

- ・ 学科設置校教頭会と学科設置校科長会を合同開催（6/3）※1年のみ
- ・ 平成24年3月 調査研究員会『新学習指導要領に対応した高等学校家庭科の指導資料集（中間まとめ）～各学科に共通する教科「家庭科」～』発行

○平成24年(2012) 会員校209校

- ・ 企画委員会が中心となり、平成25年度全国家庭科実践研究会」の準備開始
- ・ 平成25年3月 調査研究員会『新学習指導要領に対応した高等学校家庭科の指導資料集～各学科に共通する教科「家庭科」～』発行

○平成25年(2013) 会員校182校

※次ページ以降の年表にて詳細を記載

3 五十年からの十年を振り返って

ここからは、家庭部会設立50年目からの十年間（平成16年度～25年度）の事業等について年表にまとめ、振り返ることとする。

平成16年度(2004)	
家庭部会の事業（部会長：酒井周文）	
4. 28	第1回理事研究協議会
5. 14	家庭部会総会
5. 24～25	全国家庭部会理事会・総会
5. 28	全国福祉理事会
7. 28～29	家庭科教育研究協議会（小樽）
10. 14～15	全国秋季研究協議会（長野市）
	・分科会A提言 金山 繁樹（美唄）
	・分科会B提言 畠中 康子（白老東）
10. 22	第1回組織等検討委員会
11. 6～ 7	北海道産業教育フェア
11. 19	福祉系高等学校研究協議会（釧路）
11. 26	第2回理事研究協議会
2. 4	全国家庭部会理事会
2. 21	第3回理事研究協議会
	第2回組織等検討委員会
3. 31	「こですHOKKAIDO 2005」発行
北海道家庭クラブ連盟（札幌西陵）	
加盟校：22校 生徒数：4,291名	
5. 11	第1回代議員会
7. 22～23	全国指導者養成講座（東京都）
7. 31～ 8. 5	全国研究発表大会（沖縄）
9. 15～16	道家庭クラブ連盟研究大会・総会（洞爺・檜山北）
2. 8	第2回代議員会
3. 31	「いとなみ」52号発行
家庭科技術検定委員会（名寄光凌）	
4. 27	第1回役員会
5. 27	全国代表理事会
7. 30～31	評価研究協議会（小樽潮陵）

平成17年度(2005)	
家庭部会の事業（部会長：酒井周文）	
4. 28	第1回理事研究協議会（札幌）
	第1回組織等検討委員会
5. 13	家庭部会総会
5. 23～24	全国家庭部会理事会・総会
6. 6	第2回組織等検討委員会
7. 27～28	家庭科教育研究協議会（置戸）
	第3回組織等検討委員会
9. 17	福祉系高等学校研究協議会（函館）
10. 13～14	全国秋季研究協議会
10. 20	第4回組織等検討委員会
10. 29～30	北海道産業教育フェア
11. 28	第2回理事研究協議会
	第5回組織等検討委員会
2. 4	全国家庭部会理事会
2. 24	第3回理事研究協議会
	第6回組織等検討委員会
3. 31	「こですHOKKAIDO 2006」発行
北海道家庭クラブ連盟（江別）	
加盟校：20校 生徒数：4,255名	
5. 10	第1回代議員会
7. 28～29	全国研究発表大会（千葉県船橋市）
8. 4～ 5	全国指導者養成講座（東京都）
9. 21～22	道家庭クラブ連盟研究大会・総会（岩見沢西・美唄）
2. 7	第2回代議員会
2. 21	「いとなみ」53号発行
家庭科技術検定委員会（名寄光凌）	
4. 27	第1回役員会・特別委員会
5. 27	全国代表理事会
7. 28～29	評価研究協議会（置戸）
5. 16～ 7. 31	家庭科技術検定実施期間
5. 24～12. 31	家庭科技術検定実施期間

平成18年度(2006)
家庭部会の事業（部会長：酒井周文） 4. 28 第1回理事研究協議会・各委員会 （組織等検討・企画・調査研究） 5. 12 家庭部会総会（ライフオート） 5. 22～23 全国家庭部会常務理事会、財 団評議員会、全国理事会、研究協 議会・総会、研究協議会（東京） 6. 7～ 8 学科設置校教頭会（岩見沢） 6. 30 さんフェア家庭部会担当者会議 10. 14～15 全国秋季研究協議会（高山市） 10. 28～29 北海道産業教育フェア（札幌） 11. 27 第2回理事研究協議会 2. 2 全国家庭部会常務理事会、財団理 事会、評議員会、全国理事会、研 究協議会（東京） 2. 23 第3回理事研究協議会 3. 31 「こですHOKKAIDO 2007」発行
北海道家庭クラブ連盟（江別） 加盟校：20校 生徒数：3,990名 5. 9 第1回代議員会（かでる） 5. 23 第1回全国評議員会・理事会・ブ ロック代表者会議（東京） 7. 27～28 全国研究発表大会（大阪） 8. 3～ 4 全国指導者養成講座（東京） 9. 20～16 道家庭クラブ連盟研究大会・ 総会（倶知安） 2. 7 第2回代議員会 2. 10 第2回全国評議員会・理事会・ブ ロック代表者会議（東京） 3. 31 「いとなみ」54号発行
家庭科技術検定委員会（名寄光凌） 4. 27 第1回役員会・専門委員会（札幌） 5. 25 全国検定代表理事会（東京） 8. 3～ 4 全国研究大会（群馬） 1. 12 評価研究協議会・検定員養成講座

平成19年度(2007)
家庭部会の事業（部会長：岩淵秀一） 4. 27 第1回役員研究協議会・企画委員 会・調査研究委員会（えるプラザ） 5. 11 家庭部会総会（ライフオート） 5. 21～22 全国家庭部会常務理事会、財 団評議員会、全国理事会、研究協 議会・総会、研究協議会 5. 30～ 6. 1 学科設置校教頭会（美唄） 6. 28 さんフェア学科設置校会議（江別） 7. 27～28 家庭科教育研究協議会（帯広） 9. 22～23 北海道産業教育フェア（札幌） 10. 18～19 全国秋季研究協議会（山形） 11. 30 第2回理事研究協議会（かでる） 2. 1 全国常務理事会・財団理事会・全 国理事研究協議会（東京） 2. 22 第3回役員研究協議会 3. 31 「こですHOKKAIDO 2008」発行
北海道家庭クラブ連盟（札幌北） 加盟校：19校 生徒数：3,578名 4. 26 第1回検定役員会・専門委員会 5. 8 第1回代議員会（札幌北） 5. 22 第1回全国理事評議員会（東京） 9. 26～27 道研究大会・総会（檜山） 2. 5 第2回代議員会（札幌北） 2. 9 第2回全国理事評議員会（東京） 3. 31 家ク「いとなみ」55号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：洞爺） 実施校：44校 受験者数：3,615名 4. 26 検定役員会・専門委員会（札幌） 5. 24 全国検定代表理事会（東京） 1. 11 評価研究協議会・検定員養成講座
福祉系校長会（事務局：函大妻） ※H18～全国では家庭部会より独立。 5. 18 全国福祉系校長理事会（東京） 9. 14 福祉系高等学校研究協議会（釧路）

平成20年度 (2008)
家庭部会の事業（部会長：熊谷 勉） 4. 26 第1回拡大役員研究協議会他 5. 16 家庭部会総会（ライフオート） 5. 26～27 全国家庭部会常務理事会、全国理事会、総会・研究協議会 6. 5～ 6 学科設置校教頭会（美唄） 7. 29～30 家庭科教育研究協議会（札幌） 10. 23～24 全国秋季研究協議会（高知市） 11. 2 全国産業教育フェア（大阪府） 11. 18 道産業教育意見発表大会（札幌） 11. 28 第2回拡大役員研究協議会 2. 20 第3回拡大役員研究協議会 3. 31 「こですHOKKAIDO 2009」発行
北海道家庭クラブ連盟（札幌北） 加盟校：15校 生徒数：2,208名 5. 13 第1回成人代議員会（札幌北高） 7. 24～25 全国指導者養成講座（東京） 7. 31～8. 1 全国研究発表大会（鳥取県） ※ホームプロジェクトの部において、札幌北3年佐藤菜々子さん文部科学大臣賞受賞 9. 25～26 道研究発表大会・総会（名寄市） ※最優秀【HPの部】札幌北 坪田乃朱さん 【SPの部】美唄高家庭クラブ 2. 3 第2回成人代議員会（札幌北高） 2月 「いとなみ」56号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：洞爺） 実施校：42校 受験者数：3,574名 4. 24 第1回常任委員会・専門委員会 1. 8 第2回常任委員会・専門委員会 1. 9 評価研究協議会・検定員養成講座
福祉系校長会北海道支部（事務局：函大妻） 5. 28（東京）8. 7～8（佐賀） 全国福祉系高校長会理事会 11. 21 福祉に関する教科・科目設置校研究協議会（函館市：函大妻）

平成21年度 (2009)
家庭部会の事業（部会長：熊谷 勉） 4. 24 第1回拡大役員研究協議会他 5. 14 家庭部会総会（ライフオート） 5. 25～26 全国家庭部会常務理事会、全国理事会、総会・研究協議会 6. 4～ 5 学科設置校教頭会（洞爺湖） 7. 29～30 家庭科教育研究協議会（札幌） 10. 13 道産業教育意見発表大会（札幌） 10. 15～16 全国秋季研究協議会（佐賀県） 11. 14 全国産業教育フェア（神奈川県） 11. 27 第2回拡大役員研究協議会他 2. 19 第3回拡大役員研究協議会他 2月 調査研究委員会より「調査研究のまとめ」発刊 3. 31 「こですHOKKAIDO 2010」発行
北海道家庭クラブ連盟（当別） 加盟校：13校 生徒数：2,032名 5. 12 第1回成人代議員会（当別高） 7. 23～24 全国指導者養成講座（東京） 7. 29～30 全国研究発表大会（青森県） 9. 25～26 道研究発表大会・総会（名寄市） ※最優秀【HPの部】札幌北 横関 恵さん 【SPの部】岩西高家庭クラブ 12月 歳末助け合い募金活動 2. 16 第2回成人代議員会（当別高） 2月 「いとなみ」57号発行 3月 全国連盟クラブ員表彰（7名）
家庭科技術検定委員会（事務局：江別） 実施校：41校 受験者数：3,355名 4. 24 第1回常任委員会・専門委員会 1. 8 第2回常任委員会・専門委員会
福祉系校長会北海道支部（事務局：江陵） 5. 25（東京）8. 11～12（広島）全国校長会 9. 18 福祉に関する教科・科目設置校研究協議会（幕別町：江陵）

平成22年度(2010)
家庭部会の事業（部会長：熊谷 勉） 4. 23 各委員会（企画、調査研究、福祉、全国大会実行）①役員研究協議会 5. 14 家庭部会総会（ライフオート札幌） 6. 3～ 4 学科設置校教頭会（北見市） 7. 28～29 家庭科教育研究協議会（札幌） 10. 13 道産業教育意見発表大会（札幌） ※福祉系学校枠増やす。（江陵：努力賞） 10. 14～16 全国秋季研究協議会北海道大会運営（ライフオート札幌）114名参加。 ※分科会A提言 吉村恭子校長（洞爺） 11. 26 各委員会（企画、調査研究、福祉、全国大会実行）②役員研究協議会 2. 25 ③役員研究協議会 2月 調査研究委員会より『特色ある実践事例集』発刊。 3. 31 「こですHOKKAIDO 2011」発行
北海道家庭クラブ連盟（当別） 加盟校：17校 生徒数：1,987名 5. 11 ①成人代議員会（当別高） 5. 9～15 家庭クラブ週間活動（各校） 8. 5～ 6 全国研究発表大会（福岡県） 9. 15～16 道研究発表大会・総会（洞爺） ※最優秀【HPの部】洞爺 小林碧帆さん 【SPの部】洞爺高家庭クラブ 2. 16 ②成人代議員会（当別高） 2月 「いとなみ」58号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：江別） 実施校：40校 受験者数：2,933名 4. 22 ①常任委員会・専門委員会（江別） 7. 27 ②常任委員会・専門委員会・検定員養成講座（江別）
福祉系校長会北海道支部（事務局：江陵） 9. 17 福祉に関する教科・科目設置校研究協議会（幕別町：江陵）

平成23年度(2011)
家庭部会の事業（部会長：加藤和美） 4. 22 ①役員研究協議会他（かでる） 5. 13 家庭部会総会（ライフオート） 5. 25～26 全国家庭部会常務理事会、全国理事会、総会・研究協議会 6. 3 家庭・福祉学科設置校教頭会及び科長会合同開催（江別高） 7. 28～29 家庭科教育研究協議会（札幌） 8. 6 道さんフェア2011（ライフオート） ※ 展示・意見体験発表・作品研究発表 10. 15～16 全国秋季研究協議会（群馬県） 2. 19 ②役員研究協議会他 ※今年度より役員研究協議会を年2回に。 3. 31 調査研究委員会より『新学習指導要領に対応した高等学校家庭科の指導資料集（中間まとめ）』発刊。 3. 31 「こですHOKKAIDO 2012」発行
北海道家庭クラブ連盟（札幌珠） 加盟校：17校 生徒数：1,908名 5. 10 ①成人代議員会（札幌珠） 5. 8～14 家庭クラブ週間活動（各校） 7. 28～29 全国研究発表大会（山梨県） ※HPの部及びSPの部とも、山梨県教育委員会賞（第三位）受賞。 9. 13～14 道研究発表大会・総会（倶知安） ※最優秀【HPの部】札幌 横山 円さん 【SPの部】江別高家庭クラブ 2. 16 ②成人代議員会（当別高） 2月 「いとなみ」59号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：江別） 実施校：40校 受験者数：3,220名 4. 21 常任委員会・専門委員会
福祉系校長会北海道支部（事務局：置戸） 9. 16 福祉に関する教科・科目設置校研究協議会（置戸町：置戸高）

平成24年度(2012)
家庭部会の事業（部会長：加藤和美） 4. 20 家庭・福祉設置校科長会（当別） 4. 23 ①役員研究協議会他 5. 11 家庭部会総会（ライフオート） 7. 31～ 8. 1 家庭科教育研究協議会 ※運営研究員による運営5年目。 10. 11～12 全国秋季研究協議会（兵庫県） 10. 19 家庭・福祉設置校教頭会（札幌） 2. 22 ②役員研究協議会他 3. 29 調査研究委員会より『新学習指導要領に対応した高等学校家庭科の指導資料集～各学科に共通する教科「家庭科」～』 3. 29 「こですHOKKAIDO 2013」発行
北海道家庭クラブ連盟（札丘珠） 加盟校：16校 生徒数：1,936名 5. 8 ①研究協議会（札丘珠高） 5. 6～12 家庭クラブ週間活動（各校） 8. 2～ 3 全国研究発表大会（奈良県） ※HPの部において「産業教育振興中央賞」（第二位）を札北 横山さんが受賞 9. 12～13 道研究発表大会・総会（名寄） ※最優秀【HPの部】札北 野口 藍さん 【SPの部】札丘珠高家庭クラブ 2. 21 ②研究協議会（エルプラザ） 2月 「いとなみ」60号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：当別） 実施校：42校 受験者数：3,574名 4. 24 第1回常任委員会・専門委員会 1. 8 第2回常任委員会・専門委員会 1. 9 評価研究協議会・検定員養成講座
福祉系校長会北海道支部（事務局：函大妻） 8. 1～ 3 全国福祉系高等学校長会 第18回総会・研究協議会～函館大会～ 開催し300余名の参加。

平成25年度(2013)
家庭部会の事業（部会長：加藤和美） 4. 25 ①役員研究協議会他 4. 26 ①全国実践研究会運営研究協議会 5. 10 家庭部会総会（ライフオート） 5. 27～28 全国家庭部会常務理事会、全国理事会、総会・研究協議会 6. 6 ②全国実践研究会運営研究協議会 6. 27 ③全国実践研究会運営研究協議会 7. 3 ④全国実践研究会運営研究協議会 7. 29 ⑤全国実践研究会運営研究協議会 7. 30～31 全国実践研究会兼道家庭科教育研究協議会（かでの2.7）128名の参加 ※詳細は本誌p. 28～p. 53 9. 17 本部会主催「意見・体験発表大会」（江別）全道9校11発表 10. 8 道産業教育意見・発表大会（江別）各部会より代表 計14校参加 10. 17～18 全国秋季研究協議会（広島県） 11. 8 ⑥全国実践研究会運営研究協議会臨時役員研究協議会（江別） 2. 21 ②役員研究協議会・各委員会（企画・調査研究） 3. 29 「こですHOKKAIDO 2014」～60周年記念号～発行
北海道家庭クラブ連盟（当別） 加盟校：15校 生徒数：1,891名 5. 7 ①研究協議会（当別高） 7. 25～26 全国指導者養成講座（東京） 8. 1～ 2 全国研究発表大会（新潟県） ※HPの部において、札北高3年野口さんが「文部科学大臣賞」と「クラブ員奨励賞」をダブルで受賞。 8. 29～30 道研究発表大会・総会（札幌） ※最優秀【HPの部】札北 百瀬美樹さん 【SPの部】名寄産高家庭クラブ

※初めての運営委員会方式での開催	
12月	歳末助け合い募金活動
2.21	②研究協議会（当別高）
2月	「いとなみ」61号発行
家庭科技術検定委員会（事務局：当別）	
実施校：42校 受験者数：3,574名	
4.19	第1回常任委員研究協議会・専門委員研究協議会（当別高）
8.1	第2回専門委員研究協議会・検定委員養成講座（当別高）

福祉系校長会北海道支部（事務局：函大妻）	
9.20	福祉に関する教科・科目設置校研究協議会（留寿都）
※全国加盟校数214校	
※北海道代表理事（H26：函大妻、H27・28：置戸、H29・30：江陵）	
※研究協議会開催	
（H26：江陵、H27：剣淵、H28：置戸、H29：函大妻、H30：留寿都）	

【参考文献等】

- ・北海道高等学校長協会「会誌」
- ・全国高等学校長協会（四十年史・五十年・六十年史）年表・資料編
- ・全国高等学校長協会家庭部会「家庭部会報」
- ・北海道高等学校長協会家庭部会誌「こですHOAIDO」
- ・北海道高等学校家庭クラブ連盟機関誌「いとなみ」
- ・北海道高等学校長協会家庭部総会資料

なお、その他参考資料として、次の【資料1】「家庭科技術検定」実施校等の推移の他、【資料2】歴代校長名簿一覧、【資料3】学科設置校の変遷、【資料4】家庭部会関連規約（この十年で改正等をした規約）を添付した。

【資料1】 「家庭科技術検定」実施校等の推移

種別/年度		H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
実施校数		37	42	41	44	42	41	40	40	42	41
4級	被服	662	488	535	535	509	479	314	241	238	392
	食物	1,367	1,461	1,207	1,271	1,234	1,306	1,161	1,472	1,207	1,156
3級	被服	329	342	334	226	252	179	163	202	159	211
	食物	979	848	593	735	759	661	637	630	661	728
2級	和服	106	86	121	108	105	95	81	90	77	71
	洋服	160	90	117	98	113	92	64	47	90	49
	食物	420	304	364	310	328	258	291	233	293	294
1級	和服	102	67	61	85	65	66	49	62	43	53
	洋服	79	84	51	77	60	55	42	51	41	51
	食物	246	233	132	170	149	164	131	192	141	168
合 計		4,450	4,003	3,515	3,615	3,574	3,355	2,933	3,220	2,929	3,173

【資料 2】

家庭部会関連組織 歴代校長名簿一覧

(平成26年2月1日現在)

※細間しず以外は校長

	年度	西暦	家庭部会長	家庭科技術検定委員長				学校家庭クラブ		高等学校教育研究会	
				南		北		成人会長(事務局校)		部会長 (事務局校)	
昭	27	1952						安宅喜太郎	札北		
	28	1953	白岩 教					安宅喜太郎	札北		
	29	1954	白岩 教					安宅喜太郎	札北		
	30	1955	白岩 教					安宅喜太郎	札北		
	31	1956	白岩 教					安宅喜太郎	札北		
	32	1957	白岩 教					和田 数雄	札北		
	33	1958	白岩 教					和田 数雄	札北		
	34	1959	白岩 教					宮田 新一	札西		
	35	1960	白岩 教					宮田 新一	札西		
	36	1961	白岩 教	白岩	教	松本 利一	美唄南	萩原 獅郎	札西		
	37	1962	白岩 教	白岩	教	松本 利一	美唄南	萩原 獅郎	札西		
	38	1963	白岩 教	白岩	教	松本 利一	美唄南	吉村 忠幸	札東	細間しず	札南
	39	1964	白岩 教	松本 利一	利一	滝田彦丞	旭北	吉村 忠幸	札東	細間しず	札南
	40	1965	滝田彦丞	長尾 林	信義	滝田彦丞	旭北	坂本 三男	札東	細間しず	札南
	41	1966	滝田彦丞	林 信義	信義	滝田彦丞	旭北	福井 源七	札東	細間しず	札南
	42	1967	林 信義	林 信義	信義	深田 賢正	旭北	福井 源七	札東	細間しず	札南
	43	1968	林 信義	林 信義	信義	深田 賢正	旭北	福井 源七	札東	細間しず	札南
	44	1969	林 信義	林 信義	信義	深田 賢正	旭北	福井 源七	札東	細間しず	札南
	45	1970	能勢 寿雄	千葉 正	信力	能勢 寿雄	赤西	斉藤 国夫	札啓成	直木 通	札西
	46	1971	能勢 寿雄	中村 力	伊達	能勢 寿雄	赤西	斉藤 国夫	札啓成	直木 通	札西
	47	1972	加藤 重雄	納田 春樹	美唄南	吉山 嶺子	遠軽家	川原 イト	札東	川原 イト	札東
	48	1973	岩村 正喜	塚原 賢三	俱知安	吉山 嶺子	遠軽家	川原 イト	札東	川原 イト	札東
	49	1974	岩村 正喜	山口 賢三	俱知安	太田 折笠	江部乙	川原 イト	札東	石橋 庄吉	札啓成
	50	1975	岩村 正喜	山口 賢三	俱知安	折笠 輝夫	江部乙	高山 秀丸	札東	石橋 庄吉	札啓成
	51	1976	岩村 正喜	山口 賢三	俱知安	折笠 輝夫	江部乙	高山 秀丸	札東	石橋 庄吉	札啓成
	52	1977	塚原 春樹	内田 淳一	当別	磯村 尚志	名短附	高山 秀丸	札東	谷川 伸	札啓成
	53	1978	塚原 春樹	内田 淳一	当別	磯村 尚志	名短附	高山 秀丸	札東	谷川 伸	札啓成
	54	1979	小林 純幸	小林 純幸	江別	及川 哲哉	釧星	柳川 重男	札西陵	加藤 重雄	札北
	55	1980	小林 純幸	小林 純幸	江別	及川 哲哉	釧星	柳川 重男	札西陵	加藤 重雄	札北
	56	1981	磯村 尚志	田口 厚	美唄南	芦原 茂夫	上川	柳川 重男	札西陵	加藤 重雄	札北
	57	1982	磯村 尚志	寺嶋 巖	美唄南	芦原 茂夫	上川	柳川 重男	札西陵	加藤 重雄	札北
	58	1983	磯村 尚志	寺嶋 巖	美唄南	白鳥 章	遠軽家	大橋 実	札東陵	増川 暁児	札北
	59	1984	磯村 尚志	寺嶋 巖	美唄南	白鳥 章	遠軽家	大橋 実	札東陵	増川 暁児	札北
平	60	1985	上田 晃	木下 久則	伊達	白鳥 章	遠軽家	市毛 昌一	札北陽	村上 元治	札開成
	61	1986	上田 晃	木下 久則	伊達	白鳥 章	遠軽家	市毛 昌一	札北陽	村上 元治	札開成
	62	1987	秋山 茂夫	木下 久則	伊達	白鳥 章	遠軽家	市毛 昌一	札北陽	村上 元治	札開成
	63	1988	秋山 茂夫	阿部 眞次	岩西	泉 永親	釧星	梅澤 静人	当別	川治 静信	札開成
	元	1989	秋山 茂夫	阿部 眞次	岩西	泉 永親	釧星	梅澤 静人	当別	川治 静信	札開成
	2	1990	遠藤 昭夫	矢野 洵	岩西	佐藤 祝	釧星	近藤 静人	当別	本間 恒太	札新川
	3	1991	遠藤 昭夫	矢野 洵	岩西	佐藤 祝	釧星	近藤 静人	当別	本間 恒太	札新川
	4	1992	遠藤 昭夫	矢野 洵	岩西	佐藤 祝	釧星	近藤 静人	当別	本間 恒太	札新川
	5	1993	石原 秀哉	土屋 智	岩西	伊達	西達	阿部 治	札東	佐藤 祝	札篠路
	6	1994	石原 秀哉	石岡 博心	伊達	伊達	西達	玉山 隆信	札西	泉 為	札篠路
	7	1995	石原 秀哉	小嶋 文幸	伊達	伊達	西達	大東 俊郎	札西	橋場 昇	札啓成
	8	1996	本間 正啓	小嶋 文幸	伊達	伊達	西達	山田 晃	札西	新野 健	札真栄
	9	1997	本間 正啓	高山 正	当別	当別	別	池田 邦生	札篠路	新野 健	札真栄
	10	1998	藤森 利夫	高山 正	当別	当別	別	小松 洋	札篠路	佐藤 忠雄	札南陵
	11	1999	藤森 利夫	藤本 信一	当別	当別	別	三浦 良久	札篠路	菅原 正利	札南陵
	12	2000	今井 清則	白鳥 知之	美美	美美	唄	山本 清則	札北	菅原 正利	札南陵
	13	2001	今井 清則	米道 知之	美美	美美	唄	今井 清則	札北	菅原 正利	札南陵
	14	2002	上田 純一	米道 知之	美美	美美	唄	上田 純一	札西陵	大久保克洋	札開成
	15	2003	上田 純一	酒井 弘尚	上名	寄光	寄光	三ツ井 孝二	札西陵	佐藤 真	札開成
	16	2004	酒井 周文	清水 弘尚	上名	寄光	寄光	酒井 周文	札別	高 悦夫	大 麻
	17	2005	酒井 周文	清水 弘尚	上名	寄光	寄光	酒井 周文	札別	高 悦夫	大 麻
	18	2006	岩瀨 秀一	清水 卓典	洞 爺	洞 爺	爺	岩瀨 秀一	札北	廣田 邦生	大 麻
	19	2007	岩瀨 秀一	石原 卓典	洞 爺	洞 爺	爺	岩瀨 秀一	札北	廣田 邦生	大 麻
	20	2008	熊谷 勉	吉村 恭子	洞 爺	洞 爺	爺	安田 謙一	当別	新沼 明	札南陵
	21	2009	熊谷 勉	吉村 恭子	洞 爺	洞 爺	爺	安田 謙一	当別	新沼 明	札南陵
	22	2010	熊谷 勉	熊谷 勉	江別	江別	別	三國 文彦	当別	新沼 明	札南陵
	23	2011	加藤 和美	加藤 幸賢	江別	江別	別	館山 昭	札丘珠	成田 雅昭	札東陵
	24	2012	加藤 和美	加藤 幸賢	江別	江別	別	館山 昭	札丘珠	成田 雅昭	札東陵
成	25	2013	加藤 和美	本庄 幸賢	当別	当別	別	田邊 孝次	名産	阿部 広美	札南幌

【資料 3】

学科設置校数の変遷

◆家庭に関する学科設置校

年度 学校名（学科）	H 16	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	備 考
江別（生活デザイン）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
当別（家政）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
上磯（生活文化）	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	H16度末～閉科
岩見沢西（家政）	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	
（人間生活）	2	2	3	3	3	3	2	1	—	—	H23度末～閉科
美唄（生活デザイン）	3	3	3	3	3	3	3	—	—	—	
美唄尚栄（ 〃 ）	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	H24度末～閉科
三笠（食物調理）	—	—	—	—	—	—	—	1	2	3	
紋別南（家政）	3	3	3	—	—	—	—	—	—	—	H18度末～閉校
紋 別（家政）	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	H20度末～閉科
伊 達（家政）	3	3	2	1	—	—	—	—	—	—	H19度末～閉科
名寄光凌（生活文化）	3	3	3	3	3	—	—	—	—	—	
名寄産業（ 〃 ）	—	—	—	—	—	3	3	3	3	3	
釧路星園（生活文化）	4	5	5	3	1	—	—	—	—	—	H20度末～閉校
洞爺（生活ビジネス）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	H27度末～閉校
函館大妻（家政）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
（生活情報）	3	3	3	3	2	1	—	—	—	—	
（食物健康）	—	—	—	—	1	2	3	3	3	3	
清尚学院（調理）	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
（生活インテリア）	3	3	3	3	3	—	—	—	—	—	
（生活デザイン）	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	
（製菓衛生師）	—	—	—	—	—	1	2	3	3	3	
北海道文教大学明清 （食物）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
家庭に関する学級数	48	47	46	42	38	36	35	34	33	33	8校10学科

◆福祉に関する学科設置校

年度 学校名（学科）	H 16	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	備 考
置 戸（福 祉）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	H15～福祉
釧路星園（教養福祉）	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
（福 祉）	2	3	3	2	1	—	—	—	—	—	H20末～閉校
函館大妻（福 祉）	3	4	5	5	4	3	3	3	3	3	
江 陵（福 祉）	—	—	—	—	—	1	2	3	3	3	
福祉に関する学級数	11	10	11	10	8	7	8	9	9	9	3校3学科

※全国高等学校長協会福祉部会が設立されたのは平成19年度である。

【資料 4】 家庭部会関連の規約(平成25年5月現在)

北海道高等学校長協会家庭部会規約

(名称及び事務局)

第 1 条 この会は、北海道高等学校長協会家庭部会といい、事務局を部会長在任の学校に置く。

(目 的)

第 2 条 この会は、北海道高等学校長協会の趣旨に則り、家庭科教育及び福祉科教育の振興を図ることを目的とする。

(事 業)

第 3 条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 家庭科(含む福祉科)教育に関する調査研究。
- (2) 家庭科教育に関する研究協議会等の開催。
- (3) 福祉に関する教科・科目設置校研究協議会等の開催。
- (4) 高等学校家庭科技術検定の推進に関する事業。
- (5) 高等学校家庭クラブ活動の推進に関する事業。
- (6) 部会報の発行。
- (7) 家庭科(含む福祉科)教育の振興に関する要望及び陳情等。
- (8) その他必要と認める事業。

(会 員)

第 4 条 この会の会員は、家庭・福祉に関する学科を置く高等学校及び本会の趣旨に賛同する高等学校の校長とする。

(役 員)

第 5 条 この会に、次の役員を置く。

- (1) 部 会 長 1 名
- (2) 副部会長 若干名
- (3) 監 事 2 名
- (4) 理 事 若干名
- (5) 地区代表委員 若干名

(役員を選出)

第 6 条 この会の役員の選出は、次の通りとする。

- (1) 部会長は総会において選出するが、当分の間、北海道江別高等学校長があたる。
- (2) 副部会長は、北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長、北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長、家庭部会調査研究委員会委員長、家庭科教育研究協議会企画委員会委員長、全国福祉高等学校長会北海道地区理事及び部会長が指名した者とする。
- (3) 監事、理事及び地区代表委員は、会員より部会長が指名する。
- (4) 副部会長、監事及び理事は地区代表委員を兼ねることができる。

(役員の仕事)

第 7 条 この会の役員の仕事は、次の通りとする。

- (1) 部会長は、この会を代表し会務を統括する。
- (2) 副部会長は、部会長を補佐し、部会長不在のときは会務を代行する。
- (3) 監事は、会計業務を監査し、総会において監査報告する。
- (4) 理事は、原則として家庭及び福祉の学科設置校長とし、学科の推進に関する業務等を行う。
- (5) 地区代表委員は、役員会等で協議された内容について各支部へ連絡や報告を行う。

(役員の仕事)

第 8 条 この会の役員の任期は一年とし、再任は妨げない。

- 2 補欠により選任された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会 議)

第 9 条 この会の会議は、総会、役員会とする。

2 総会は、年 1 回 5 月に、部会長が招集し、次の事項を審議し決定する。

- (1) 予算及び決算
- (2) 事業計画
- (3) 役員の選出
- (4) 規約の改正
- (5) その他重要事項

3 役員会は、部会長、副部会長、監事、理事及び地区代表委員をもって組織し、必要に応じて部会長が招集する。

4 総会の開催が困難な場合は役員会を以てこれに代えることができる。

(委 員 会)

第 10 条 この会に次の委員会等を置くことができる。

- (1) 調査研究委員会
- (2) 家庭科教育研究協議会企画委員会
- (3) 北海道高等学校家庭科技術検定委員会
- (4) 北海道高等学校家庭クラブ連盟
- (5) 福祉委員会

2 委員会等の細則は別に定める。

3 その他、部会長が必要と認めた委員会を設置することができる。

(会 計)

第 11 条 この会の運営費は、会費及び寄付金、その他をもってこれに当てる。

2 この会の会費は年額 1, 500 円とする。

3 この会の会計年度は、毎年 4 月 1 日より始まり、翌年 3 月 31 日までとする。

(事 務 局)

第 12 条 この会に、次の職員を置く。

事務局長 1 名、事務局員 1 名、会計 1 名、事務局員若干名

2 職員は部会長の命を受けて部会の会務を処理する。

附 則

1 この会の運営に必要な細則は、役員会で定め総会に報告する。

2 この規約は、昭和 40 年 8 月 6 日より施行する。

昭和 40 年 8 月 6 日 制定

昭和 43 年 5 月 9 日 一部改正

昭和 48 年 5 月 9 日 一部改正

昭和 52 年 5 月 9 日 一部改正

平成 6 年 5 月 12 日 一部改正

平成 9 年 5 月 9 日 一部改正

平成 10 年 5 月 14 日 一部改正

平成 19 年 4 月 1 日 一部改正

平成 21 年 5 月 14 日 一部改正

平成 22 年 5 月 14 日 一部改正

平成 25 年 5 月 10 日 一部改正

北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校教頭会規約

(名称及び事務局)

第1条 本会は、北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校教頭会と称し、事務局を理事長の在任校に置く。

(目的)

第2条 本会は、会員相互に研究、連絡、協議等を行い、各学校の経営向上に資することを目的とする。

(会員)

第3条 本会は、北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校の教頭を会員として組織する。

(事業)

第4条 本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 会員相互の連絡、調整、情報交換等。
- (2) 研究会、講演会、見学会等の開催。
- (3) その他、本会の目的を達成するために必要な事業。

(役員と任務)

第5条 本会の役員と任務は、次の通りとする。

- (1) 理事長 1名 本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副理事長 1名 理事長を補佐し、理事長不在のときは会務を代行する。
- (3) 理事 1名 次期研究協議会の開催業務を行う。
- (4) 監事 1名 本会の会務及び会計を監査する。
- (5) 顧問 本会の運営について助言し、会の発展を援助する。

(役員を選出)

第6条 本会の役員を選出は、次の通りとする。

- (1) 理事長は、北海道高等学校長協会家庭部会長校の教頭とする。
- (2) 副理事長は、理事長校に近い学校の会員より選出する。
- (3) 理事は、次期研究協議会の開催校の会員より選出する。
- (4) 監事は、総会によって選出する。
- (5) 顧問は、北海道高等学校長協会家庭部会長とする。

(役員の任期)

第7条 役員の任期は1年とし、再任は妨げない。また、欠員が生じたときは、第6条により選出し、その任期は前任者の残任期間とする。

(会議等)

第8条 本会の会議等は、次の通りとする。

- (1) 総会は、年1回開催し、会務及び会計報告・審議、規約の改正、その他重要事項を審議する。
- (2) 研究協議会は、必要に応じて開催し、家庭科教育に関する研究及び情報交換を行う。

(会計)

第9条 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。

2 会費は、年額2,000円とし、毎年6月に徴収する。

3 必要に応じて臨時会費を徴収することができる。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日までとする。

附 則

この規約は、平成 5年 4月 1日から施行する。

この規約は、平成 19年 4月 1日から一部改正する。

北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校科長会規約

(名称及び事務局)

第1条 本会は、北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校科長会と称し、事務局を会長の在任校に置く。

(目的)

第2条 本会は会員相互に研究、連絡、協議等を行い、各学校の家庭及び福祉に関する教科の充実、発展に資することを目的とする。

(会員)

第3条 本会は、北海道高等学校家庭・福祉に関する学科設置校の科長を会員として組織する。

(事業)

第4条 本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 会員相互の研修、情報交換等。
- (2) 研究会、講演会、見学会等の開催。
- (3) その他、本会の目的を達成するために必要な事業。

(役員と任務)

第5条 本会の役員とその任務は、次のとおりとする。

- (1) 会長 1名 本会を代表し、会務を総括する。
- (2) 副会長 1名 会長を補佐し、会長不在の時は会務を代行する。
- (3) 監事 1名 本会の会務及び会計を監査する。
- (4) 顧問 本会の運営について助言し、会の発展を援助する。

(役員を選出)

第6条 本会の役員を選出は、次のとおりとする。

- (1) 会長は、校長協会家庭部会長校の科長とする。
- (2) 副会長は、会長校に近い学校の科長とする。
- (3) 監事は、別表により会長校を除き、輪番とする。
- (4) 顧問は、校長協会家庭部会長とする。

(役員の任期)

第7条 役員の任期は1年とし、再任は妨げない。また、欠員が生じたときは、第6条により選出し、その任期は前任者の残任期間とする。

(会議等)

第8条 本会の会議等は、次のとおりとする。

- (1) 総会は、年1回開催し会務及び会計報告・審議、規約の改正、その他重要事項を審議する。
- (2) 研究協議会は、年1回開催し、家庭科及び福祉教育に関する研究及び情報交換を行う。
- (3) 会議の計画・立案は監事が行う。

(会計)

第9条 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。

2 会費は年額1,000円とし、研究協議会等において徴収する。

3 必要に応じて、臨時会費を徴収することができる。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日までとする。

付則 この規約は、平成 6年4月 1日から施行する。
平成21年5月14日一部改正

北海道高等学校家庭科教育研究協議会規約

(名称及び所在)

第1条 本会は、北海道高等学校家庭科教育研究協議会と称し、事務局を会長が指定する学校に置く。

(目的)

第2条 本会は、会員の資質向上と北海道高等学校家庭科教育の振興を図ることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 高等学校家庭科教育研究協議会の開催
- (2) その他本会の目的達成に必要な事業

(会員)

第4条 本会の会員は、本道の高等学校家庭科教員及び本会の趣旨に賛同する者とする。

(役員)

第5条 本会には、次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 監事 2名

(役員の選出及び任務、任期)

第6条 役員を選出及び任務は、次のとおりとする。

- (1) 会長は北海道高等学校長協会家庭部会企画委員長とし、本会を代表し、会務を統括する。
 - (2) 副会長は校長協会家庭部会役員会で選出し、会長を補佐し、会長不在の時はその職務を代行する。
 - (3) 監事は校長協会家庭部会役員会で選出し、本会の会計を監査する。
- 2 役員任期は1年とし、再任を妨げない。
 - 3 欠員が生じた時は役員会で選出し、その任期は前任者の残任期間とする。

(運営研究員)

第7条 本会には、次の運営研究員を置く。

- (1) 家庭科の教頭
- (2) 会長が委嘱する教諭 若干名

(運営研究員の任務及び任期)

第8条 運営研究員は、家庭科研究協議会の企画・運営にあたる。

- 2 運営研究員の任期は、原則として2年とし、再任を妨げない。

(事務局)

第9条 本会の会務処理のため、事務局を置く。

- (1) 事務局長は原則として会長在任校の教頭とする。
- (2) 事務局員(若干名)は会長在任校及び近隣の高等学校家庭科教諭とする。

(会議)

第10条 本会の会議は、役員会及び運営研究協議会とする。

- 2 役員会は、会長が招集して次の事項を協議する。

- (1) 事業の企画、運営、実施に関する事項の協議及び決定
- (2) 予算、決算の承認
- (3) その他必要とする事項

- 3 運営研究協議会は、会長が招集して事業の実施に必要な研究内容・企画運営等の研究協議を行う。

(会計)

第11条 本会の経費は、研究協議会参加者の参加費及びその他の収入をもって充てる。

- 2 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日までとする。

(規約の改廃)

第12条 規約の改廃は役員会で審議し、北海道高等学校長協会家庭部会で決定する。

附則

- 1 この規約は平成19年4月27日より施行する。
- 2 この規約は平成24年5月11日より施行する。

Ⅱ 平成25年度家庭部会の報告

全国高等学校家庭科教育振興会・全国高等学校家庭部会報告

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 加藤 和美

I 財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会

平成25年5月27日(月) 14:10~17:20

ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者 財団理事 加藤 和美(江別)

評議員会 本庄 幸賢(当別)

1 報告

○24年度技術検定受検状況

①被服製作 56,855人

②食物調理 115,270人

計172,126人

前年比 -3,193人

③保育 101,147人

前年比+3,763人

2 議事

(1) 24年度事業報告

主な事業～技術検定関係、家庭科
実践研究会

(2) 24年度収支決算書

▽事業活動収入

196,170,118円

主な収入～検定事業

164,289,100円

出版事業

2,505,040円

▽事業活動支出

190,232,235円

(残) 5,937,883円

(3) 25年度事業計画

主な事業～技術検定関係等

(4) 25年度収支予算書

▽事業活動収入

188,281,000円

(5) 理事・評議員選出

理事長 山形 昭夫

(栃木県宇都宮中央女子高等学校長)

北海道代表理事 加藤 和美(江別)

評議員 本庄 幸賢(当別)

II 全国高等学校長協会家庭部会

●常務理事会

平成25年5月27日(月) 14:10~14:40

ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者 全国常務理事 加藤 和美(江別)

本庄 幸賢(当別)

1 報告

(1) 第108回秋季研究協議会兵庫大会

(2) 第56回家庭科実践研究会大分大会

(3) 保育・服飾系高等学校長会大阪大会

(4) 食物・調理科高等学校長会熊本大会

(5) 第21回産業教育フェア鹿児島大会

●理事会

平成25年5月27日(月) 14:50~17:20

ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者 全国常務理事 加藤 和美(江別)

本庄 幸賢(当別)

1 報告・連絡事項

(1) 財団理事会・評議員会報告

(2) 家庭部会常務理事会報告

2 協議事項

(1) 24年度事業報告

(2) 24年度会計決算報告

▽総収入額 15,864,502円

主な収入～会費 11,742,000円

6,000円×1,957校(北海道21校)

(3) 25年度退任校長表彰 全国35名

(4) 25年度家庭部会役員・財団役員

家庭部会・財団理事長

山形昭夫(栃木県宇都宮中央女子高等学校長)

北海道地区常務理事 加藤、本庄

(5) 25年度家庭部会事業計画

(6) 25年度家庭部会会計予算

▽総収入額 14,869,635円

主な収入～会費 12,000,000円

6,000円×1,950校(北海道21校)

主な支出～事業費

研究協議会負担金 1,200,000円

地区別校長会 900,000円

3 研究協議

家庭科に関する諸課題

4 その他

産業技術・情報技術等指導者養成研修

●総会・研究協議会

平成25年5月28日(火) 10:00～16:20

ホテルメトロポリタンエドモンド

出席者 全国常務理事 加藤 和美(江別)

本庄 幸賢(当別)

1 開会式

(1) 新理事長挨拶 山形昭夫

(2) 研究協議

①家庭に関する学科における地域産業を担う人材の育成について

「家庭科調査研究委員会」

東京都立忍岡高校校長 浦部万里子

②平成24年度家庭学科等卒業者の進路状況調査について

「進路調査研究部会」

埼玉県立鴻巣女子高校校長 深谷敬子

③家庭科教育の諸問題について

2 講演

【家庭部会記念講演】

「丸の内タニタ食堂の成功の秘訣」

TANITANS事業部長 南 修二氏

3 講話

「新学習指導要領の実施に当たって

ー平成25年度の課題ー」

文部科学省初等中等教育局教育課程課

望月 昌代 教科調査官

一、高等学校における指導のポイント

(一) 衣食住の内容の指導の工夫

◆高校は科学的に理解させることを重視

→「どうしてそうなるのか？」の原理・

原則を理解させる。

→中学校との題材の重複を考慮する。

→効果的な実験・実習、少ない回数でも

最大の効果を引き出す。

(二) 中学校で新設された内容とのつながりを把握する

◆生活の課題と実践→活発なホームプロジェクト活動

◆保育体験学習→高校の保育体験学習(子どもを育てる)

◆言語活動の重視

(三) 高校生との発達段階を踏まえる

◆中学校と高等学校の発達段階の違いについて

二、言語活動の充実

※今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点↓

知的活動、コミュニケーション、感性・情緒の基盤 ↓

思考力・判断力・表現力を育む→学力

《授業の工夫》

①考えを深める場面(一斉授業)→意見交換グループ討議

②発表する場面（教師の説明）→

ポスターセッション等の使用

③書く場面（板書を写す）→

レポートのまとめ、IT活用

三、指導力の向上

（一）家庭科で学習したことが、行動変容に結び付いていない（試験が終わると全て忘れる）〈ポイント＝伝えたいこと→伝える手法→伝えられたこと〉

・生徒に考えさせる機会を多くする授業、実験・実習などの体験的な活動への工夫

四、指導と評価の一体化（観点別評価方法）

（一）目的に準拠した評価の着実な実施

◆生徒の学習状況を判断する際の目安が明確になる

◆学習評価をその後の学習指導の改善に生かす

◆学校における教育活動全般の改善に結びつける

※このことにより学習指導のねらいが着実に生徒の学習状況として実現されていく

五、専門学科における課題

◆専門的な知識・技術の習得

センスを向上させる指導の工夫＝（様々なコンテストへのチャレンジ）

◆生活産業の社会的な意義や役割の理解
消費者ニーズの把握、商品開発能力の育成
＝（何を求めているか、考えさせる）

◆地域、関連企業との連携＝（外部の刺激が見識を広める）

六、これからの社会が求める知性

（21世紀は、色々な意見を集めて答を作り出す知性を求めている）※東京大学院、三宅教授の資料抜粋

◆一人ひとりが自分で考え、自分で判断して育てた知識、あるいはそうやって育て続けられる知識→自分の体験で支え、適用範囲を広げた知識

◆対話を通して自分の知識を育て続ける知識→言葉にしながら考えるスキル→知っている答が本当か、その根拠を確かめるスキル→自分の考えを統合編集して納得いく答を作り出せるスキル

◆ITの活用（使いこなせて当然）

七、今後のお願い

（一）家庭科担当教諭の研修会等への積極的な参加（下記参照）

→日々、社会の変化等を踏まえた新しい情報を生徒に伝達

→各種研究会等を通して、授業を見直し、質の高い授業を

（二）家庭科研究会の充実

→公開授業を通して、授業研究の充実

→学習成果の検証の充実（授業改善）

八、平成25年度各種研修・研究会等

【25年度 研修会】

①第57回 全国高等学校家庭科実践研究協議会（北海道大会） かでる2. 7
7/30（火）～7/31（水）

②平成25年度 産業・情報技術等指導者養成研修
8/5（月）～8/8（木）

③第63回 全国家庭科教育協会（ZKK）研究（東京大会）
8/6（火）～7（水）

【25年度 研究会】

①第61回 全国高等学校家庭クラブ研究発表（新潟大会）
8/1（木）～2（金）

終わりに

今後の家庭科教育は食育を通して「たくましく生きる力・支え合う力」等を養う、大きな役割を持っております。未来の子ども達のために日々、課題意識を持って取り組んでいただきたい。

第57回全国高等学校家庭科実践研究会〈北海道大会〉報告

I 主 催 全国高等学校長協会家庭部会 公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会
北海道高等学校長協会家庭部会

II 共 催 北海道高等学校家庭科教育研究協議会
後 援 文部科学省 北海道教育委員会 札幌市教育委員会 北海道高等学校長協会
北海道産業教育振興会 日本教育公務員弘済会北海道支部

III 期 日 平成25年7月30日(火)・31日(水)

IV 会 場 第1日目(全体会) 北海道立道民活動センター「かでの2・7」大ホール
第2日目(分科会：アラカルト研修) 札幌市内及び道内各会場

V 参加者 全国公私立高等学校家庭科教員等 200名

VI テー マ 生きる力を育む家庭科教育の充実を目指して～北の大地で考える生活と未来を拓く力～

VII 日程及び内容

◆第1日目 7月30日(火) 全体会

時 程	内 容	演 題・講 師 等
10:00 ～ 10:30	開 講 式	開式のあいさつ等
10:40 ～ 12:00	基調講演	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 望月 昌代 様
13:00 ～ 14:30	講 演	「日本文化と“着もの”」 NPO法人日本時代衣裳文化保存会理事長 宮島 健吉 様
14:45 ～ 16:30	実践報告	「防災の視点を取り入れた家庭科の授業～理論と実践をつなぐ～」 北海道教育大学札幌校 佐々木貴子 教授 北海道札幌丘珠高等学校 黒田さとみ 教諭

◆第2日目 7月31日(水) 分科会；アラカルト研修

講 座	内 容	会 場
A 衣	十二単や束帯などの講義と着装体験 色の文化とくらし	NPO法人日本時代衣裳文化保存会 北海道立道民活動センター「かでの2・7」
B 食	食品の生産と加工の実際	北海道岩見沢農業高等学校
C 食産業	北海道遺産を巡る・味わう ～札幌苗穂地区の工場群・記念館群～ 乳飲料工場見学・乳製品づくり	株式会社福山醸造工場 サッポロビール博物館 サツラクミルクの郷 サッポロさとらんど
D 住	北国のくらしと住まい	北海道立北方建築総合研究所
E 生活文化	アイヌ文化とものづくり	北海道立道民活動センター「かでの2・7」
F 食環境	北海道の食と観光 ゴミの減量とリサイクル～札幌市の取組～	白い恋人パーク 札幌市生涯学習センター「ちえりあ」
G 環境福祉	北海道のエコ 高齢者の生活援助	北海道大学学術交流会館 札幌福祉医薬専門学校
H 保育生活文化	子どもの発達と表現活動 北海道開拓の歴史と生活文化	北翔大学 北海道開拓の村 北海道開拓記念館

Ⅷ 大会内容（概要）

1 開講式

(1) 開式のことば

全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会会長

（北海道高等学校長協会家庭部会会長・北海道江別高等学校長）加藤 和美

(2) 主催者挨拶 全国高等学校長協会家庭部会理事長（栃木県宇都宮中央女子高等学校長） 山形 昭夫

第57回全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

本大会が、この雄大な北の大地にて、盛大に開催できますことは大きな喜びであります。お忙しい中ご臨席いただきました、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官望月昌代様はじめ、北海道教育委員会、北海道高等学校長協会のご来賓の皆様には厚くお礼申し上げます。

また、北海道はもとより、全国各地からご参集の校長先生方、家庭科の先生方に心から感謝申し上げます。先日から、各地で大雨が続いています。被害に遭われた地域の方々に対しまして、お見舞いを申し上げますとともに、一刻も早く平穏な生活を取り戻せるよう心からお祈りいたします。

さて、家庭科実践研究会は、教育現場からの実践報告、各地の特色を活かした実習を行うなど、教科指導に直接役立つ、その名のとおり実践的な研究会として、回を重ねております。改めて家庭科という教科に目を向けてみますと、従来から学習している衣・食・住の充実、人間生活の根本であることは言うまでもありません。加えて、社会における今日的な課題、たとえば、少子化や高齢化、生命の尊重や社会保障に関すること、複雑化・深刻化する環境問題、食の安全や消費者問題などは、そのまま教育の課題でもあり、家庭科の学習に大きく関わっています。家庭科では、そのような課題を、社会生活を営む上での基本である、家族や家庭を軸として、総合的に取り上げています。

このように、人間としての根本・基本に関わることを体験を通して学ぶ家庭科は、生きる力を育む上で、益々重要度を増しています。その重要度をしっかりと担っていくために、我々家庭科教育に携わる者が果たすべきは、若い世代に対して、家族や家庭の絆を大切に、家族や周囲との関わりの中で、社会の一員として成長していく能力や態度を、確実に身に付けさせることであると認識しています。

校長協会家庭部会は、家庭科教育の振興を目的として、様々な取組を行っていますが、全国各地で頑張っている先生方が、自信と誇りを持って日々の教育活動に当たり、果たすべきを果たせるよう支援していくこと、つまり、全国の先生方に、勇気と元気を与えることも、とても大切な役目であると考えています。その意味で、家庭科実践研究会の開催には大きな意義があります。

今大会のテーマ「生きる力を育む家庭科教育の充実をめざして～北の大地で考える生活（くらし）と未来を拓く力～」は、家庭科の課題と今後の方向性を見事に表しています。明日にかけて、講演や実践報告、北海道の特色を活かした実習が予定されています。ご参加の先生方におかれましては、先人たちが何を大切に育み、どのように後世に伝えてきたかを知り、さらに、未来に向かっては何をどう発信していったらよいかなどを、この爽やかな空気の中でお考えになり、その成果を各学校にお持ち帰りいただければと思います。そして、明日からの授業のみならず、教育全般にわたり元気に取り組んでいただければ、主催者としてこの上ない喜びであります。

結びに、本日まで入念な準備をしていただき、運営にご尽力いただきます北海道江別高等学校の加藤校長先生はじめ、家庭科の先生方、北海道の家庭部会の先生方、校長先生方、そして北海道教育委員会ほか関係されたすべての方々に、改めて感謝を申し上げまして挨拶といたします。二日間よろしくお願いいたします。



(3) 来賓挨拶

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

望月 昌代 様

皆さん、おはようございます。

平成25年度第57回全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会が、このように盛大なかたちで開催されますこと、心よりお喜びを申し上げます。そして、主管校であります江別高等学校をはじめ、多くの北海道の先生方に今日までご尽力いただいたことに、改めてお礼を申し上げます。

さて、今年度の1年生より年次進行となりますが、家庭科においても新しい学習指導要領がスタートしました。理科・数学は昨年度より始まっていますが、今年度をもって小学校も中学校も高等学校も、全ての新しい学習指導要領がスタートしたことになります。

新しい学習指導要領においても、「生きる力を育む」というこれまでの理念は変わりません。ただし、日本の置かれている状況、グローバル化が一層進む、そして社会において少子高齢化が進んで行く、このような中で、特に家庭科が果たさなければならない課題というのも大きく見えてきていると思います。後ほど話しますが、家庭科の魅力と威力ということについて、先生方も常に心にとめて授業をされていると思います。

家庭科の魅力というと、生活の中にいろいろな課題があり、それらについて学習する家庭科を学ぶことによって生活の視野が広がるということであり、そのことを生徒達にしっかりと教えていただきたいのです。

威力というのは、学んだことが生活に活かされ、時として自分の命を守る行動につながることもあるでしょうし、自分の生活を潤し、楽しく広げる役割もある。そういう力をもつことが家庭科の威力と思っています。そうは言っても、いろいろな課題があります。私たちは「今」という空気、生徒が生きている「今」を感じさせながら授業をしなければなりません。それゆえ、非常に幅広い内容について勉強しなければならないことも多く、家庭科の先生方が大変努力されたり、悩まれたりしていることも、日々感じています。家庭科実践研究会で互いに情報交換を行い、生徒にとってよりよい生活、そして、正に生きる力を育むその重要性を日々の授業の中で作り上げていただきたいと思います。

今日の全体会に加えて、明日はアラカルト研修があります。北海道の魅力に触れることもできますし、先生方の授業にすぐにも活用できるようなヒントが盛りだくさんのメニューになっています。

是非、この研究会を通して家庭科にとっての魅力と威力、そして生きる力を育むということを考える二日間であっていただきたいと思います。

最後になりましたが、今回の開催にあたりまして、全国高等学校長協会家庭部会をはじめ、北海道高等学校長協会家庭部会の校長先生方に大変お世話になりました。あらためてお礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

北海道教育庁学校教育局高校教育課長 小山 茂樹 様

ただ今ご紹介いただきました道教委高校教育課の小山でございます。

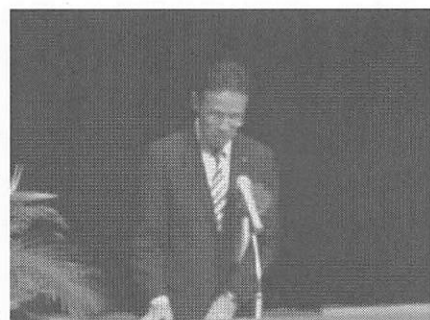
平成25年度第57回全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会の開会に当たり、一言、ご挨拶申し上げます。

全国の高等学校の先生方をお迎えし、さわやかな夏の北海道札幌におきまして、本実践研究会が、盛大に開催されますことを大きな喜びとするところであります。ようこそ北海道へおいでくださいました。心より歓迎申し上げます。

全国高等学校家庭科実践研究会は、これまで長年にわたって、家庭科教育の充実・発展に大きな役割を果たしてこられました。この間の関係の皆様のご努力に深く敬意を表する次第であります。

さて、本年度から、新学習指導要領が年次進行で本格実施となり、各学校におきましては、その趣旨を踏まえた教育課程の編成・実施に取り組んでいただいているところと思います。

今次の改訂においては、共通教科「家庭」の目標では、消費者教育や環境教育などへの対応が重視され、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中で総合的にとらえ、生活を主体的に営む能力と実践的な態度



を育てることや、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力を育てることなどが示されておりますし、専門教科「家庭」では、少子高齢化の進展や食育の推進などに対応し、衣食住や介護などのヒューマンサービスにかかわる生活産業のスペシャリストに必要な資質や能力を育成する視点が一層明確に示されております。

こうした中、本実践研究会が、「生きる力を育む家庭科教育の充実を目指して」をテーマに掲げ、文部科学省教科調査官望月様の基調講演をはじめ、NPO 法人日本時代衣裳文化保存会理事長宮島様の講演、防災教育の視点を取り入れた家庭科の在り方や実践の報告のほか、環境や福祉など、今日的な課題についてのアラカルト研修を通して、家庭科教育の充実に向けた効果的な指導の在り方や、地域の教育資源を活用した実践などについて研究協議を深められることは、誠に時宜を得たものであり、多くの成果があげられるものと確信しております。

道教委といたしましては、これまで、家庭科における、創意工夫を凝らした指導例などを「高等学校教育課程編成・実施の手引」に掲載し、各学校に配付するとともに、小中高校の教員などを対象とした「消費者教育指導者養成講座」を開催するほか、昨年度に引き続き、本年度も文部科学省の「消費者教育推進のための調査研究事業」に道立高校が指定を受け、消費者教育について教科横断的なカリキュラムや教材の開発などに取り組むこととしており、今後もこうした研究の成果を広く普及するなどして家庭科教育の充実に努めてまいりたいと考えております。

ご参加の皆様におかれましては、本実践研究会で得られました成果を各学校に持ち帰っていただき、学習指導の一層の充実に努めていただきますようご期待申し上げます。また、お忙しいスケジュールかとは存じますが、この機会に、北海道の味覚など夏の北海道の魅力を存分にご堪能いただければ幸いに存じます。

終わりに、本実践研究会の開催にご尽力いただきました関係の皆様方に心から敬意を表しますとともに、全国及び北海道高等学校長協会家庭部会並びに公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会のますますのご発展と、ご参加の皆様方のご健勝を心より祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

北海道高等学校長協会会長（北海道札幌月寒高等学校長） 山本 伸弘 様

ようこそ、北の大地ここ札幌にお越しいただきました。心より歓迎いたします。

第57回全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会が、このように盛大に開催されますことを、北海道高等学校長協会を代表いたしまして、心よりお祝い申し上げます。

さて、最近の北海道にかかわる話題の一つ取り上げてみますと、何と言っても三浦雄一郎さんの80歳代でのエベレスト登頂という快挙であります。私も、実際にお話を伺ったことがあります。失敗や挫折の中でも諦めずに熱意と意欲を持ち続けることや、何歳になっても今の自分を超越しようとする強い意志に、多くの人々が共感し、感動したのではないかと思います。

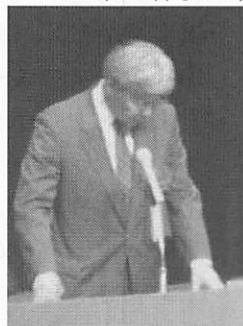
まさに今、自分自身の「未来」を模索している子どもたちにとっても、「夢」や「希望」を与える大きな力になったのではないかと思います。

ご承知のとおり、本年度、新しい学習指導要領による高校の教育課程が学年進行で本格実施となりました。青少年を取り巻く社会環境は急速に変化しており、教育の在り方や人としての生き方も大きく問われておりますが、高校教育は、義務教育と高等教育を結ぶ要であり、生徒に学びの意義や価値を認識させ、困難な時代を生き抜く力を身に付けさせるという重要な役割を担っています。

「生きる力を育む」という理念のもと、新学習指導要領の趣旨を実現することにより、高校教育の質を保証していくことが、高校教育に携わる私たちの責務であると思います。

家庭科教育には、自立した生活者を育成するため、少子化や高齢社会、資源や環境問題等、今、社会で何が起こっているのかを認識させ、生活していく上での課題を自ら解決する力を高めていくことが求められており、今日、家庭科教育の重要性がますます大きくなっているのではないかと思います。

また、東日本大震災以降、「絆」の大切さが叫ばれ、周囲の人々とのつながりを「財産」ととらえる考え方が注目されております。このような中、「生きる力を育む家庭科教育の充実を目指して～北の大地で考える生活（くらし）と未来を拓く力」をテーマに、自然豊かな北海道で本大会が開催されますことは、大変意



義深く、教科にかかわる情報を共有し、活用するとともに、それぞれの持つ力を結集していくことが大切であると考えています。

本大会の開催に当たりましては、皆様を歓迎するため、北海道の家庭科の先生方の力を結集し、懸命に準備していただきました。内容につきましては、文部科学省教科調査官の望月先生をはじめ、日本文化と着物にかかわる宮島様のご講演、防災教育の視点からの実践報告、そして、食産業やアイヌ文化等をテーマにした北海道らしい研修が予定されております。参加された皆様お一人お一人にとりまして実り多い研究会になりますよう心から祈念いたします。

終わりになりますが、ご参加の先生方の一層のご活躍、ご健勝を祈念し、挨拶いたします。

(4) 来賓紹介 全国高等学校家庭科実践研究会北海道大会運営委員長（北海道南幌高等学校長）阿部 広美

(5) 閉式のことは 北海道高等学校長協会家庭部会会長（北海道江別高等学校長）加藤 和美

2 基調講演「新時代の家庭科教育の充実に向けて」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

望月 昌代 様

（講演要旨）

新しい学習指導要領がもうスタートしているが、今という時代、そしてこれから起きている色々な世の中の流れや社会の変化に対応する力を生活者という切り口からとらえて区分が必要である。

そこで、学習指導要領の改訂のキーワードや小中高の家庭科の系統性、家庭科の魅力と威力、学習評価等について講演する。



(1) 教育振興基本計画の基本的方向性について

- ①社会を生き抜く力
- ②未来への飛躍を実現する人材の育成
- ③学びのセーフティネットの構築
- ④絆づくりと活力あるコミュニティの形成

(2) 高等学校家庭科の変遷について

- ①昭和35年告示の家庭一般4単位
- ②昭和45年告示の家庭一般4単位
- ③昭和53年告示の家庭一般4単位で、女子のみ必修
- ④平成元年告示から男女必修開始（家庭一般4単位、生活技術4単位、生活一般4単位）
- ⑤平成11年告示では家庭基礎2単位、家庭総合4単位、生活技術4単位
- ⑥平成24年告示では家庭基礎2単位、家庭総合4単位、生活デザイン4単位

(3) 多くの先生方から寄せられる質問について

- ①社会の情勢をみても家庭科教育は重要性が増していると考えますが、4単位必修が復活することはないか。
- ②2単位の「家庭基礎」の中では、技術指導が十分にできない。対策はあるか？
- ③「言語活動」については従来から、書かせる、発表させる活動を取り入れてきたが、さらに充実させるためには、今後どのようなことを取り入れればよいのか？

(4) 男女必修から20年の新時代の高等学校における家庭科の方向について

- ①生活の安全と安心である。重視すべき内容は、食育の推進で調理技術と理論・子どもや高齢者、社会福祉等、衣食住に関する内容と消費生活や環境との関連で、消費者教育推進法が施行され、家庭科における消費者教育を充実していく必要がある。
- ②知・徳・体の基礎から生活の基礎をつくる学習であるが、その課題は、家庭科の存在が可視化されて

(5) 共通教科「家庭」のキーワードについて

①空間軸では、家庭を築くことの重要性や食育の推進、子育て理解や高齢者の肯定的な理解、消費者教育や生活文化の理解と継承がある。

(6) 専門教科「家庭」改訂のキーワードについて

①生活産業の各分野で職業人として必要とされる資質や能力を育成

③諸課題に対して、倫理観をもって解決し、生活の質の向上と社会の発展を図る。

①生活体験のなさは、技術と知識の低下にもつながっており、例えば、包丁で皮をむくとか、針に糸を通すなども不器用で、高校生段階で当然できると考えられる技術ができない。

③出来上がりの予想を立てたり、手順を考えて合理的に作業することが苦手で段取り力がなく、図や文章を読み取る力も欠如しているので、学習したことが生活に活用でき、自信や学習意欲を高めるような授業づくりになっていることが必要である。

①衣食住の内容の指導の工夫において、「どうしてそうなるのか？」の原理・原則や中学校との題材の重複を考慮し、効果的な実験・実習、少ない実習回数でも最大の効果を上げるよう、高校は科学的に理解させることを重視している。

③中学校と高等学校の発達段階を踏まえ、生活の主体者として意思決定し、行動する力を育成することとしている。

①年間指導計画と評価計画の作成

③ ICT（タブレット端末）の効果的な活用

⑤ 授業力を高める視点として、

・解が一つでない課題への対応（課題解決能力、HP や学校家庭クラブ活動、地域と連携した活動へ）

(10) 言語活動の実施における課題について

②時間がかかることや、指導のポイントがつかみにくいことなどから、言語活動の位置づけを躊躇してしまう場合がある。

③学習評価との関係をどうとらえるかが不明確なまま指導がなされる場合がある。

(11) 指導と評価の一体化について

①新学習指導要領を踏まえた新しい観点

「関心・意欲・態度」・「知識・理解」（従前どおり）、「思考・判断・表現」（変更）、「技能」（変更）

②学力の3つの要素との整理

- ・基礎的・基本的な知識・技能
- ・課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力
- ・主体的に学習に取り組む態度

③目標に準拠した評価の着実な実施について

- ・領域や内容項目レベルの学習指導のねらいが明確になっていること
- ・学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているのかが具体的に想定されていること
- ・具体的な評価規準は、生徒の学習状況を判断する際の目安が明確になり、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすことができ、学校における教育活動全体の改善に結び付くものとなる

④観点別評価は、目的に準拠した評価の着実な実施のための評価規準の作成が必要であることから、国立教育政策研究所では「家庭総合」について、学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたとは、どのような状態になっているかを具体的に示した。

⑤観点の内容について

◆関心・意欲・態度

自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を身に付けているかどうかを評価する（～関心をもっている・～しようとしている・考えようとしている）。

◆思考・判断・表現

各分野の知識・技術を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を身に付けているかどうかを評価する（～考え、工夫している、自分なりに工夫している、～についてまとめたり、発表したりしている）。

◆技能

各分野において習得すべき技術を身に付けているかどうかを評価する（～（技術）できる、～情報を収集・整理、調査・分類することができる）。

◆知識・理解

各分野において習得すべき知識や重要な概念等を身に付けているかどうかを評価する（～について理解している）。

⑥評価における課題について

- ・高等学校においては、観点別学習状況の評価が定着しておらず、評価する事で自分の指導の在り方を見直す必要がある。
- ・例えば、意見をまとめる考査等のペーパーテストの工夫や技能の評価を効果的にする方法など、生徒が自分の意見をまとめやすく、教員も評価しやすいワークシートの工夫等効率的・効果的な評価方法の研究が必要である。
- ・評価の時期の工夫も必要である（例えば、適切な「関心・意欲・態度」の時期など）。
- ・1時間の授業に3観点も設定していたり、観点が指導の目標とずれていた、生徒の実態に応じた題材になっていないことに気がつかないまま、以前と同じ授業を続けている等、観点別評価を計画的に、効果的にしていく意図がみえない、授業の目的が明確でなく、評価計画が不十分な場合がある。
- ・ペーパーテストなどの客観的な部分にとらわれすぎて成績が良くないの事を生徒の責任にしていたりするのは、評価を指導の改善に生かす意識が不十分である。

(12) 家庭科教育の充実に向けて（先生方へのお願い）

数値化しやすい学力向上施策の中で家庭科の存在を高めて行くためには、「三本の矢方式」で教員が

心を一つにしていくことが重要で、家庭科研究会などの組織力を高めていくことと、生徒にとってよい授業をして、生徒を味方にし、校務分掌等にも積極的に取り組み、家庭科で学習している内容を可視化し、他の教科の先生方にも理解していただくなど、授業力の向上を図り、学校内の存在感を高める取り組みをしていくことが大切である。

(13) 家庭科教育をアピールするために

家庭クラブ研究発表大会等が重要な機会である。全国大会は、生徒が主体となり、生徒が成長する場である。これならできるといふ小さなことからコツコツとやっていくことで、管理職や他教科からの理解を得ることもできる。家庭科では、何を学習しているのか、生徒にどんな力を付けているのかを外部の方に伝えることもできる。

最後に、全国高等学校長協会家庭部会家庭科研究調査部会が、高等学校家庭科におけるキャリア教育・職業教育の在り方に関する調査研究において報告した「家庭科の授業が生き方・人生設計を考えるきっかけになった学習内容」について紹介して講演を終える。

※当日の資料（スライド）は、(p. 50～p. 53) に掲載しています。

3 講演「日本文化と“着もの”」

NP0法人日本時代衣裳文化保存会理事長

服飾文化史研究家・着装道古典宮島流宗家 宮島 健吉 様

（講演要旨）

日本にしかない日本のきもの文化と日本人だけが持つ豊かな着装文化を通して、日本の心と美を次世代に伝えたいという願いのもとに活動している。服飾文化は視覚の文化で、実際に着装した姿を見ていただくことで、少しでもご理解いただけるので、後ほど実演も行う。

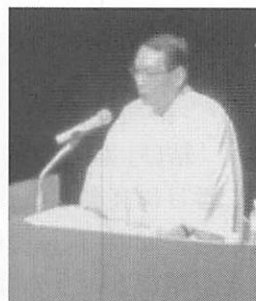
(1) 日本文化と“着もの”の関係

日本文化は「座礼式住居」と、その中で「きもの姿」で生活した日本人によって育成されたと考えられ、履き物の着脱と使い分けにも見られる。「座礼式」か「立礼式^{りゅう}」かという作法の違いによって文化度が大きく分けられ、今日に伝わっている。一口に着ものと言っても、「着物」は人類が身に付けるものという広義の意味の着衣であり、「きもの」となると洋服に対する和服という狭義の意味で使い分けている。日本も遣唐使を派遣するなど中国の模倣時代があったが、脱中国文化を目指したのは源氏物語の頃と思っている。寝殿造りの中では十二単の裾を引いても汚れないし、フラットで滑りやすい状態なので優雅に裾を引いた。外出する際は裾をからげるなど着装の一部を変えて履き物を履いた。これらが完成したのが、おそらく村上天皇の御代、970～980年で、純日本文化の創世・創造があったと考えられる。

〔次に、汗衫^{かざみ}（源氏物語に出てくる少女の十二単）の着付けと、平成時代の産着に関する解説があった。〕

(2) 人間と「衣生活」の関係

人間と動物との大きな違いは二つあり、一つは動物には衣生活がないこと、もう一つは動物は本能のままに生きるが人間は理性をもっていることである。人間だけが持っているものに「かたち」としての衣生活がある。見えないけれど、宗教心や信仰心というものも全て含めた「礼節」という心をもっているのが人間である。人間にしかない衣生活と礼節が横に結ばれ、我々の祖先はそれに思いを託し、きものの形・色・柄・着せ方を考えたと思う。「心とかたちの一致」を人間にしかできない「衣生活」で示し、今日に至っている。躰という文字があるが、中国からもらった漢字ではなく国字であり、身を美しくし続けるという動詞が名詞化したものである。しつけと称して罰を与えることとは全く違う。衣生活でのTPOを教え、その中で個性を発揮する着方、着せ方、選び方のことである。人間は相互依存をしな



ければならないし、相互扶助の中でも生活する。公共性を学ぶのも躰である。

(3) 日本の「きもの」文化

日本のきもの文化も一つに括ることはできない。生地・反物ができるまでを染織文化といい、出来上がった反物をきものにするには裁縫文化に委ねる。裁縫は裁断・縫製という2段階に分かれるが、ここできものと洋服の違いが明確になる。原始時代まで遡ると洋服の衣材料は毛皮が多く用いられ、日本は最初から織物である。三内丸山遺跡の約六千年前の地層から20×10センチの平織りの生地が出土したことから、おそらく我々の祖先は想定一万年前から織物を身に付けていたと推測される。今、私の着ている1枚のきものには約2700頭の蚕の命があり、それらの蚕は約98キロの桑の葉を食す。1反のきものにはたくさんの命と多くの手間・時間がかかっている。和裁を行う人は織物の一枚一枚に対し、それが「愛の結晶」として命が込められていることを理解して裁ち物をするので、平安時代の1000年前から肩山や袖山には決してはさみを入れない。約30年前、講演先のアメリカで「日本のきものの特徴は何か」と問われ、「V. S. O. P～ビックリするほどワンパターン」と答えたが、ハーフメードにしか作れないきものをその人に合わせるために着装文化、着付け・帯結びが誕生した。着装する人の手は、切れないはさみ、目盛りのない定規、布目をとおし、しわにならないためのアイロンの役目を果たす。やさしい「母の手」で仕上げる着装が始まったのである。

(4) 着装の方法

ひとりで着る自装は自主・自律と独創力を養う。他装は着せてあげる人と着る人が組になって行う。利己心を克服して、利他への思いやりを養う。感傷心を培い、同情心が芽生え、手助けすることができるようになる。これらを一気に行うのが他装である。触れ合いの遠い人に触れ合いをつくるのが着付けである。

〔次に、1000年前の細長姿（若年女子の準礼装、源氏物語に記述されている）の他装実演
衣紋札の自装によるきもの着装実演があった。〕

(5) 「結び（産霊）」を紐解く

「結び」の文献的初見は古事記で、まだビッグ・バンで天地が固まらない時に最初に三柱の神が誕生する。二番目に高御産巢日神が、最後に神産巢日神が生まれるが、二神に産巢日（むすび）という文字が使われている。930年代に源順（みなもとのしたごう）が編纂した和名類聚抄では、産霊と書いて「むすび」とした。結びというのは陰陽が和合した時に新しい生命や活動が生まれるということで、結びを誤ったり、作法が異なると、例えば陰陽が逆だとか左前等にすると悪神、禍津日が出現するとされる。福の神の到来を祈って一つ一つの結びに作法がある。帯結びにも右回りと左回りがある。今も十二単は1000年前から右回り（陰の巻き方）にし、武士、特に男子は左作法といって、襟を除いて、左を先に右を後に着付ける。武士は武力・権力を欲しがるとなる。相手を威嚇するという点では緋緞の鎧等も、よいものを身に付けることで味方には「我々の大将は頼りがいがあるので勝てる」と思わせ、敵に対しては「あのような大将の軍は強い」と感じさせる、威嚇のための威力を見せる装束一式と考える。天皇を中心とした公家社会は武家と異なり、権威を感じてもらうための装いとなっている。装いとは自我の表出である。身分も、心までも相手に知らせることが、デザインである。自装・他装を問わず正しい結び、美しい結びをしなければならないのは、格好いいとか、苦しくないとかという働きではなく、むしろ如才招福～「幸せに」という祈願をして着装するわけである。使う使わないの中に意味と心があり、その塊のようなものが結びであり、きもの文化だと思う。

親子の縁を結ぶ、特に女性の人生の通過儀礼の最初は、へその緒が結ばれて育ち、肺呼吸をしたとき初めてその緒が切れる、七五三、十三参り（大人の帯を結ぶ）、結納、結婚、岩田帯、そして最後に命の緒が切れる。人生の通過儀礼のほとんどが結びに関わっている。そこに日本人が結びに寄せる強い思いが感じられる。

〔次に、創作帯結び「花」 “アンスリウム・らっぱ水仙・
桔梗・百日草・はまなす” の実演があった。〕



4 実践報告「防災の視点を取り入れた家庭科の授業～理論と実践をつなぐ～」

北海道教育大学札幌校 佐々木貴子 教授

北海道札幌丘珠高等学校 黒田さとみ 教諭

(1) 佐々木貴子教授の講演内容（講演要旨）

私が防災の視点を取り入れた新たな家庭科教育の在り方に関する研究を始めたのは、平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震による災害（阪神淡路大震災）からである。私が、兵庫教育大学大学院生の時に指導していただいた教官が被災された時に、「家庭科という教科は、自分や家族の命を守り、より良い暮らしや町をつくっていくために学び、実践する教科。でも、この震災で多くの子どもたちが、自宅の倒壊や自分の部屋にある家具の転倒によって命を失いました。なぜ、子どもたちは自分の命を守ることができなかったの。」この言葉に、私は大きな衝撃を受け、この時から住居学の先生と一緒に研究を始めた。

災害とは、人々の生活の安全や生命、財産等が失われることである。災害には、自然災害（天災）、人災とに分けられる。地震や津波、大雨であっても、人々の生命や安全が確保され、財産等も失われなければ、それは災害ではなく単なる自然現象となる。

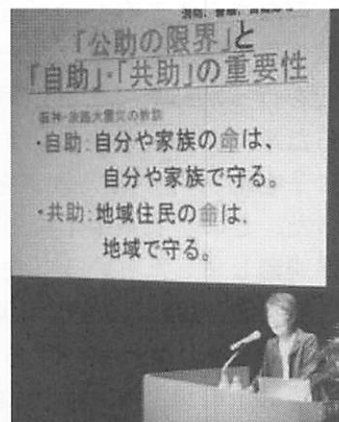
私の実家がある釧路では、躰けと称して地震のことを非常に強く指導していた。それが、非常に強く私の心に残っている。阪神地区では、地震なんて起きないという安心感か、なかなか地震の躰けとして家庭教育が行われてなかったのではないか思っている。

国には災害対策基本法という法律があり、この中には「・・・国土並びに国民の生命そして身体及び財産を災害から保護するため・・・」と、国によって国民の生命・財産が守られているが、阪神淡路大震災のときには、公助の限界というものが出された。公助の限界とは、大きな災害時に警察や消防や自衛隊などが国民一人一人の命を守ったり、救助には限界があるということで、公助の限界が出た後は、「自分の命は自分で守ってください」ということになった。また、「自分の命が守れたら隣近所を見回し、みんなで地域の人々の命を守ってください。」ということになった。さらに、国は、防災に対する考え方についても、人間が地震や津波などの自然災害を完全に防ぐことはできないので、災害による被害をできるだけ小さいものとどめ、被害をできるだけ出さないように取り組むことはできる」という発想から、減災という考え方が打ち出された。

つまり、国のスタンスは、「被害をできるだけ出さない被害抑止と、もし災害が起きた場合には災害対応をきちんと行って被害の連鎖を止め、早く社会の安定を回復させると、もう一つ外力（危険）に関する情報を的確に国民に出すから、その情報を入手し、正しい判断のもとに的確な行動を取ってください」ということであった。その情報は、テレビや携帯が教えてくれる。このように、非常に多くのメディアも外力（危険）の理解と情報の提供ということに、今、力を貸している。私たちは、テレビが情報を教えてくれるんだと、テレビに判断を任せてしまっている現実がある。また携帯からの情報もあり、携帯があるから、携帯を持ってさえいればみんなが繋がっている、それは本当だろうか。命に刻一刻と迫る時間に、守らなければならない命に対して、携帯で繋がっていて遥か彼方から助けが来ることで、本当に命が助かるのだろうか。そうではない。命は、すぐ傍にいる人々がやっぱり大切に育ててくれ、つくってくれるものだと思う。このようになった時に、本当に、携帯に依存していいのかなと改めて感じる。

阪神淡路大震災以降、これまでの行政が自然災害に立ち向かう構図から、みんなが一緒になり地域社会で災害に立ち向かう構図「自助・共助・公助」になった。国の防災へ中央防災会議は、研究や調査等を進めており、「現在の日本では、どの地域でも震度5弱以上の地震が起きる可能性」を示している。また、平成18年4月21日に内閣府は、災害被害を軽減する国民運動の推進に関する基本方針を出し、防災教育をしっかりと行うことを示した。

そこには、防災教育支援の基本的な考え方は、「防災教育で目指す能力は生きる力であり、防災への自発的・能動的な取組を促すことが必要である。日本の防災の在り方を再評価し、発展・浸透させることが問われているおり、防災教育が必要である」ということであった。その戦略として、学校や地域の防災における



「担い手・つなぎ手」づくり、学びの素材や場の提供、子どもたちの内発的動機づけや気づきを促すように防災に対する意識付けをすることが打ち出された。

みなさんもご存じの「釜石の奇跡」は、群馬大学の片田先生が、地域住民の腰が重かったなかで、地域住民を対象にした防災教育の研修会を行った結果である。平成17年12月からは、子供たちへ防災教育するために、防災教育に関する調査を始め、平成20年頃からは、少しずつ子どもたちの防災教育を深めていったことが、「釜石の奇跡」となった。この釜石東中学校の取組は「イーストレスキュー」と言われ、ボランティアをしながら、住民の方々が避難しましたという「安否札」を作って配るなどの活動を行なった。

ここで、2011年8月に震災からまだ僅か6ヶ月も経たない時に、子どもたちがくれたメッセージの中から、大切なことを3つ紹介する。

その1 想定外に対応できる力を身に付けるには、普段のことを真剣に行うこと。普段をしっかりとこそ大事なときに普段以上の力が出せる。これは避難訓練だけでなく、何事にも通じる本当のことだ。

その2 大人を信じ、お年寄りを大切にしよう。あるおばあちゃんの「生まれてからずっとあの崖が崩れることはなかった」という言葉で救われたから、長く生きている人の話には、絶対に意味と価値がある。

その3 語り継ぐことの大切さ。今日ここで分かち合ったものを、それぞれが、また別の誰かと分かち合い広めていく、語り継がれたものが、いつかまた誰かの命を救うかもしれない。

これをもとに、「津波、てんでんこ」（津波の時には、家族がてんでんばらばらに逃げるのが安全であるという先人の知恵）という言葉も見直されるようになり、教訓や伝承、防災教育の強化や主体的な参画による地域の防災力の向上などについて定める動きもある。しかし、震災を風化させないため、どうしたらよいかということも問題である。また、年代の高い方ほど、災害に備え、防災訓練やリーダー研修会等にも参加しているが、若い世代は、忙しさのためか、関係ないって思っているのか、防災の研修会等にも参加していない。

このため、災害に対する意識が低い住民の防災力を向上させるための手だてとして、災害イマジネーションゲーム＝DIG (Disaster ; 災害、Imagination ; 想像力、Game ; ゲーム) という手法を取り入れることにした。DIGは災害図上訓練ともいわれ、三重県鈴鹿市で誕生した。DIGには、「想像やイメージ訓練」と「地図上の訓練」に2つがある。この2つに内、「地図上の訓練」が重視されがちだが、私は「イメージ訓練」が大変大事だと思っている。それは、予想される巨大地震や津波にどのように備えるか、津波がいつ来るかと怯えて暮らすのではなく、もし来たらどうなるのかということをイメージし、その時に備え対応できるように普段から準備しておくことが求められると考えるからである。

家庭科という教科を支える学問は家政学で、家政学の母はエレン・H・スワロー・リチャーズである。彼女は、「正しい生活に関することの知識のために、私たちは名称を探して参りました。神学が宗教生活の学問であり、生物学が生命の学問であるように、エコロジーを私たちの健全な家族生活の学問に、健康でかつ幸福な家庭を築く基盤となる諸原理を教えるあらゆる応用科学のうちで、最も価値ある学問にいたそうではありませんか」と述べ、ヒューマン・エコロジーという考え方を提唱した。

防災の視点から授業を進めていくと、子育ての問題・福祉の問題・環境の問題、さらには経済や情報などあらゆる分野に広がる。また、家庭科は総合科学だから、いろいろな学問を繋げることができる。10代の高校生は、これから先60年も70年も生きていくなかで、災害はつきものである。その中で他者の命に配慮しながら自分の暮らしをどう守っていくのか、人や物、事とうまく関わり上手に生きることが求められている。このことを、家庭科という教科の中で、子どもたちに教えていかなければならない。リチャーズが「正しい生活」と言っている正しい生活とは、日本ではどうあるべきなのかが問われていると思う。

予想される巨大地震・津波にどう備えるか？

「いざは、普段なり」

いつ来るか、いつ来るかと怯えて暮らすのではなく、もし起きたらどうなるかをイメージし、その時に備え、対応できるように普段から準備しておくこと。

災害図上訓練「DIG」の誕生とは？

・三重県鈴鹿市の災害ボランティアネットワーク
(代表 南部 美智代氏)

・三重県の職員：平野氏
・元防衛庁の職員(現 富士常葉大学)：小村氏

アイデアが一緒になって完成したが、
原点は庶民の思いや願いから始まった。

* 1998年1月、三重県から全国へ発信

東日本大震災では、ボランティアする人の数が減っている状況であり、北海道で災害が起きたならば、ボランティアを行う人が来るだろうが、厳しい冬になるとボランティア活動はなかなか進まないと思う。そうなった時に、誰に助けてもらい、誰と助け合わなければならないのか、それは地域住民ということになる。今、子供たちが地域の繋がりから離れていて、地域に入っていない状況にあって、高校生が町内会役員になったという報道を知り、素晴らしいと感じ、どんな活動してるのか調べてみたいとも思う。みなさんのところの高校生はいかがだろうか。都会になるほど向こう三軒両隣という言葉すらも死滅になっている。でも、女子高校生は卒業し数年経つと妊婦さんになる可能性もあり、妊婦さんや赤ちゃんのいる家庭は、災害時要援護者に指定される。このようなことを、もしご近所さんに告げていなかったなら、いざとなった時に本当に助けてもらえる関係性があるのか、これも心配なところである。このようなことを踏まえて、黒田先生が実践をしている授業内容を紹介する。

(2) 黒田さとみ教諭の講演内容（講演要旨）

◆ DIGとの出会い

私は、帯広（十勝地方）の出身ということもあり、防災についてはしっかり取り組みたいと考えていたが、なかなか実践まで至らずに悩んでいたところに、佐々木教授の防災教育に関する講演やDIGを学ぶ機会を得て、大変効果があると思い、学習指導として実践するようになった。

◆ 生徒実態「防災に関する調査」

アンケート調査では、防災について実践している生徒は少ないこと、災害の少ない札幌という土地柄もあるが、他人事としてとらえる傾向であった。また、生徒にとっての防災とは、自助であり、共助まで考えが及んでいない。共助が大切であるという意識があっても、具体的に一歩踏み出す方法やきっかけがわからない状態であった。

◆ 授業改善に向けて～「家庭基礎」（2単位）におけるDIGを活用した指導～

<指導例1 住生活「健康で安全な住まいをつくろう」>

①採光や遮音、防犯等を学習した後に、防災を指導している。特に、東日本大震災を風化させないために、必要以上に恐怖をあおり地震が怖いで終わらせることがないように、なぜこうなったのか、どのような対応が必要なのかと具体的に実践的な問いかけをしている。

②初めに、DIGイメージネーション訓練を行う。教師は、地震発生時の状況をリアルに言葉で表現し、生徒は教師の表現に合わせて、自分の行動等を細かに想像する。その後、感想や意見等を発表する。

本時の展開（1/2時間） 「健康で安全な住まいをつくろう」

【3】DIGイメージネーション訓練1を行う。
①目を閉じて、大きな地震が起こった際の自分や家族の行動を想像する。
②地震発生時にすべきことについて意見を出し合い対策を考察する。

防災センターでの避難体験・地域支え合い講座・地震発生時の写真やコメントを提示。家庭クラブ活動での学んだことを紹介。



生徒の反応

- ・専門家の意見に関心をもちやすい。
- ・写真により短時間で様子が伝わる。
- ・地域や社会の動向を理解できる。

授業の展開（1/2時間） 「健康で安全な住まいをつくろう」

【4】DIGイメージネーション訓練2を行う。
グループごとに以下について話し合い、意見をまとめて発表する。（発表は次時に行う）
ア：地震発生直後、何をするか。
イ：避難するとき、どのようなことをするか。
ウ：避難場所は何を持って行くか。

高校には避難用品はあるのかな？
避難はどうなるかな？

なんで
そんなの要るの？

生徒の反応

- ・非常に意欲的。
- ・多様な疑問、アイデア、意見が出ている。
- ・班員への説明を通して、自他共に理解を深めている。

あ、そうか！！

③次に、丘珠高校周辺の地図を使い、生徒1人1人が馴染みのある地域を思い出しながら、DIGを行う。高齢者や妊婦が居る住宅、福祉施設や防災に関する施設等を確認する。

④次に、避難経路をチェックさせる。逃げることに夢中になってしまうと周りが見えないことに気付く生徒もいる。また、共助の大切さを理解させるために、近所の人が救助にあたることが多い事例で資料で説明する。しかし、まず自分の身を守ることが大事だということも、必ず付け加えている。

⑤最後に、DIG体験のまとめとして、他の生徒の意見も聞きながら、グループで話し合い、防災方法や避難方法等をまとめる。自分ができる自助や共助についても意見を出し合う。



<指導2 家庭クラブ活動への発展>

授業の展開(2/2時間) 「健康で安全な住まいをつくろう」

本時の目標

- ・「共助」への気付きから地域への関心と理解を高める。
- ・災害時における適切な行動を考察し、理解を深める。
- ・自分たちができる「自助」と「共助」について考察を深め、実践意欲を高める。

【1】発表

避難するときに、ガスの元栓を閉めていきます。

どうしてですか？

火災を防ぐためです。

パニックになって忘れそうじゃない？

みんなの質問にこたえてください

生徒の反応

- ・発表することへの抵抗が少なくなってきた。
- ・教師の発問に答えたり、クラス員からの質問にも答えることで、クラス全体で知識や疑問を共有したり、対策を考えようとする姿勢がうまれた。

ブレーカーは？

授業の展開(2/2時間) 「健康で安全な住まいをつくろう」

【2】DIG災害図上訓練を行う

①丘珠地区の地図を見ながら、高齢者宅・障がい者宅・妊婦宅・外国人宅や高齢者福祉施設・保育園・避難場所、防火水槽・緊急貯水槽などの場所と意味を確認する。

集中させるため、1人に1枚ずつ地図を渡し、個人で体験させる。自分の地域ではどうか想像するよう促す。

②地図上に仮の自宅を設定する。避難時を想像させ、避難経路と危険箇所をチェックする。「共助」できたか確認する。

ところで皆さん、避難所に向かう途中で近所の高齢者や妊婦さんに声をかけました？

ああっ！忘れた・・・
そういえば、そうだった・・・

- ①家庭クラブ活動は、学校全体やクラス全体で実施するものなので、クラスの意見が反映するように、また、家庭クラブ活動で行った内容や地域活動の様子等は、クラスに伝えるなど還元している。
- ②授業で行った防災教育「自助・共助」を普及するために、防災パンフレットを作成・配布、手作りマドレーヌ販売等を地域で行った。また、売上金を東日本大震災の義援金にした。
- ③授業で、「子どもの時期から防災教育をすべき」という意見があったことから、防災紙芝居やすごろく、カルタや絵本を家庭クラブの研究員で作成した。また、子ども向け防災教室を実施するために、近所の児童館で防災教室を行い、館長のアドバイスを受けながら改善を繰り返し、数回実施できた。
- ④家庭クラブ活動を、授業等をとおして報告し、更に意見を出し合うことで学びが繋がっていく、個々が繋がっていく良い機会になっている。今は、親子向けや高齢者向け防災教室も企画している。
- ⑤地域の方々の要望に応じて、実際にお宅訪問も行い、さらに地域に根ざした活動ができた。

(2) 学校祭、地域文化祭、丘珠生向けと定期的にチャリティマドレーヌ販売会を実施

学校祭での販売会。
研究活動を展示したり、ワークシートやパンフレットを配布。双六・DIG体験コーナーも設置。

マドレーヌ100円
利益は被災者へ寄付

丘珠地区の文化祭で実施。
地域の方々との交流も楽しく生徒には学びことも多い。

(3) 防災おもちゃの作成および防災教室の実施

授業での生徒の意見をもとに、「子ども向け防災教室」を実施。紙芝居のキャラクターや内容についてアイデアを募集し、研究員がまとめて児童館で実施する。

(4) 児童館での防災教室の実施

「実物を見せた方がよい」という意見を生かし、非常持ち出し品などを、子どもたちにも見せたり、触らせたりする。

(5) 地域へのお宅訪問

「自宅に訪問してほしい」という地域からの声をもとに、丘珠高校周辺のお宅を訪問し、啓発活動を行った。

今後も活動を継続・発展させたいという意欲が向上。主体性がうまれた。

◆成果と課題

- ①防災教育は、災害に遭遇した体験から学びでは手遅れとなる。日頃から、非常事態や災害を想定して対応できるDIG体験は効果的である。生徒や住民の個々の状況に応じて具体的に、対応を考えることができた。
- ②住生活の時間だけでは、防災教育に関する内容が深まらないので、家庭クラブ活動とリンクさせることで、実践的な活動ができた。実際に家庭クラブ活動に参加できない生徒もいるが、家庭クラブ活動の報告を受けたり、意見を述べる機会があるので、生徒同士には一体感共有感があり、間接的である

が、授業内容を深めることができた。

- ③ 今後は、限られた授業時間の中で、生活経験が乏しい生徒に、より生活者としての視点を育て、思考力や表現力を向上させるには、教師の生徒との関わりを大切にし、発する言葉を吟味することが重要であると感じた。

5 学習成果の展示について

第1日目の全体会会場において、北海道各地の公立高校や私立高校、専門学科や普通科等の家庭科の学習活動の一端を展示しました。

(1) 専門学科

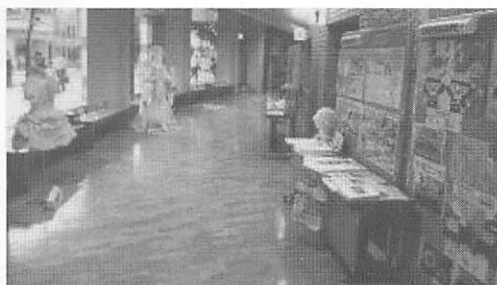
学校名・学科名	展示内容
江別 (道立)	生活デザイン科 ・課題研究における生徒作品を中心に ドレス、染め物(ブラウス・スカート・タイツ)、織物(ショール)、フェルトの帽子、1/2ドレス 他
当別 (道立)	家政科 ・保育コールの特別授業や実習、保育実習の様子を中心に 保育検定造形1～3級作品、授業風景(写真) 他
洞爺 (町立)	生活ビジネス科 ・学校紹介や生徒作品、地域活動(洞高カフェなど)を中心に ドレス、学校紹介パネル、コスチュームショーの様子、新聞エコバック、藍染め風呂敷 他
三笠 (市立)	食物調理科 ・学科紹介や授業風景、生徒の活躍の様子を中心に 生徒作品(マジパン)、コンクール賞状、コンクール作品レシピブック、地域との活動 他
清尚学院 (私立)	製菓衛生師科/調理科 ・学科紹介や授業風景を中心に シェフやパティシエの実習指導、ジンジャーブレッドコンテスト・クリスマスパーティー 他
函館大妻 (私立)	家政科/食物健康科/福祉科 ・学科紹介や生徒作品を中心に エプロンシアター、ドレス、知育おもちゃ、布絵本、刺し子 ランチョマット 他

(2) 普通科・商業科

学校名・学科名	展示の内容等
帯広緑陽 (道立)	普通科 ・ESD(ユネスコ：持続発展教育)への取組を中心に 日常生活を他国との関係で見つめ直す主体的な学習活動の紹介、啓発ポスター作成 他
帯広南商業 (市立)	商業科 ・特産物による商品開発等への取組を中心に パンキャラクターやクリスマスケーキの開発、学校・家庭・地域社会が一体となった取組紹介 他
平取 (道立)	普通科 ・地産地消と食育に関する取組を中心に 地元農協と連携し、特産物による商品開発(トマトジュース・ジャム)等の紹介 他

(3) 全体会での実践報告関連

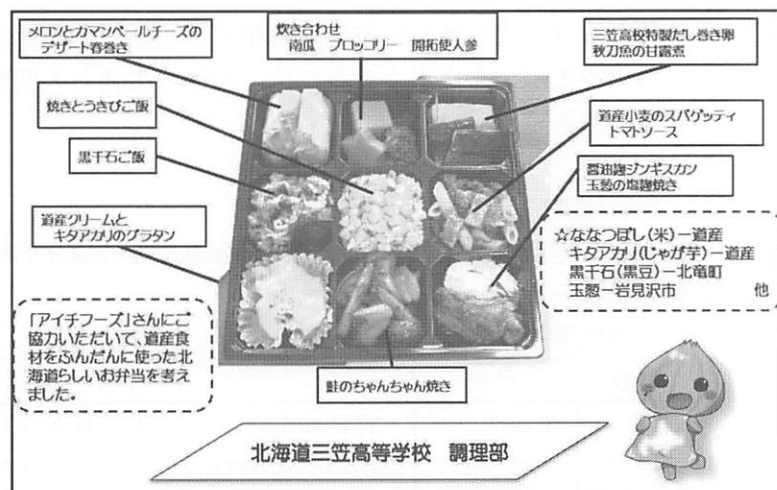
学校名・学科名	展示の内容等
札幌丘珠	普通科 ・DIG(災害イマジネーションゲーム)を活用した授業実践への取組を中心に DIGを普及する家庭クラブ活動、生徒が作成したゲーム等の紹介 他



6 三笠高校プロデュース『北海道大会弁当』

第1日目全体会の昼食用の弁当は、創立2年目の北海道三笠高等学校（食物調理科）の調理部の生徒たちが何度も試作を重ねてメニューやレシピを考案したものです。

北海道の夏の旬の食材や豊富な食材、食文化を広くPRしたいという思いが込められていました。この『北海道大会弁当』プロデュースは、高校生らしい柔軟な発想で完成した。参加者は美味しさを、生徒たちは、授業では学ぶことができない達成感や満足感を味わいました。



北海道三笠高等学校（食物調理科）は 三笠市が平成24年度に設置し
地産地消に根ざしながら、食に携わる人材育成を目指している。

7 アラカルト研修

(1) アラカルト研修A「伝統衣装と色の文化」

午前 十二単と束帯などの講義と着装体験

講師 NPO 法人日本時代衣裳文化保存会理事長 宮島 健吉 様

会場 NPO 法人日本時代衣裳文化保存会

①主な内容

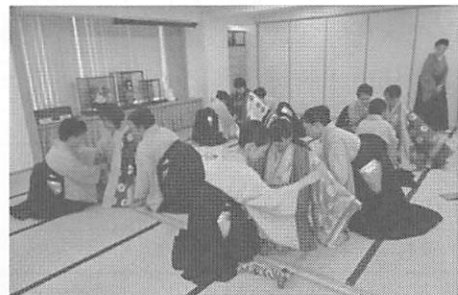
【講義】「日本固有の文化、十二単と束帯を考える」

【体験】十二単の着装

【展覧室見学】日本時代衣裳展覧室の見学

②研修風景・成果

宮島先生の丁寧な説明を受けながら、日本時代衣裳展覧室を観覧することから研修が始まりました。講義では、十二単や束帯の成り立ちや着物すべての命の大切さを思う心が込められていること、それを今の時代に伝えていくことの意味を改めて教わりました。また、一人一人が行った十二単の着装体験では、想像よりはるかに重い衣裳、自然に静々とした歩き方になることなど、体験したからこそ実感できた新たな発見がありました。



午後 色の文化とくらし

講師 フォーティーフォー(44)カラースクール学長 阿部 弘 様

会場 北海道立道民活動センター「かでの2・7」

①主な内容

【講義】「色彩と生活・色彩心理について」

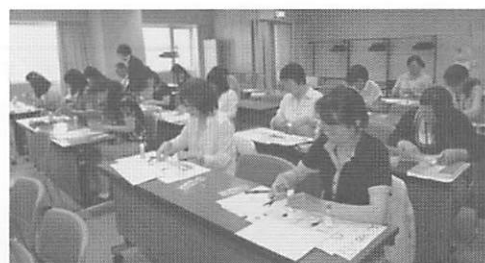
【演習】「パーソナルカラー診断について」

②研修風景・成果

講義では、色彩と生活、色彩心理について具体的な詳しい説明がありました。生活と色彩の深い関係を改めて認識することで、普段何気なく見ている様々なものの色使いが気になったり、色彩について新たに考える機会になりました。

また、演習では、パーソナルカラー診断の実際を映像で学習し、カラースクールオリジナルパーソナルカラー診断表を使って自分に似合う色の傾向を確かめました。その結果について納得したり、意外な結果だったり様々な反応がありましたが、今後の豊かな衣生活やくらしに役立つ内容でした。

【講座担当者：溝淵和江（札幌南）、高橋理緒（札幌南陵）、加賀美砂百合（函館商業）】

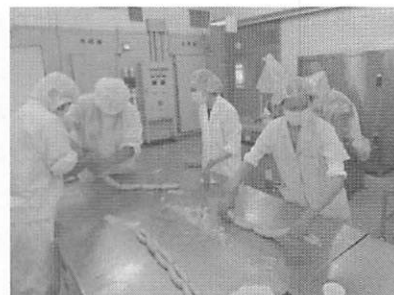


(2) アラカルト研修B「食品の生産と加工の実際」

講師 北海道岩見沢農業高等学校

食品科学科・農業科学科・畜産科学科・家庭科の先生方

会場 北海道岩見沢高等学校



午前	食品製造体験・調理実習
----	-------------

①主な内容

【食品製造体験】農産製品「トマトケチャップ、ピザ生地」、肉製品「ソーセージ」

乳製品「モッツァレラチーズ、ストリングスチーズ」

【調理実習】ピザ（ケチャップ・ソーセージ・モッツァレラチーズ、アスパラガス、ほうれん草）、
ふかしいも（岩見沢業高校バター添え）、オードブル（ベーコン、ハム、チーズ）、
メロンアイスクリーム

②研修風景・成果

食品製造体験では、3班に分かれ、1つの製造実習を体験しました。トマトから作るケチャップは煮詰めに時間がかかりましたが、旨みの強いさらとしたケチャップが完成しました。ソーセージ作りではケーシングに詰めてねじる作業を行い、チーズ作りでは、作りたてのチーズの瑞々しい美味しさや市販品との味も違いに感激した参加者もいました。また、調理実習では、食品製造実習体験で製造した加工品を材料として北海道らしいメニューや味に仕上げました。

午後	原料生産体験・農場見学
----	-------------

①主な内容

【体験・見学】水田・畑作等の体験・見学、畜産の見学

②研修風景・成果

各施設で、農業科学科が取り組んでいるプロジェクト研究や有機JAS栽培、乳牛の飼養と衛生管理の方法等について説明を受けました。最新設備の豚舎では、北海道で岩見沢農業高等学校にしかない幻の豚「中ヨークシャー種（純粋種）」を見学しました。また、雪冷熱・地熱を利用したビニールハウスの見学や収穫体験も行い、資源循環施設を用いた家畜糞尿処理施設等の見学をとおして、自然循環型農業の方向性を学ぶことができました。岩見沢農業高等学校ならではの「こだわりの生産からこだわりの加工」を実体験し、家庭科の食生活分や消費者教育として、食材購入時の食品表示の読み取りの重要性や食品添加物の問題等について、どのように生徒たちに伝えていくべきか、また、各家庭の食卓での「いのち（生産）を意識した食育」の必要性を家庭科授業（調理実習）をとおして教えることについて、多くに教材や示唆に富んだ研修でした。

〔講座担当者：白根美由紀（深川東）、斎田雄司（三笠）、西田真沙子（函館水産）、今野祐子（釧路江南）〕



(3) アラカルト研修C「北海道の食産業」

午前	北海道遺産を巡る・味わう～札幌苗穂地区の工場群・記念館群～
----	-------------------------------

講師 各関係施設職員

会場 (株) 福山醸造工場・(株) サッポロビール博物館

①主な内容

【見学】醤油や味噌等の製造工程、商品開発等
ビール産業の歴史と製造工程

②研修風景・成果

北海道遺産である苗穂地区工場記念群の一つである福山醸造工場では、北海道の味噌、醤油作りにつ

いて説明を受けた後に、醤油の香り漂う煉瓦作りの工場内を見学しました。北海道で最も歴史が古い工場内では、今も職人魂が息づいていました。サッポロビール園内にある全国で唯一のビール博物館では、館内を見学し、日本のビールの始まりが北海道にあることや、今日のビール産業の歴史がわかりました。その後、食の北海道遺産である「ジンギスカン」で、美味しい昼食をとり、北海道遺産を満喫する時間になりました。



午後	乳飲料工場・乳製品づくり
----	--------------

講師 各関係施設職員

会場 サツラクミルクの郷、サッポロさとらんど

①主な内容

【見学】牛舎見学、乳飲料工場見学

【体験実習】生キャラメル・バター作り

②研修風景・成果

札幌市郊外の農業をテーマとした公園施設内のサツラクミルクの郷「牛の館」では、子牛に触れたり、関連施設を見学しました。その後、同施設内の乳飲料工場では、乳製品製造工程を見学し、美味しいアイスクリームも試食しました。公園施設内に併設されているサッポロさとらんどでは、イチゴ味の生キャラメル作り、生クリームからのバター作りを体験しました。イチゴ味の生キャラメルはテレビでも放映されたことのある人気商品でしたが、簡単な材料で美味しく作れることがわかり、早速調理実習で活用したいとの感想もありました。ただ微妙な火加減の判断が難しく、簡単な料理の奥の深さも実感しました。



[講座担当者：幅淳彦（札幌英藍）、佐藤佳子（南幌）、蒔田直子（留萌）]

(4) アラカルト研修D「北国の暮らしと住まい」

午前	北国の暮らしと住まい、エネルギー
----	------------------

講師 北方建築総合研究所 前研究主幹 長谷川雅浩 様

北方建築総合研究所 研究職員 馬場 麻衣 様

同 企画調整部企画課長 細谷 俊人 様

会場 北方建築総合研究所

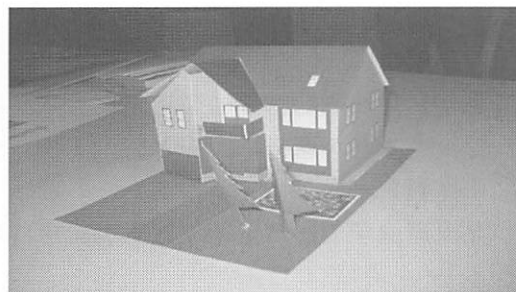
①主な内容

【講義】「住まいの地域性と住居領域学習」

【自由見学】北海道マイホームセンター旭川会場

②研修風景・成果

北海道の住宅の歴史について学ぶとともに、子どものための住まいとまちの体験プログラム集『ただいま』（旧寒冷地住宅研修所作成、住教育教材）を活用して住教育教材の指導方法について学び、改めて住生活領域の研修の重要性を実感しました。



午後	環境負荷低減技術・北方型住居づくりなど
----	---------------------

①主な内容

【見学】環境負荷低減技術施設

風雪実験室・防耐火実験室等

【演習】北方型住居のペーパークラフト作成

【体験実習】耐震構造やバリアフリー体験

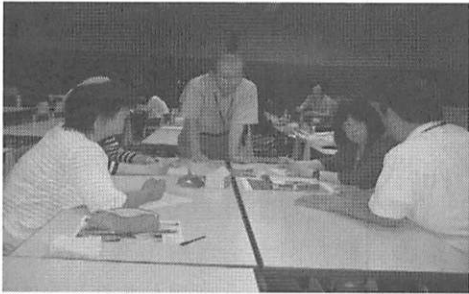
②研修風景・成果

見学や体験実習では、自然換気や氷・雪冷房などによる環境負荷低減技術や、耐震構造の技術や設備等について理解を深めました。

演習では、ペーパークラフトの制作をとおして北方型住居の特徴を体験的に学びました。また、三角屋根住居高橋家住宅（約250年前の木造平屋建て・茅葺の農家建築）、宮古島エコハウスの三つのペーパークラフトを比較し、気候風土による住居の構造的な違いについて、グループ討議後に発表をしました。

講座のまとめでは、住居実習の授業にすぐに役立つ体験学習の資料や DVD 等の紹介もあり、今後の授業に活用したいという感想もありました。

[講座担当者：宮川明子（旭川東・教頭）池田麻美（野幌）、米坂純香（旭川明成）、山本昌枝（名寄産業）]



(5) アラカルト研修E「アイヌ文化とものづくり」

午前	アイヌと自然～女性の手仕事の視点から～
----	---------------------

講師 社団法人北海道アイヌ協会
北海道立アイヌ総合センター学芸委員 津田 命子 様
会場 北海道立道民活動センター「かでの2・7」

①主な内容

- 【見学】北海道立アイヌ総合センター
- 【講義】「アイヌ女性の創造した衣文化」

②研修風景・成果

北海道立アイヌ総合センターには、アイヌ独自の時代区分ガイドや年表、文化史等のほか、近隣民族の比較資料も展示されています。道内在住であっても、アイヌに関する施設見学の経験のない先生方も多く、真剣に見学しメモを取っていました。

講義は、ユーモアを織り交ぜながら大変分かりやすく、「アイヌ女性の創造した衣文化」についての説明、「アイヌ民族の精神性」や暮らしの基本姿勢等で現代にも通用する内容でした。

例えば、「今、必要なものだけを採取」し、「自然に感謝する心」を持ち、一人一人が自然に還る素材を選んで生活し、そして「ゴミを出さない努力をする」ことや、人間は自然の中の一部であり、持ちつ持たれつの関係であるということなどです。アイヌ民族のすべてを生徒へ伝えるのは難しいですが、環境教育や防災教育等とも重なる内容だけに、生徒たち実生活に繋がられるよう家庭科の指導方法の工夫が求められることを実感した研修となりました。



午後	アイヌ刺繍を施した巾着製作
----	---------------

講師 社団法人北海道アイヌ協会
北海道立アイヌ総合センター学芸委員 津田 命子 様
北海道教育庁学校教育局義務教育課
北海道アイヌ教育相談員 望月 典子 様
会場 北海道立道民活動センター「かでの2・7」

①主な内容

- 【実習】アイヌ文様を刺繍
巾着の縫製

②研修風景・成果

実習では、魔除けの意味がある「キラウ」という角を出す縫い方、「オホ」というチェーンステッチ「イカラリ」というコーチングステッチが大変難しく、巾着完成にまで至りませんでした。しかし、現代のように便利な裁縫道具や筆記用具がなかった時代に、見事な刺繍を生み出したアイヌ民族に感嘆しながら、黙々と刺繍をした時間がとても早く感じられ、被服実習の授業を受けている生徒の気持ちがよく理解できた貴重な時間にもなりました。また、来年度も受講したいという感想もあり、とても充実した研修でした。



〔講座担当者：秋田貴子（洞爺）、伊藤友美（札幌西）、菊池美穂（月形）〕

(6) アラカルト研修F「食と観光・環境」

午前	オリジナルのおみやげ作り・館内見学
----	-------------------

講師 白い恋人パーク職員

会場 白い恋人パーク

①主な内容

【体験実習】オリジナル「ラングドシャークッキー」作り

【見学】館内観光施設・工場見学

②研修風景・成果

体験実習では、オリジナルおみやげづくりのために、ラングドシャークッキーにホワイトチョコで思い思いのデザインを描きました。その後、冷蔵庫で冷やし固め、包装して箱詰めし、完成させました。この体験は来場者に人気があるので、使い捨てのエプロン・帽子・靴カバーの貸し出し、手洗いや消毒等を整えて、常に希望者に対応する準備をしていることがわかりました。館内見学では、「見る・味わう・体験する」の3つのテーマで構成され、来場者の記憶に残るような施設運営への工夫が見られました。また、工場見学ではクッキーが焼き上がり、包装される一連の工程、展示室では、子どもから大人まで楽しめるよう工夫が施されていました。なかでも、19世紀のイギリスのチョコレート工場を再現したタイムトンネルは、当時の音・香り・風が体感でき、印象的だったという受講者の声がありました。全体を通して、北海道を代表する観光施設の取組について研修を深めることができました。



午後	ごみの減量とリサイクル
----	-------------

講師 リサイクルプラザ宮の沢職員

札幌市環境局環境事業部ごみ減量推進課職員

会場 札幌市生涯学習センター「ちえりあ」

①主な内容

【見学】リサイクルプラザ宮の沢

【演習】「ゴミ分別ゲーム」

【講義】「ごみの減量～札幌市の取り組み～」

②研修風景・成果

初めに、リサイクルプラザ職員からごみ減量とリサイクル、段ボール箱でできる生ゴミ堆肥づくりについて説明がありました。生ゴミ堆肥等のように、すぐ取り組めるごみ減量対策を知り、早速家庭でも実行してみたいという声もありました。また、月1回実施される木製家具と自転車の展示販売会場を見学し、不要品のリサイクル方法について学びました。演習では、「ゴミ分別ゲーム」を体験し、授業や行事等で活用できる内容で、大変参考になりました。講演では、札幌市環境局環境事業部の職員の方から、札幌市のごみの減量の情報発信について説



明がありました。年々、事業ごみは減少しているが、家庭ごみは横ばい状態であることから、今後は家庭ごみを減らす努力が必要になること、イベントごみの減量に目的で造られたアラエール号（レンタル食器洗浄機を搭載した車両）を活用することで、学校祭や夏祭りなどのごみの減量に役立っていることを知りました。講義を通して、改めて身近な所から実施する環境教育の大切さを認識すると同時に、授業を通して生徒に指導していくことが重要であることを感じました。

〔研修担当者：相馬美征（小樽水産）、郡司有見子（市立札幌大通）、佐藤綾（豊富）〕

(7) アラカルト研修 G「北海道のエコ・福祉」

午前	大学における省エネ対策と授業実践のために
----	----------------------

講師 北海道大学特任准教授
プロジェクトマネージャー 横山 隆 様
北海道地球温暖化防止活動委員
NPO 法人グリーンファンド理事 岡崎 朱実 様
会場 北海道大学学術交流会館

①主な内容

【講義 1】「大学キャンパスを実験場としての試みについて」

【講義 2】「授業に生かせる省エネ対策について～授業に応用できる実験・実践～」

②研修風景・成果

講義 1 では、北海道大学サステナブルキャンパス推進本部横山特任准教授から、北海道大学キャンパスを実験場とした省エネ・低炭素化など、持続可能な社会への取組について説明を受けました。2008年に始まった「北海道大学のサステナブルキャンパス戦略」に基づいて実施されている環境負荷を低減させるための様々な取組は、大学全体の 1 年間の節約状況等について具体的な数値をポスターなどに示し、学内外へ周知を図るとともに、啓発活動も行い、成果をあげている実例が紹介されました。講義 2 では、北海道地球温暖化防止活動で活躍している岡崎朱実委員から、授業に応用できる実験・実践について説明がありました。知識として知っている事柄をどのように実践し、省エネに取り組むことができるのか、具体例を学びました。環境問題をはじめ持続可能な社会や省エネについて、家庭科の授業をとおして、実践できる力を生徒に付けさせることが重要であることを強く感じました。



午後	高齢者と共に楽しむレクリエーションなどについて
----	-------------------------

講師 学校法人北工学園札幌福祉医療専門学校
介護福祉学科学科長 芦原 直子 様
会場 札幌福祉医療専門学校

①主な内容

【講義・介護実習】高齢者から学ぶ陶芸品作り 在宅介護実習

②研修風景・成果

専門学校の施設である地域生活支援センター「ふれ愛の郷」では、センターを利用している地域の高齢者の方々から陶芸を学びました。手早く的確な指導により、短時間に作品を完成することができました。高齢者の方々が生き生きと活動する姿に、生きがいを持って高齢期を過ごすことの大切さを感じました。

在宅実習室という教室では、高齢者が住み慣れた自宅でそのまま暮らすための天井走行リフト、上下する洗面台、立ち上がりやすい椅子やソファ等の説明を受けました。また、実習では、保冷剤の中身を利用した芳香剤作りを行いました。このように、高齢者のディサービス等でも行われる作品が、自宅でも活用できるように工夫していることを知り、大変参考



になりました。さらに、高齢者疑似体験をととして、白内障眼鏡や耳栓、肘サポーター等の補助用具について高齢者や体の不自由な方が少しでも快く過ごすことができる工夫や改善について考える機会になりました。高齢者の自立生活を支えるために、家族や地域社会の果たす役割についても認識することができ、大変有意義な研修でした。

[講座担当者：岩瀬張幸子（月形・教頭）、井上明子（倶知安・教頭）、
東昌江（札幌手稲）、角井愛美（小樽商業）、宮崎円（北見北斗）]

(8) アラカルト研修H「子どもの発達と表現活動・北海道の生活文化」

午前	子どもの発達と表現活動
----	-------------

講師 北翔大学短期大学部 山川 彩子 准教授
北翔大学短期大学部 藤井由美子 教授
北翔大学短期大学部 清水 桂子 准教授
会場 北翔大学短期大学部

①主な内容

【実習】「こどもの造形表現～デカルコマニー・スクラッチ～」

【講義1】「こども支援の現状について」

【講義2】「こどもが楽しむ表現遊び」

②研修風景・成果

実習では、保育園や幼稚園でよく使われるデカルコマニーとスクラッチという技法を学びました。デカルコマニーは絵の具を使用して偶然にできた色や形を楽しむもので、スクラッチはクレパスを使用して偶然に出てきた色を楽しむものです。想像力などに大きく関わる技法で、保育分野での実習教材として活用することができる内容でした。講義1では、こども支援の現状について、保育に関わる法律から具体的なこどもの遊びの重要性、こどもの生活の変化などを学びました。保育分野の指導の向上につなげることができる内容でした。講義2では、こどもが楽しむ表現遊びについて、幼児に与える前にまず大人がどう感じるかが大切だということ、生活の様々な場面において幼児の豊かな表現活動は育つということを学びました。参加者からは、今後の授業にも活用できる内容だったという感想があり、保育分野を充実させることができる研修となりました。



午後	北海道の生活文化
----	----------

講師 北海道開拓記念館総務部企画調整課長
学芸部学芸第二課学芸員 博士（芸術）池田 貴夫 様
会場 北海道開拓の村、北海道開拓記念館

①主な内容

【見学】北海道開拓の村～開拓の村ボランティアによる村内ガイドツアー

北海道開拓記念館展示室

【講演】北海道の生活文化について

②研修風景・成果

北海道開拓の村を見学する前に、開拓の村食堂で北海道の食材を使った料理や開拓期に食べられていた料理で昼食をしました。その後、ボランティアの方とガイドの方の案内で見学をしました。明治から昭和初期にかけて道内各地に建てられた歴史的建造物が建ち並び、建物内は資料も豊富で、限られた短い時間ではありましたが開拓時代の人たちの逞しさや努力を肌で感じることができました。北海道遺産に登録されている建造物も数多くあり、見所が多く、もっと時間をかけてゆっくり見たいという参加者の感想もありました。開拓記念館で



は、日本各地の伝統行事や風習等に関する講演がありました。その後、北海道開拓記念館の展示室を見学しました。時代が流れていくように展示がされているためわかりやすく、北海道の生活文化について知ることができました。全体を通して北海道の歴史・文化について理解を深めることができ、衣食住どの分野の学習においても活用することができる内容で、大変充実した研修となりました。

[講座担当者：村木郁子（追分・教頭）高橋真理（野幌）、今多靖子（当別）、河野澄怜（清水）]

8 運営研究員氏名及び事務局校

石狩地区	(札幌南) 溝 渕 和 江	(札幌西) 伊 藤 友 美
	(札幌手稲) 東 昌 江	(札幌南陵) 高 橋 理 緒
	(札幌英藍) 幅 淳 彦	(札幌大通) 郡 司 有 見 子
	(当 別) 今 多 靖 子	(野 幌) 池 田 麻 子
	(野 幌) 高 橋 真 理	
渡島地区	(函館商業) 加賀美 砂百合	(函館水産) 西 田 真 沙 子
後志地区	(小樽水産) 相 馬 美 征	(小樽商業) 角 井 愛 美
空知地区	(南 幌) 佐 藤 佳 子	(月 形) 菊 池 美 穂
	(深 川 東) 白 根 美 由 紀	(三 笠) 斎 田 雄 司
道北地区	(旭川明成) 米 坂 純 香	(名寄産業) 山 本 昌 江
	(留 萌) 蒔 田 直 子	(豊 富) 佐 藤 綾
オホーツク地区	(北見北斗) 宮 崎 円	
胆振地区	(洞 爺) 秋 田 貴 子	
十勝地区	(清 水) 河 野 澄 怜	
釧路地区	(釧路江南) 今 野 祐 子	
教 頭	(追 分) 村 木 郁 子	(月 形) 岩 瀬 張 幸 子
	(旭 川 東) 宮 川 明 子	(倶 知 安) 井 上 明 子

事務局校 北海道江別高等学校

事務局長 教 頭 渡 辺 修 一
 事務局員 教 諭 若 藤 正 彦
 教 諭 佐々木 久美子
 事務長 横 田 繁 幸

新時代の家庭科教育の充実に向けて

平成 25年度

第5回全国高等学校家庭科実践研究会 北海道大会



平成 25年 7月 30日

第2期教育振興基本計画について①

第2期教育振興基本計画 第1部 総論 概説 ～我が国の社会課題にむけた4つの基本的方向性～

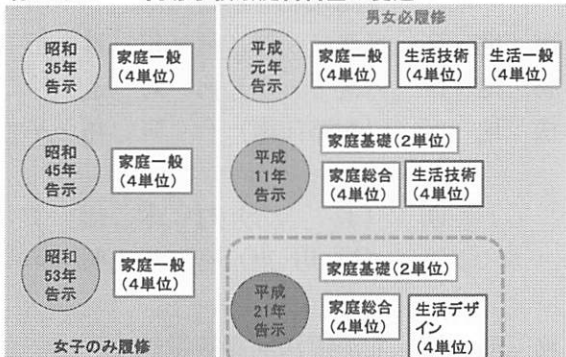


第2期教育振興基本計画について②

第2期教育振興基本計画 第2部 各論 概説 ～4つの基本的方向性、30のアクション～



はじめに 高等学校家庭科科目の変遷



多くの先生から寄せられる質問から

- 社会の情勢をみても家庭科教育は重要性が増していると考えますが、4単位必修が復活することはないか。
- 2単位の「家庭基礎」の中では、技術指導が十分にできない。対策はあるか？
- 「言語活動」については従来から、書かせる、発表させる活動を取り入れてきたが、さらに充実させるためには、今後どのようなことを取り入れればよいのか？

男女必修履修から20年・・・

新時代の高等学校における家庭科の方向性

◆重視すべき内容

生活の安全・安心

- 食育の推進 (調理技術と理論)
- 子どもや高齢者、社会福祉等
- 衣食住に関する内容と消費生活や環境との関連

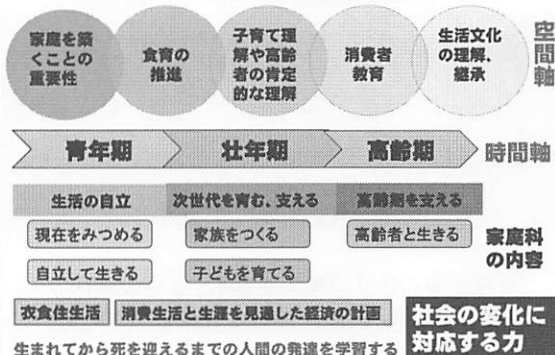
一消費者教育推進法施行 家庭科における消費者教育の充実

生活の基盤をつくる学習 知・徳・体の基礎

◆課題 家庭科の存在が可視化されていない

- 学習したことが実生活に活用されない
- 絶対的な授業時数の不足 (繰り返す時間がない)
- エビデンス (実証的なデータ) の不足

1 新しい学習指導要領の構成 共通教科のキーワード 家庭科の内容とライフステージの課題とを関連付ける



2 専門教科「家庭」改訂のキーワード

- ・生活産業の各分野で職業人として必要とされる資質や能力を育成
- ・生活文化の伝承と創造に寄与
- ・諸課題に対して、倫理観をもって解決し、生活の質の向上と社会の発展を図る

- ◆高い倫理観と人間性
- ◆コミュニケーション能力
- ◆生活の質を向上させるものづくりの力

3 生徒の実態把握

- ①生活体験の不足を補う工夫 **成功体験をさせる**
- ◆生活体験のなさは、技術の低下だけではなく、知識の低下にもつながっている。
 - ◆高校生段階で当然できると考えられる技術ができない。
→包丁で皮をむく、針に糸を通すなど。不器用
 - ◆安全衛生にかかわる基本的な事項が身についていない。
→食中毒、事故の防止（カンピロバクター菌の食中毒が多発）
 - ◆出来上りの予想を立てたり手順を考えて合理的に作業することが苦手。取組力がない
 - ◆図や文章を読み取る力の欠如

学習したことが生活に活用でき、自信や学習意欲を高めるような授業づくりになっているか？

4 小・中・高等学校の学習内容の系統化

- ①衣食住の内容の指導の工夫
- ◆高校は科学的に理解させることを重視
→「どうしてそうなるのか？」の原理・原則
→中学校との題材の重複を考慮
→効果的な実験・実習 少ない回数でも最大の効果
 - ②中学校で新設された内容とのつながり
◆生活の課題と実践 → ホームプロジェクト
◆保育体験学習 → 高校の保育体験学習（子どもを育てる）
◆言語活動の重視
 - ③高校生の発達段階を踏まえる
◆中学校と高等学校の発達段階の違い
生活の主体者として意思決定し、行動する力を育成

5 家庭科の魅力と威力を伝える効果的な指導のポイント

- ①年間指導計画と評価計画の作成
- ②実習の見直しや工夫
- ③ICTの効果的な活用 タブレット端末の活用
- ④指導と評価の一体化
- ⑤授業力を高める視点
 - 実技力の向上 できる自信と活用
 - 解が一つでない課題への対応 課題解決能力
※HPや学校家庭クラブ活動
※地域と連携した活動
 - 言語活動の充実
→活動ありきで目的なしになっていないか？

言語活動の充実—その実施上の課題例

- 指導のねらいと言語活動との関係がはっきりせず、科目のねらいに応じてどのような力が付いたのか不明確な場合がある。
- 時間がかかることや、指導のポイントがつかみにくいことなどから、言語活動の位置づけを躊躇してしまう場合がある。
- 学習評価との関係をどうとらえるかが不明確なまま指導がなされる場合がある。

健康で快適な被服のイメージマップ 図式化

Check3 (2) クラスメートの意見

意見	点・問題点と改善点についてメモをしよう。
思い点	高年齢者用
改善点	高年齢者用

Work2 (3) 自分でまとめる

健康で快適な被服 = 「人に優しい被服」とはどんな被服だろうか。

文章を書くことが苦手な生徒の記入例

Work2 (3) 調べたことや発表内容をもとに、健康で快適な被服 = 「人に優しい被服」とはどんな被服だろうか？ 思い点から書きな。つけていこう。

文章を書くのが苦手な生徒も、キーワードならば記入しやすく、教師も評価しやすい。

6 指導と評価の一体化

新学習指導要領を踏まえた観点の設定

新しい観点

- 関心・意欲・態度
- 思考・判断・表現
- 技能
- 知識・理解

観点が変わりました

学力の3つの要素との整理

- ① 基礎的・基本的な知識・技能
- ② 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

目標に準拠した評価の着実な実施

- ① 領域や内容項目レベルの学習指導のねらいが明確になっている
- ② 学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているのか具体的に想定されている

具体的に示したものが**評価規準**

- ・生徒の学習状況を判断する際の目安が明確になる
- ・学習評価をその後の学習指導の改善に生かす
- ・学校における教育活動全体の改善に結び付ける

指導と評価の一体化

観点別評価

① 目的に準拠した評価の着実な実施

評価規準の作成 → 国立教育政策研究所より「家庭総合」について示した

学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているのか具体的に示したもの

- 生徒の学習状況を判断する際の目安が明確になる
- 学習評価をその後の学習指導の改善に生かす
- 学校における教育活動全体の改善に結び付ける

観点の内容①

観点について周知されていないのでは？

関心・意欲・態度

自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を身に付けているかどうかを評価する

評価規準の表現

- …について関心をもっている
- …しようとしている
- …考えようとしている

思考・判断・表現

各分野の知識・技術を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を身に付けているかどうかを評価する

- …考え、工夫している
- …自分なりに工夫している
- …についてまとめた、発表したりしている

観点の内容②

技能

各分野において習得すべき技術を身に付けているかどうかを評価する

評価標準の表現

…(技術)できる
…情報を収集・整理、調査、分類することができる

知識・理解

各分野において習得すべき知識や重要な概念等を身に付けているかどうかを評価する

…について理解している

評価における課題①

高等学校においては、観点別学習状況の評価が定着していない

評価する一自分の指導の在り方を見直す

●効率的・効果的な評価方法の研究

例)生徒が自分の意見をまとめやすく、教員も評価しやすいワークシートの工夫
意見をまとめる考査等のペーパーテストの工夫
技能の評価を効果的にする方法 等

●評価時期等の工夫

例えば「関心・意欲・態度」の評価の時期の工夫

評価における課題②

●評価計画が不十分である＝授業の目的が明確でない

観点別評価を計画的に、効果的にしていく意図がみえない。

例)1時間の授業に3観点も設定している・・・

観点が、指導の目標とずれている

生徒の実態に応じた題材になっていない事に気がつかないまま、以前と同じ授業を続けている・・・

●評価を指導の改善に生かす意識が不十分である

例)ペーパーテストなどの客観的な部分にとらわれすぎる

成績が良くないのを生徒の責任にしている

→教え方が悪いから出来ないのでは？

学習評価における妥当性と信頼性

7 家庭科教育の充実に向けて 先生方へのお願い

○家庭科研究会等の組織力を高める

数値化しやすい学力向上施策の中で、家庭科の存在を高めていくためには、「三本の矢方式」(教員が心を一つにして連携すること)が重要

○学校内の存在感を高める取組み

授業力の向上

・生徒にとってよい授業をして、生徒を味方にする

・校務分掌等も積極的に取り組む

・家庭科で学習している内容を可視化する

→他教科の先生方にも理解していただく

家庭科教育をアピールするためには、家庭クラブ研究発表大会は、重要な機会

管理職、他教科からの理解を得ることができる

全国大会は、生徒が主体となり、生徒が成長する場

これならできるといふ小さなことからコツコツと・・・

家庭科では何を学習しているのか、生徒にどんな力をつけているのかを外部の方に伝えることができる

③-1 家庭科の授業が生き方・人生設計を考えるきっかけになった学習内容

家庭学科	総合学科	普通科
1 食物(食生活・調理)	食物(食生活・調理)	食物(食生活・調理)
2 被服(衣生活)	被服(衣生活)	保育
3 保育	保育	家庭経済
4 福祉・介護・看護	福祉・介護・看護	被服(衣生活)
5 検定・資格・演習	家庭経済	福祉・介護・看護

高等学校家庭科におけるキャリア教育・職業教育の在り方に関する調査研究(全国高等学校長協会家庭部会家庭科研究調査部会報告書から)

調査研究委員会報告

調査研究委員長

(北海道洞爺高等学校長) 佐々木淑子

1 調査研究委員会の組織について

平成25年度は、次の委員をもって構成し、調査研究に取り組みました。

委員長	洞爺高等学校長	佐々木淑子
委員 (13名)	登別青嶺高等学校長	松澤 正枝
	南幌高等学校長	阿部 広美
	当別高等学校長	本庄 幸賢
	※10/1～	杉本 祐子
	名寄産業高等学校長	田邊 孝次
	三笠高等学校長	高瀬 雅朗
	函館大妻高等学校長	池田 延己
	江陵高等学校長	鈴木 譲二
	置戸高等学校長	今井 悟
	北広島高等学校長	三品 純一
	千歳北陽高等学校長	吉村 恭子
	倶知安高等学校長	中村 雅之
	清水高等学校長	我妻 公裕
	釧路明輝高等学校長	宮下 聡

2 今年度の取組について

今年度は、教育課程履修状況等の調査及び本部会60周年記録のまとめに取り組みました。次のとおり、取組について報告します。

(1) 教育課程履修状況等の調査について

【目的】新学習指導要領の完全実施となり、家庭科においては各学科に共通する教科「家庭」（「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」）及び主として専門学科において開設される教科「家庭」の各科目の履修状況等を把握し、今後の家庭科教育を充実させるための方策を探る参考資料とする。

【調査方法】年度当初の計画では、各学校へアンケートを実施しデータ収集する予定であつ

た。しかし、道教委が毎年行っている履修状況調査によりデータは得られるとの確認ができたため、高校教育課より提供していただく方法に変更し調査を行った。

【スケジュール】

10月～道教委よりデータの提供を受ける

11月～データの集約・確認作業

1月～まとめ（グラフ化などの作業）

2月～考察等意見交換（調査研究員会開催）

3月～本部会誌「こです」（担当校：洞爺高校）

誌面にて調査データを掲載する。

※本誌p. 55～p. 58

(2) 本部会60周年の記録について

【目的】本部会創設60周年を迎えるにあたり、これまでの活動や取組、特に、50周年から十年分を中心にまとめ、部会の歴史の記録とする。

【調査・研究等】参考資料として、「北海道高等学校長協会『会誌』」「全国高等学校長協会（四十年史・五十年史・六十年史）年表・資料編」

「北海道高等学校長協会家庭部会『こですHOKKAIDO』」「北海道高等学校家庭クラブ連盟『いとなみ』」「総会資料」等から集約しまとめる。

【スケジュール】

8月～各参考資料を紐解き、原稿作成する。

12月～本部会誌「こですHOKKAIDO 2014」において「60年の歩み」としてまとめ掲載する。

※本誌p. 3～p. 22

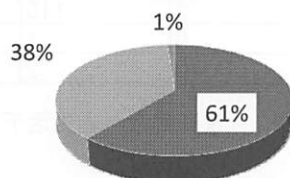
(4) 予算について

委員会独自の冊子を作らず、「こですHOKKAIDO 2014」への記載に代えるため、調査研究委員会予算額¥50,000を、「こです」予算額¥80,000に加え、計¥130,000以内で作成する。

新旧教育課程の必修修科目の割合比較【全日制】(全学科)

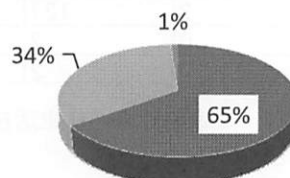
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	218	135	4

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	229	119	4

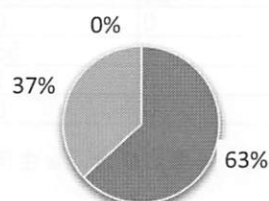
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【全日制】(普通科)

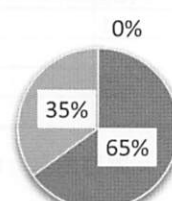
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	103	60	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	104	56	0

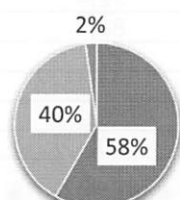
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【全日制】(専門学科)

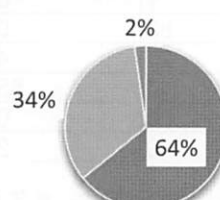
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	105	71	4

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	113	59	4

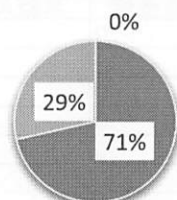
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【全日制】(総合学科)

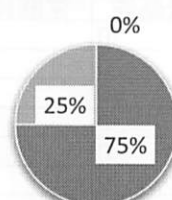
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	10	4	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	12	4	0

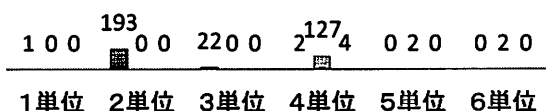
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



必修修科目別の単位数の比較【全日制】(全体)

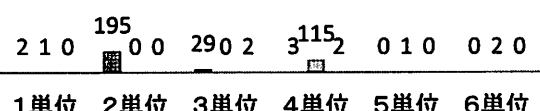
平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	1	0	0
2単位	193	0	0
3単位	22	0	0
4単位	2	127	4
5単位	0	2	0
6単位	0	2	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	2	1	0
2単位	195	0	0
3単位	29	0	2
4単位	3	115	2
5単位	0	1	0
6単位	0	2	0

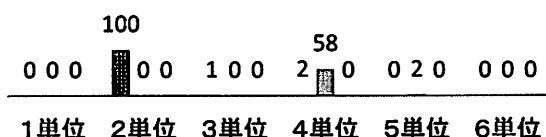
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



必修修科目別の単位数の比較【全日制】(普通科)

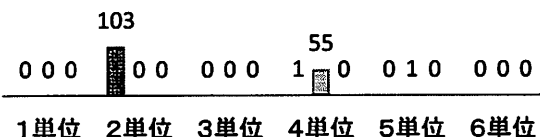
平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	0	0	0
2単位	100	0	0
3単位	1	0	0
4単位	2	58	0
5単位	0	2	0
6単位	0	0	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	0	0	0
2単位	103	0	0
3単位	0	0	0
4単位	1	55	0
5単位	0	1	0
6単位	0	0	0

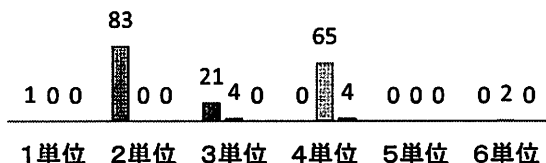
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



必修修科目別の単位数の比較【全日制】(専門学科)

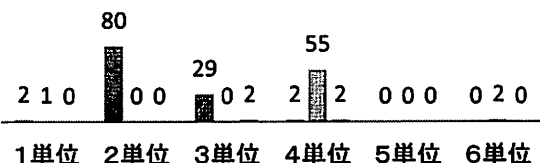
平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	1	0	0
2単位	83	0	0
3単位	21	4	0
4単位	0	65	4
5単位	0	0	0
6単位	0	2	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	2	1	0
2単位	80	0	0
3単位	29	0	2
4単位	2	55	2
5単位	0	0	0
6単位	0	2	0

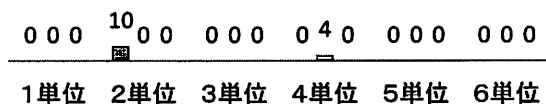
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



必修修科目別の単位数の比較【全日制】(総合学科)

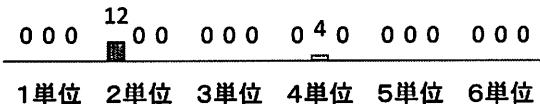
平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	0	0	0
2単位	10	0	0
3単位	0	0	0
4単位	0	4	0
5単位	0	0	0
6単位	0	0	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	0	0	0
2単位	12	0	0
3単位	0	0	0
4単位	0	4	0
5単位	0	0	0
6単位	0	0	0

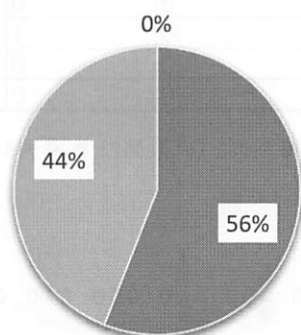
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【定時制】(全学科)

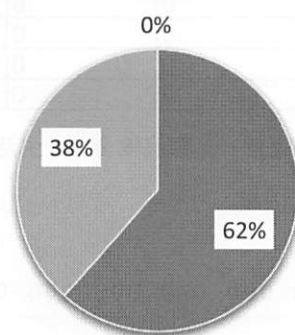
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	28	22	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	32	20	0

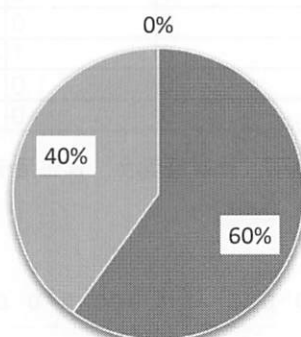
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【定時制】(普通科)

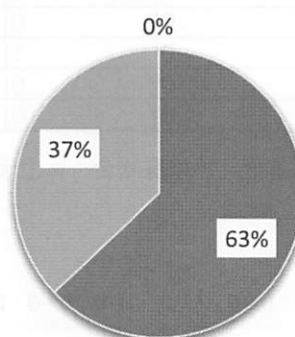
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	15	10	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	17	10	0

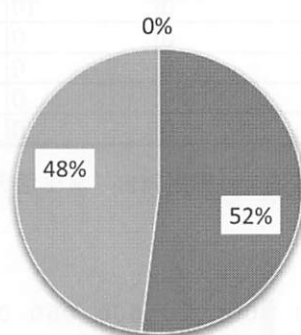
■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン



新旧教育課程の必修修科目の割合比較【定時制】(専門学科)

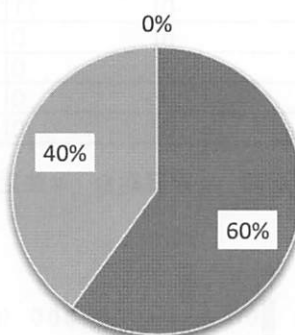
	家庭基礎	家庭総合	生活技術
平成24年度	13	12	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活技術



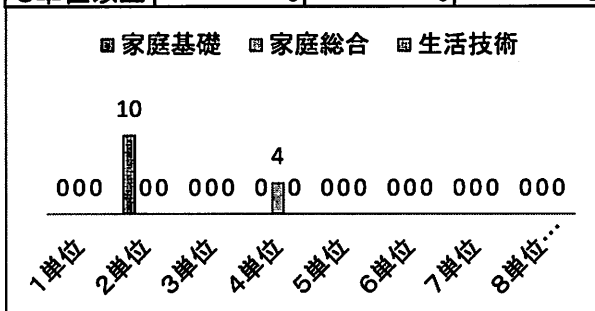
	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
平成25年度	15	10	0

■ 家庭基礎 ■ 家庭総合 ■ 生活デザイン

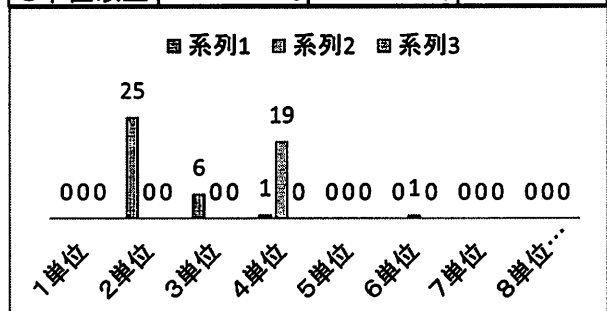


必修科目別の単位数の比較【定時制】(全学科)

平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	0	0	0
2単位	10	0	0
3単位	0	0	0
4単位	0	4	0
5単位	0	0	0
6単位	0	0	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0

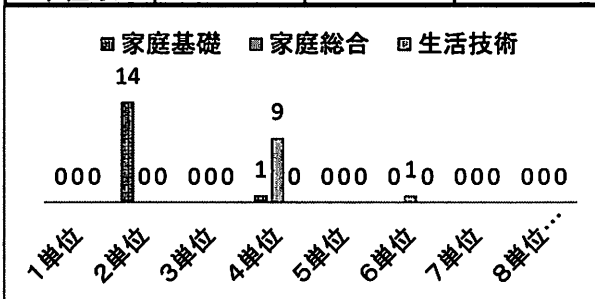


平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	0	0	0
2単位	25	0	0
3単位	6	0	0
4単位	1	19	0
5単位	0	0	0
6単位	0	1	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0

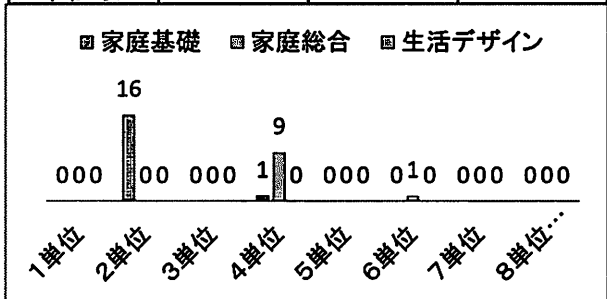


必修科目別の単位数の比較【定時制】(普通科)

平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	0	0	0
2単位	14	0	0
3単位	0	0	0
4単位	1	9	0
5単位	0	0	0
6単位	0	1	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0

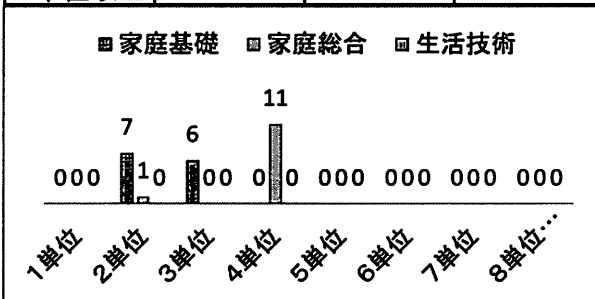


平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	0	0	0
2単位	16	0	0
3単位	0	0	0
4単位	1	9	0
5単位	0	0	0
6単位	0	1	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0

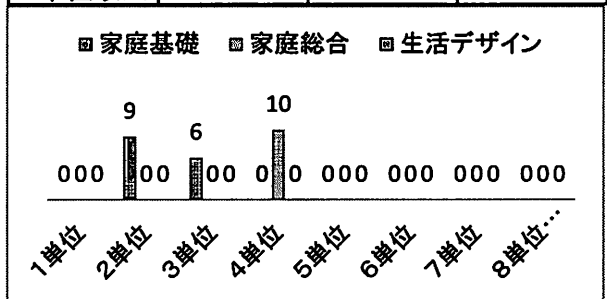


必修科目別の単位数の比較【定時制】(専門学科)

平成24年度	家庭基礎	家庭総合	生活技術
1単位	0	0	0
2単位	7	1	0
3単位	6	0	0
4単位	0	11	0
5単位	0	0	0
6単位	0	0	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0



平成25年度	家庭基礎	家庭総合	生活デザイン
1単位	0	0	0
2単位	9	0	0
3単位	6	0	0
4単位	0	10	0
5単位	0	0	0
6単位	0	0	0
7単位	0	0	0
8単位以上	0	0	0



Ⅲ 平成25年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動

北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長

北海道名寄産業高等学校長 田 邊 孝 次

平成27年度第63回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会(北海道大会)が札幌市教育文化会館を会場として7月30日・31日開催予定です。本年度より当別高校が全国大会事務局として加盟校15校で実行委員会を組織し準備を進めています。大会スローガンは応募総数12校752編から「北の大地で育もう 未来へひろがる 笑顔の輪」(札幌南高校1年辻 優太郎)と決定し、今後ポスター募集等を実施する計画です。各学校においてご協力をお願いします。

今年度8月29日・30日に札幌市教育文化会館を会場として、平成25年度北海道家庭クラブ連盟研究大会・総会が、「北海道の美しさを再発見し、伝えよう」を研修テーマに、盛大に開催されました。大会の運営にあたられた担当校である札幌丘珠高等学校、協力校である石狩支部加盟校の関係各位に改めて感謝申し上げます。

研究発表では、ホームプロジェクトの部、学校家庭クラブ活動の部とも、全ての発表で生徒の皆さんの努力と指導された顧問の先生方の熱意が現れており、参加者に大きな感動を与えてくれました。「ホームプロジェクトの部」で札幌北高等学校2年百瀬美樹さん「お菓子な父と家族の健康単身赴任(忍)者修行!」、「学校家庭クラブ活動の部」で名寄産業高等学校家庭クラブ2年太田留奈さん発表の「高齢者ソフト食に関する研究〜いつまでも食べる楽しみを〜」がそれぞれ最優秀賞に輝きました。平成26年7月31日・8月1日山口県山口市市民会館で開催されます第62回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会への出場権を獲得しました。

また、平成25年8月1日・2日に新潟市の新潟県民会館で第61回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が開催されました。北海道ブロック代表として「ホームプロジェクトの部」で札幌北高等学校3年野口藍さんの「愛(藍)いっぱい、脱・ぼっちゃり! 弟の教育大作戦」が全国優勝にあたる最優秀の文部科学大臣賞を受賞すると共に、クラブ員投票により授与を実施している「クラブ員奨励賞」も合わせて受賞しました。

「学校家庭クラブ活動の部」で札幌丘珠高等学校家庭クラブ3年中津優理菜さん発表の「みんなで防災! ~見なおそう生活・つながろう地域~」は第4位の入賞に相当する全国家庭科教育協会賞を受賞しました。高校生の柔軟な感性と発想で、自分たちの身の回りの生活や地域の持つ課題解決を目指して取り組み、優秀な成績を残され大きな成果を挙げられました。今回の全国大会での受賞は、北海道の学校家庭クラブ活動に関係する人達に大きな励みを与えてくれます。

今年度、名寄産業高校が道家庭クラブ連盟事務局を1年間担当いたしました。過去、石狩地区で担当頂き、平成27年度全国研究発表大会開催準備の関係から道北地区加盟校で担当し、関係各高校のご支援ご協力を頂きましたことにお礼を申し上げます。来年度から校長協会家庭部会事務局校の江別高校に道連事務局が引き継がれます。今後もより多くの学校が家庭クラブの意義をご理解いただき、学校家庭クラブに加入され、本連盟へのますますのご支援をお願いいたします。

第54回全国高等学校家庭クラブ連盟

指導者養成講座に参加して

北海道江別高等学校教諭 高坂 瑠美

第54回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座が7月25日、26日の2日間にわたり、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。全国から高校生80名、顧問54名が参加する中、私たちは北海道代表として北海道江別高等学校1年の佐藤和花さんと計2名で参加させていただきました。

1日目は開講式の後、クラブ員・顧問それぞれのプログラムで研修が行われました。顧問分科会では「学校家庭クラブ活動の充実に向けて～授業を発展させた身近な実践例」という内容で、各学校の現状や、取り組みについての紹介が行われました。各都府県での加盟率は5割以上のところがほとんどで、北海道との違いに愕然としました。家庭科教員1名ながらも地道に活動している様子を直接聞くことができ、この分科会は大変参考になるものでした。

その後、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 望月昌代氏による講義が行われました。家庭科を活性化させるには、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動の充実から図っていくことが重要であるということについて説明がありました。生活の実践力を身につけさせるために、技術検定やコンテスト等への積極的な参加も効果的であることや、「どうしてそうなるのか」の原理原則を指導することで科学的に理解でき、問題解決能力や意思決定能力につながることを知ることができました。また、言語活動との関係を重視し、そのためにはどのような授業改善を行っていったらよいかなど具体例を示してい

ただき、そこから生徒の思考力、判断力、表現力等の育成につなげていく方法を聞くことができました。

また午後からは、東京都立深沢高等学校教諭 梶原恵美子先生による体験講座「みんなで作るトランスパレントスター」が行われたり、夕食後のクラブ員交流会「ちょっとしたレクリエーション活動がコミュニケーションスキルをアップ」など多彩なプログラムが組み込まれ、充実の時間となりました。

2日目は、埼玉県立熊谷女子高等学校教諭 堀口依里子先生による実践活動報告がありました。奉仕的活動、研究活動、交流活動を3つの柱とし、家庭クラブ創設60周年を迎えた今も伝統から学び引き継いだ家庭クラブ活動を実践していることなど多くの取り組みを聞くことができました。

今回初めて参加させていただきましたが、今まで知らなかったことを数多く知ることができたり、都府県の様々な活動、そしてお互いの悩みも話すことができとてもよい機会となりました。このような貴重な機会を与えていただいたことに深く感謝いたしますとともに、今後の家庭クラブ活動に生かしていきたいという思いを強くしました。



顧問分科会での実践例紹介

第 61 回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

北海道代表出場校として（ホームプロジェクトの部）

北海道札幌北高等学校教諭 田 畑 優香里

平成 25 年 8 月 1 日（木）・2 日（金）、新潟県民会館で開催された第 61 回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会ホームプロジェクトの部北海道代表として、生徒 5 名を引率し、参加させていただきました。

大会スローガンは、「トキが舞い 稲穂輝く 越後から 愛と義の花 届けよう」。新潟県は 7 月 29 日から 30 日にかけて局地的に大雨となり、中越・下越を中心に土砂災害や浸水害が発生していましたが、大会の準備・運営をされているクラブ員生徒さんや関係者の皆様は笑顔を絶やさずことのない丁寧な対応で、参加校生徒・顧問が発表への不安を感じずに、リハーサルや本番に臨むことができました。心より感謝しております。本当にありがとうございました。

本校のテーマは、「愛（藍）いっぱい、脱・ぼっちゃり！ 弟の食育大作戦」。発表者は 3 年野口藍、補助者は 3 年篠原美也子・2 年百瀬美樹・2 年飯塚友菜・1 年尾関紗都子。野口さんの情感溢れる発表と精選した画像に、聴衆の皆様が沢山笑ってくださいました。結果は、三度目の文部科学大臣賞と、本校初のクラブ員奨励賞のダブル受賞を実現。舞台上で表彰された野口さんは、びっくりしすぎて涙が出ず、閉会式後、メンバーに会うと同時に喜びの号泣でした。

さらに、学校家庭クラブ活動の部に出場した札幌丘珠高等学校さんが全国家庭科教育協会賞を受賞され、本当におめでとうございます。



〈クラブ員奨励賞カップと野口さん〉〈本校研究発表班 5 名〉

今回は、私が本校に赴任してから、平成 16・17・18・20・21・22・24 年度に続いて 8 回目の全国大会出場です。平成 17 年度は 3 位・千葉県教育委員会委員長賞、平成 20・22 年度には文部

科学大臣賞、平成 24 年度には準優勝・産業教育振興中央会賞、今年で五度目の入賞となりました。

今回も複数の実態調査から「小学 5 年生の弟は肥満で悩んでいるが自分では改善できず、両親は弟が肥満である現実を認めないこと」と、「母が弟の世話をする事で、弟が生活面や精神面で自立できないこと」がわかりました。中間評価を元に、肥満解消の料理研究は勿論、楽しく自立を促すための「スケジュールシート」や「（死蔵品の白衣で製作した）なりきりシェフセット&レシピ」等、28 種類もの藍作戦（工夫・改善）を生み出し、弟の生活の理解・肥満の改善・自立という目標達成に至りました。さらに父はサーフィン上達、母は調理師免許取得（平成 25 年 10 月無事合格）を目指す等、家族が大きく変化・向上し続けています。

野口さんは、平成 22 年度の全国大会で本校の横関さん（旭川医科大医学部医学科在学）が文部科学大臣賞を受賞した新聞記事を見て、嬉しいことに私の指導で、研究発表の発表者に挑戦したい、そして家庭科教諭になりたいという強い志を持ち、本校へ入学してきた生徒です。また、パソコン画像を担当した補助者生徒は、気持ちの優しいおっとりとした気質ですが、野口さんの発表が終了した日に新潟観光ではなく、8 月下旬に開催される全道大会での発表準備を再開し私に指導を求めてきた逞しいメンバーです。

私は家庭科教員になって 28 年目を迎えますが、家庭クラブ活動や研究発表の世界に出会え、幸せに思います。本校は、平成 26 年度山口大会北海道代表校として出場権を獲得し、次年度開催県紹介も担当します。生徒たちが北海道の良さを最大限発揮できるよう指導を継続します。



〈「とっきっき」と本校研究発表班 5 名の記念撮影〉

第61回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

北海道代表出場校として（学校家庭クラブ活動の部）

北海道札幌丘珠高等学校教諭 黒田 さとみ

第61回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が8月1日～2日、新潟市で開催され、本校家庭クラブ3年生2名が「みんなで防災！～見なおそう生活・つながろう地域～」という題目で発表を行いました。

この取り組みは、四年間にわたって先輩から受け継いできた研究活動です。同時に本校家庭クラブ活動を学校内外で深めることができた活動でもあります。また、私にとっては家庭クラブ活動と防災教育のあり方を探る活動でした。私の授業における課題は研究活動を始めた生徒と同じものでした。そこで私たちは家庭クラブ活動と授業との連動をはかり、情報共有や資料提供、アイデア募集を行いました。それにより授業における関心や理解が深まるとともに、研究メンバーではない生徒も防災や家庭クラブ活動を丘珠高校みんなの活動だと意識し、いろいろなアイデアや作品提供などの協力をしてくれました。

特に、チャリティマドレーヌ販売や地域防災訓練などで地域の方々と交流することにより、自分も地域の一員であるということ、地域から頼られ、役立てる人間だということを実感することができました。これは家庭クラブ活動の効果だと思っています。防災教室や啓発活動では、緊張したり、失敗したり、悩んだりすることが多くありました。しかし、生徒は常に前向きに、楽しそうに研究活動に取り組み、その粘り強さや発想の豊かさには驚かされました。研究中は多くの地域住民、児童館の子どもたちや先生方にご指導をいただいたお陰で多くを学ぶことができました。このかわり合いから、生徒が人間としても大きく成長していく姿を見ることができました。

全国大会では約1,200名の観客の前で発表します。どの発表も一様にレベルが高く、生徒の緊張は大変なものでしたが、生徒は明るく元気に発表し、全国家庭科教育協会賞を受賞することができました。他県の発表はもちろん、新潟県クラブ員の大会運営からも学ぶことが多くあり、生徒も感銘を受けました。大舞台上で緊張しながらもやり遂げた経験は、生徒にとっては大きな自信につながりました。自分たちで考えたり、体験したり、失敗しながら、研究活動をまとめ、発表し、評価をもらう。この過程を経験することが生徒の成長につながるということ、そして生徒には課題に向き合い解決するための大きな力があるということ、家庭クラブ活動をとおして実感しました。

最後になりましたが、学校家庭クラブ活動にご理解、ご協力いただいている皆様に感謝申し上げます。学校家庭クラブ活動の意義や楽しさがより広まり、活動が深まっていくように、今後も生徒とともに明るく楽しく活動していきたいと思っています。



第62回北海道高等学校家庭クラブ連盟

研究大会・総会を終えて

北海道札幌丘珠高等学校教諭 黒田 さとみ

第62回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会が8月29日（木）～30日（金）に札幌市教育文化会館で開催されました。大会には発表校9校、参加校1校から合計80名の生徒が参加しました。

1日目はホームプロジェクトの部の発表がありました。家族を想う気持ちがよく伝わる発表が多く、丁寧に研究がすすめられていました。また、江別高校の佐藤和花さんから全国指導者養成講座の参加報告がありました。その後、生徒研修「アイヌ文様の切り絵」が実施されました。生徒研修は主に江別高校家庭クラブが中心となって運営し、参加者に切り絵の仕方を指導してくれました。江別高校はじめ、参加生徒の意欲と熱意で大変充実した研修となりました。なお、作成した切り絵の一部は、しおりやメッセージカードなどに加工され、27年度家庭クラブ全国大会で使用される予定です。力作揃いの美しい作品ばかりで、参加される皆さんには、北海道らしい美しさやおもてなしの心を感じていただけるのではないかと楽しみにしています。

2日目は学校家庭クラブ活動の部の発表と総会が行われました。学校家庭クラブ活動の部では学校や地域の特色を生かし、多くの人との交流や学び合いの中で研究が深まり成長していく姿が見られました。

研究発表の結果は、ホームプロジェクトの部で札幌北高校の百瀬美樹さんによる「お菓子な父と家族の健康単身赴任（忍）者修行！！」、学校家庭クラブ活動の部で名寄産業高校「高齢者ソフト食に関する研究」がそれぞれ最優秀賞を受賞しました。26年度全国大会での発表が楽しみです。

今年度は、札幌市での開催、また運営員会方式による大会運営でした。これは当番校の業務をできるだけ複数の学校で分散し負担の軽減を図り大会運営を行いやすくすることと、27年度全国大会（北海道大会）に向けて業務内容を確認する意味もありました。初めての運営員会方式のため至らない点も多く、参加校の顧問の先生方、クラブ員の皆さんにはご迷惑やご負担をおかけしてしまうとともに、多くのお手伝い、励ましをいただきました。積極的に運営にあたってくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

大会運営や北海道連盟の維持は大きな課題でもあります。それでも、大会を終えた後の生徒の満足そうな顔や運営をとおして確実に成長を見せる生徒の姿を見ると、そこに大きな意義を感じるのです。27年度全国大会は北海道で開催されます。大変な業務ではありますが、生徒にとって大きな成長の場となるように、加盟校が中心となって盛り立て、大会の成功と活動の充実発展に繋がっていきたいと思います。



IV 平成25年度北海道家庭科技術検定委員会の活動

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長

北海道当別高等学校長 杉 本 祐 子

家庭科技術検定は、昨年度より本校が事務局を担当しております。

受験者数が若干減少傾向にありましたが、今年度におきましては、数値もやや上向きに戻り、専門委員の先生方のご尽力と各校のご理解とご協力に、感謝申し上げます。

平成25年度家庭科技術検定の状況について、次のとおり報告させていただきます。

1 事業報告

(1) 専門委員

役 職	学 校 名	氏 名
全国・北海道(和服)	函館大妻	西本千春
全国・北海道(洋服)	江 別	紀國明子
全国・北海道(食物)	当 別	福本智子
北 海 道(被服)	美 唄尚栄	駒谷綾子
北 海 道(食物)	洞 爺	櫻庭頌子
北 海 道(食物)	名寄産業	竹岡綾子

(2) 諸会議・講座等

- ①常任委員研究協議会 H25. 4. 19
- ②第1回専門委員研究協議会 H25. 4. 19
- ③家庭科技術検定全国専門委員会H25. 5. 16、17
- ④第2回専門委員研究協議会 H25. 7. 31
- ⑤家庭科技術検定評価研究協議会・検定員養成講座 H25. 8. 1

養成講座の内容は、食物調理技術検定2級の実技実習と評価研究、被服製作技術検定3級の解説、実技実習と評価研究で、全道から10名の参加がありました。

2 受験者数と過去4年の推移

	種 目	H25	H24	H23	H22	H21
4級	被服	392	238	241	314	479
	食物	1,156	1,207	1,472	1,161	1,306
3級	被服	211	159	202	163	179
	食物	728	661	630	637	661
2級	和服	71	77	90	81	95
	洋服	49	90	47	64	92
	食物	294	293	233	291	258
1級	和服	53	43	62	49	66
	洋服	51	41	51	42	55
	食物	168	141	192	131	164
合 計		3,173	2,950	3,220	2,933	3,355

※昨年度の「こです」の数値は H24 に誤りがありましたので、訂正しお詫び申し上げます。

3 検定実施校数

年 度	H25	H24	H23	H22	H21
実施校数	4 1	4 2	4 0	4 0	4 1

4 検定実施に関わる動向について

今年度より、検定実施に関わる関係書類等が本部事務局より送付されることになりました。また、3冠の受験者・合格者報告も本部と理事校へ送付するよう変更になりました。

家庭科技術検定(食物調理・被服製作・保育)の一元化が検討されており、平成26年度から6県で試行されます。それに伴い、理事校の業務負担軽減も進められ、受験者・合格者名簿を取りまとめた本部への報告業務がなくなり、各実施校は本部と理事校へそれぞれ報告するように変更になります。

ご理解の上、ご協力をお願い申し上げます。

平成 25 年度全国高等学校家庭科技術検定

全国専門委員会に参加して

北海道当別高等学校教諭 福 本 智 子

今年度の全国専門委員会は、5 月 16 日（木）・17 日（金）の 2 日間東京都ホテルメトロポリタンエドモントを会場に行われました。北海道からは、全国専門委員の函館大妻高校西本千春教諭、江別高校紀國明子教諭とともに参加しました。

1. 全体会

全体会では、平成 24 年度技術検定の受験者数や関係書類等の報告がありました。また平成 25 年度から指導要項・関係書類集は各学校に直接配付する方式になったこと、受験者・合格者名簿が変更されたことについての確認がありました。

2. 分科会

被服製作分科会と食物調理分科会に分かれて研究協議が行われました。被服製作分科会では、実物をもとに評価の精度を高めるための研究協議が行われました。

食物調理分科会では作問委員会、研究評価委員会からの報告、平成 25 年度検定試験実施について説明がありました。作問委員会から筆記試験出題の意図として、(1)食物全般にわたって理解を深めるため、単元の枠にとらわれない総合的な問題を取り入れる。(2)献立・調理など実技内容に関する問題を多く取り入れると同時に理論に裏付けされた実習ができるように栄養・食品・食品衛生など幅広く出題する。(3)生徒が考えて答える問題作成に努める。点について補足されました。研究評価委員会からは、ねじ梅の評価・手作りパイ生地を使った調理例につい

ての紹介がありました。その後グループに分かれ、実技試験の指導方法について情報交換を行いました。各学校に共通する課題として次の 3 点が挙げられました。(1)生徒の意欲を高め、技術不足・体験不足をいかに補うか。(2)検定練習の時間をどのように確保していくか。(3)指導者の技術向上をどのように図っていくか。その解決策として、モデル献立からスタートする。上級生が下級生に教える。生徒同士でアドバイスしあう。写真にとり改善策を考えさせるなど具体的な事例も多く大変参考になりました。

3. 指導・講評

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 望月昌代様より「家庭科技術検定の指導の充実～新しい学習指導要領のスタートに当たって～」と題し講評をいただきました。生活体験の不足が、仕上りをイメージする力や段取り力の低下につながっている。「どうしてそうなるのか」の原理・原則の指導をとおして知識や技術の定着をはかって欲しい。また指導の中で生活理論とともに生活の実践力をつけさせる、技術検定に取り組んで生徒自身がどのように変わったのかを実感させて欲しいとご指導いただきました。

4. おわりに

今年度全国専門委員会に参加し、全国各地から集まる先生方の熱意に大変刺激を受けました。これからも、北海道家庭科技術検定の充実と普及に少しでも貢献できるよう励んでいきたいと思いをします。

V その他の家庭科教育・研修会等に関する報告

平成25年度第51回北海道高等学校教育研究大会 教科別集会家庭部会を終えて

事務局 北海道札幌白石高等学校教諭 北村 仁 美

平成26年1月10日(金)札幌エルプラザ3階ホールにおいて道各地から69名の参加を得て、研究主題「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」のもとに開催した。

1 総会

平成24年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成25年度事業計画・予算案が承認された。本家庭部会会則は、部会長を北海道高等学校長協会家庭部会長(江別)と固定する改正案、事務局の部会運営をスムーズにする改正案なども承認された。平成26年度研究主題については、役員会に一任された。

2 講演

演題：「生活に生かす力を育てる家庭科の授業」
講師：聖徳大学 大学院人間栄養学研究科 講師
教職大学院 講師

河野 公子 様

文部科学省において長きにわたり主任視学官等を歴任され、全国家庭科教育協会会長であり、家庭科教員養成や関係書物のご執筆をされるご経験から、より具体的な授業づくりに関する講演であった。

高等学校家庭科の改訂のポイントを確認しつつ、学習指導の工夫改善・魅力的な授業づくりの配慮、思考力・実践力を育てる学習指導等に加え、生徒参加型の授業の工夫について実践事例を交えて紹介があった。

新学習指導要領を実践するに当たり、生徒が主体的に取組み、実際の生活課題の解決に生かせる授業づくり、指導と評価の改善へのヒント、個に応じた指導形態の工夫など、魅力的な授業づくりを研修する良い機会となった。

3 研究協議

(1) 研究発表

主題：「染色実習の授業実践」

発表：北海道静内高等学校教諭 駒津 順子

内容は、玉ねぎ外皮を天然染料として活用し、50分の授業内に行う染色実習であった。染色科学と教材、染色実習への興味・技術、環境への関連等へ発展的に取り組まれていた。また、媒染反応液に浸ける体験を先生方が手元で行い、反応の違いを観察することもできた。

(2) 情報交換：「新時代の家庭科教育充実に向けての教材選び」

班に分かれて授業での教材・新しい教科書の選び方や見方について情報交換がされた。運営委員よりまとめ・報告を行った。

(3) 助言：北海道教育庁十勝教育局

教育支援課高等学校教育指導班

指導主事 佐 紺 摂 子 様

研究発表については評価方法の工夫等に関して、情報交換については生徒の実態に合わせた教材選びなどに関して助言があり、加えて、新学習指導要領における指導のポイント、指導と評価の一体化等について説明があった。

4 研究紀要

平成25年度については、次のとおりである。
「高等学校家庭科におけるキャリア教育の実践～専門学科の特色を活用して～」

北海道洞爺高等学校教諭 狩野 千賀子
地域社会の特性を活用しながら社会性を実践的に身に付けることができる洞爺高校の取り組みや工夫が紹介され、キャリア教育を様々な角度から深く研究された内容である。

平成25年度北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭 上野 博 美

(1)大会を運営して

本年度新たな事業として、家庭部会主催の意見体験発表大会を実施しました。これは、『全道の高等学校で家庭科・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭科・福祉教育の充実を図る』目的で企画されたものです。

この大会は、9月17日に北海道江別高等学校で開催しました。当初、参加人数の見当がつかず不安でしたが、普通科4名の生徒も含み道内9校10名の参加がありました。普通教科「家庭」から発展した「家庭選択科目」「家庭クラブ」「技術検定」などの体験や学び、専門学科ならではの体験など、この社会変化の中で、豊かな心をもって生き生きと活動している姿を見ることができました。

今後も、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭科・福祉教育の「生きる力」を感じる大会にしたいと思います。今大会の運営については、第1回目ということもあり、至らない点も多々あったことと思いますが、ご意見・ご感想などをいただき、今後改善していければと考えています。

来年度以降、この趣旨を踏まえ、さらなる発展を目指しますので、多くの生徒が参加してもらえるようご理解・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。参加いただいた各高校の生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(2)大会参加者

①江別高校 山本 里歩

『夢への折り返し地点』

②当別高校 近藤 彩

『将来の夢』

③札幌手稲高校 山田 千裕

『私にとっての家庭クラブ』

④洞爺高校 富田 奈々美

『小さな学校での大きな学び』

⑤名寄産業高校 新山 珠羅

『福祉の心～care workerへの出発点～』

⑥石狩翔陽高校 鎌田 美月

『食育の必要性』

⑦置戸高校 末吉 愛李

『私の決意』

⑧千歳北陽高校 古川 夕姫

『家庭科で磨く私の高校生活』

⑨札幌南高校 加藤 千裕

『家庭クラブ・ライフデザインを通して学んだこと』

⑩札幌南高校 土谷 奈々

『私たちの家庭科』

(3)大会結果

最優秀賞 札幌手稲高校 山田 千裕

『私にとっての家庭クラブ』

優秀賞 置戸高校 末吉 愛李

『私の決意』

優秀賞 当別高校 近藤 彩

『将来の夢』※

※家庭部会代表として平成25年度産業教育意見・体験発表大会に参加しました。

平成25年度北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会 最優秀賞

指導者 北海道札幌手稲高等学校教諭 東 昌 江
発表者 北海道札幌手稲高等学校2年 山 田 千 裕

(1)最優秀賞生徒を指導して

札幌手稲高等学校教諭 東 昌 江

本校は、「私にとっての家庭クラブ」と題して、2年生の山田千裕が発表しました。家庭クラブに期待を込めて入部したはずが、すぐに馴染むことが出来ずつらい時期があったこと。毎月のマドレーヌ作りや学校祭での大量のマドレーヌ作りを通して、声をかけ合いコミュニケーションをとる必要性を体験したことがクラブに馴染むきっかけになったこと。マドレーヌなどの売上金でカンボジアに井戸を寄贈することによって活動の意義や将来の夢など、この家庭クラブでの活動を通して成長できたことについて発表しました。専門学科ではなく普通科ならではの素朴な活動ではありますが、生徒は、自らの心が成長していていることを実感しているように思います。家庭クラブ活動を通してこれからも心の教育を目指していこうと思います。

(2)生徒原稿『私にとっての家庭クラブ』

札幌手稲高等学校2年 山 田 千 裕

札幌手稲高校には、月に一度手作りマドレーヌを販売する日があります。その日は、授業終了の鐘が鳴ると、マドレーヌを販売している購買を目掛けてたくさんの人が並び、行列ができます。絶大な人気を誇るマドレーヌはいつも5分ほどで完売し、買いたくても買えない人もいて「幻のマドレーヌ」と呼ばれているほどです。

そのマドレーヌを作っているのが、私が所属している、手稲高校家庭クラブです。

私が家庭クラブに入部した理由は、高校生になってから初めてできた友人に「一緒に入部し

ない」と誘われたからです。部活動見学に行ったときの、家庭クラブの雰囲気良かったこともあり、友人に誘われるままに入部することを決めました。

入学してからすぐにあった新入生歓迎会の部活動紹介で、家庭クラブは部員の仲が良いと聞いていたので、私もきっとすぐに馴染むことができると思い、活動が始まるのを楽しみにしていました。

しかし、実際に入ってみると、先輩方や同学年の部員の名前を覚えることさえ大変で、すぐに馴染むことは出来ませんでした。家庭クラブの活動を楽しみにしていた私にとって、クラブに馴染めなかった時期はとてもつらく感じられました。

私は、小学校から中学校まで、ずっと同じメンバーで、学年に60人しかいない小さな学校で過ごしてきました。ですから初めて会った人たちと交流することが苦手だということに、気がつかなかったのです。

そんな私が、クラブに馴染むことが出来るようになったきっかけは、家庭クラブの活動のひとつ、マドレーヌ作りでした。

月に一度あるマドレーヌ作りや販売では、およそ300個のマドレーヌを焼き、次の日の放課後に購買で販売します。さらに学校祭の時期になるとマドレーヌを2000個程作ることにしています。卵400個、グラニュー糖20kg、小麦粉20kg、バター20kgを使い、プレーン、ココア、紅茶、抹茶の4種類を、調理室のオープン10台をフル稼働させて焼きます。1日中作業をするため、椅子に座る暇もなく、立

ちっぱなしで作業をしなければなりません。あまりにも大変な作業であるため、私はこれを「マドレーヌ戦争」と呼んでいます。

このようなことを部員のみんなと一緒にしているうちに、私はクラブに馴染めるようになりました。なぜなら、マドレーヌを効率よく焼くためには、「私がこの作業をやる」とか、「人手が足りないから手伝ってほしい」などといった声かけや、コミュニケーションをとることが必要だからです。

私が1年生の時は、自分が何をすべきか分からず、先輩方から指示をもらうまで、ただ立っているしかできませんでした。家庭クラブでの活動を1年間経験した今では、クラブに馴染めるようになっただけでなく、自分のやるべきことが分かり、自分から行動することが出来るようになりました。

先輩方が引退した今では、後輩に声を掛けるのは私達の役目になりました。後輩も1年経てば、同じように次の学年に声を掛けるようになると思います。

マドレーヌの売上金は、カンボジアに寄付し、そのお金でカンボジアに井戸が建てられます。手稲高校では、これまでに5基の井戸を建てています。井戸は、1基作るのに日本円でおおよそ16万円もかかるそうです。マドレーヌを販売するほか、学校祭では、ブックカバーやポーチなどの手作り手芸品、フェアトレード商品の塩や砂糖も販売していますが、井戸を建てるには、これら約1年分の売り上げが必要となります。毎月の売上金は決して多くはありませんが、これを継続することによって、井戸が建ったときの喜びは大きいです。

井戸が建つと、現地の人たちは安全な水を飲むことが出来ます。8月に5基目の井戸が完成し、私達手稲高校家庭クラブに宛てて、カンボジア大使館から感謝状と、現地の子ども達と井戸の写った写真が送られてきました。カンボジ

アの子ども達が嬉しそうに井戸を使っている写真を見ると、純粋に喜びと、すばらしい達成感を感じることが出来ました。

家庭クラブではこの他にも様々なボランティア活動を行っています。海で身体の不自由な方たちと交流したり、保育園の七夕会や運動会、新年会のお手伝いをし、幼児と触れあったり交流する機会が得られます。

初めて会った人たちとコミュニケーションをとることは、あまり得意ではありませんでしたが、何回かボランティアに参加していくうちに、ずいぶん苦手意識も薄まった気がします。

このような経験は決して自分ひとりで出来るものではなく、クラブとして活動してきたからこそ出来るものだと思います。友人に誘われ、何となく入部して本当に良かったと思っています。

私には将来の夢があります。それは教師になることです。中学校の頃からの夢でしたが、高校生になってからはより現実的に進路を見つめられるようになりました。

教師になって生徒には、他の人への思いやりを持った行動をできるようにすること、人との関わりを大切にすること、そして、ひとりでは出来ないことも、大勢が集まって少しずつ努力を続けて行けば、出来ることがあるということ。を伝えられるような教師になりたいと思います。これからも、もっとたくさんの人と交流し、自分との違いや考え方を柔軟に理解できるように努力していきたいです。これで発表を終わります。



平成25年度北海道高等学校 産業教育意見・体験発表大会に参加して

北海道当別高等学校教諭 今 多 靖 子

平成25年度産業教育意見・体験発表大会は、10月8日（金）北海道江別高等学校において開催された。

この大会の目的は、北海道内にある専門学校等に学ぶ生徒が、日ごろの学習で学んだことについて、意見や体験を発表するとともに、その発表に基づき意見の交換及び交流を行うことにより、関係者の認識を深め、産業教育の充実・振興に寄与することにある。

本大会には、各部会より計 14 校が参加した（農業 3 校、工業 2 校、商業 3 校、水産 1 校、家庭 2 校、看護 1 校、総合学科 2 校）。参加校と発表題は次のとおりである。

旭川商業「沖縄に行って学んだこと」

小樽水産「総合実習で学んだこと」

帯広農業「ゆり根をプロデュース

～小笠原農園の夢をのせて～」

剣 淵「成長したこと

～農クで輝く新たな自分～」

江 陵「昔の自分にさようなら」

更別農業「飛躍への第一歩

～思いっきり農業を！！」

札幌工業「ロボット製作に賭けた思い」

札幌琴江工業「その先にみえるもの」

下川商業「岩手からここ下川に来て学んだこと」

当 別「将来の夢」※家庭部会代表

富良野緑峰「継ぐ者として、繋ぐ者として

～人とシカの共存をめざして」

美唄聖華「私のめざす『看護』とは」

森 「こども達との壁を乗り越えて見

けたもの～もりの寺子屋での活動～」

留萌千望「私の実践」

9 月 17 日（火）に家庭部会主催で開催された意見・体験発表大会では、石狩翔陽、江別、置戸、札幌手稲、札幌南、千歳北陽、洞爺、当別、名寄産業の 9 校 10 名が発表し、本校家政科 3 年保育コースの近藤彩さんが家庭部会の代表者となった。

保育コースでは、保育実習、当別町子育て支援事業に参加しての乳幼児との交流体験学習、当別町図書館での読み聞かせボランティア等さまざまな活動に取り組んでいる。また、家庭科保育技術検定 1 級の取得をめざしており、発表内容は、それらの体験学習から学んだこと、そして、身につけた「手遊び歌」と家庭科保育技術検定『言語表現技術』1 級で取り組んだ素話の実演であった。素話は「自然観察的内容」「生活習慣に関する内容」「豊かな情操と心を育てる内容」から、指定された内容の物語を創作し、語る。素話に取り組み、完成させることは容易ではない。近藤さんはよく頑張った。

皆さんの発表は、いずれも実践内容はすばらしく、そして堂々と『語る』姿に感心した。



【当別高校家政科 3 年 近藤さんの発表】

平成 25 年度高等学校初任者研修〔一般研修〕を受講して

北海道江差高等学校教諭 新 海 真梨子

1 期日 平成 25 年 9 月 18 日～20 日

2 参加人数 2 名

3 研修内容

<1 日目>会場 北海道立教育研究所

○説明「教科指導の在り方」

講師 北海道立教育研究所 企画・研修部

研究研修主事 後藤 あゆみ先生

内容 ①子どもたちの現状

②学習指導要領改訂の趣旨

③北海道の家庭科教育の課題

④これからの家庭科教育

○説明・演習 「被服実習の指導と評価」

講師 恵庭南高等学校 谷田 幸恵教諭

内容 ①家庭科技術検定（被服製作）について

②実技製作 4 級巾着袋

③評価とまとめ

<2 日目>会場 北海道江別高等学校

○講話「家庭科教育に期待すること」

講師 北海道江別高等学校 加藤 和美校長

内容 期待される家庭科教員として

○授業参観①「色彩とデザイン」（1 年）

授業者 紀國 明子教諭

内容 同時加法混色

○授業参観②「家庭基礎」（1 年）

授業者 佐々木 久美子教諭

内容 消費者問題

○説明 「生活デザイン科について」

講師 紀國 明子教諭

○授業参観③「フードデザイン」（3 年）

授業者 若藤 正彦教諭

内容 和食コーディネート調理実習

○研究協議 「授業研究」

講師 北海道立教育研究所 企画・研修部

研究研修主事 後藤 あゆみ先生

内容 授業者への質疑応答

○説明「学校家庭クラブ活動について」

講師 高坂 瑠美教諭

○説明「教育課程」

講師 北海道立教育研究所 企画・研修部

研究研修主事 後藤 あゆみ先生

内容 新学習指導要領へ向けて

<3 日目>会場 北海道立教育研究所

○説明・演習「調理実習の指導と評価」

講師 千歳北陽高等学校 古御堂 敦子教諭

内容①家庭科技術検定（食物調理）について

②実技調理 4 級きゅうりの小口切り計量

3 級ハンバーグステーキ

付け合わせパセリ

マセドアンサラダ

○説明・研究協議 「指導計画」

講師 上川教育局教育支援課

高等学校教育指導班指導主事

石川 博史先生

内容 指導計画の立て方と演習

○説明・研究協議 「学習指導と評価」

講師 北海道立教育研究所 企画・研修部

研究研修指導主事 後藤 あゆみ先生

内容 学習指導と評価についての演習

4 おわりに

3 日間の研修におきまして、諸先生方にはご多忙中にもかかわらず懇切丁寧な御指導を頂きましたことに心より感謝と御礼を申し上げます。

家庭科教育に対する意識が一層に高まり、理解を深めることが出来ました。今後は、研修での貴重な体験を大いに活かし、日々精進してまいります。ありがとうございました。

平成25年度10年経験者研修

[教科指導等研修Ⅰ・Ⅱ]に参加して

北海道平取高等学校教諭 高橋 あき

1. 期 日

Ⅰ期：平成25年7月30日～31日

Ⅱ期：平成26年1月6日～7日

2. 場 所

かでる2・7、北海道立教育研究所

3. 目 的 教科指導等の教育課題について、 個々の能力、適性に応じた研修を行い、指導 力の向上を図る。

4. 運営者

- ・北海道立教育研究所企画・研修部
研究研修主事 後藤 あゆみ 氏
- ・北海道教育庁十勝教育局教育支援課
高等学校教育指導班指導主事

佐紺 摂子 氏

5. 研修内容（教科別部会のみ記載）

〔教科指導等研修（Ⅰ）〕

◎研修1：「自己課題の明確化」ブレインライティングを用いて、自己課題の明確化を図り、課題の解決方法を検討した。

◎研修2：「問題解決能力を育成する指導の工夫・改善」文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官 望月昌代氏より、思考力・判断力・表現力等を育み、問題解決能力を身につけさせる教科指導の在り方についてご教授いただいた。

◎研修3：「学習指導の充実」NPO法人日本時代衣装文化保存会理事長 宮島健吉氏より、着物を題材にした生活文化継承の指導についてご教授いただいた。

◎研修4：「学習指導の実際」北海道教育大学札幌校 佐々木貴子教授、北海道札幌丘珠高等学校 黒田さとみ教諭による防災の視点を取り入れた授業実践発表から、指導と評価の一体化について学びを深めた。

◎研修5・6・7：「学習指導と評価の工夫・改

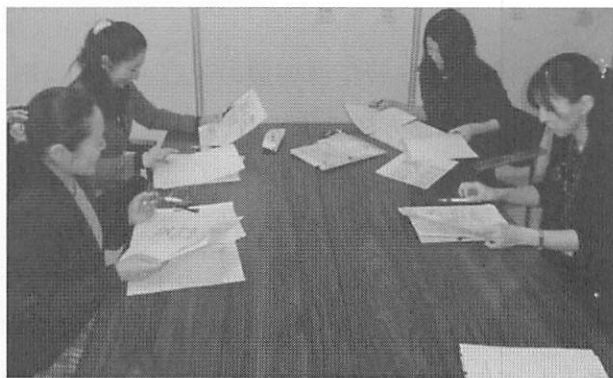
善」「『指導と評価の計画』の作成」学習指導要領に基づき、授業期間中に取り組む「指導と評価の計画」、「学習指導案」の作成に取り組んだ。

◎研修8：「授業改善の方策」授業評価を取り入れた授業改善について、研修を深め、今後の指導にどのように取り入れていくか協議した。

※研修2・3・4：兼全国高等学校家庭科実践研究大会北海道大会

〔教科指導等研修（Ⅱ）〕

問題解決能力を育成する指導として、北海道檜山北高等学校 佐野陽子教諭より、ホームプロジェクトと学校家庭クラブの指導の在り方についてご説明いただいた。また、授業期間中に取り組んだ授業実践についてプレゼンテーションを行い、研修教員同士で評価、改善点について考察した上で、模擬授業を実施した。まとめとして、教科経営について協議し、今後取り組むべき課題の確認を行った。



6. 研修を終えて

研修を通して、生活を創造する力や実践的態度を育成する家庭科教育の在り方について学びを深める事ができた。授業期間中の取り組みを含め、教員としての資質向上につながる充実した時間を過ごすことができたと感じている。最後に、本研修においてご指導いただいた先生方に深く感謝いたします。

平成25年度北海道立教育研究所

〔家庭、技術・家庭科教育研修講座〕を受講して

北海道広尾高等学校教諭 藤 枝 沙 香

1 期日 平25年8月12日(月)～14日(水)

2 講座の内容

(1)「家庭科、技術・家庭科教育の充実」

講義『各校種における家庭科教育の現状及び系統的な家庭科教育の充実』

講師 国立教育政策研究所教育課程調査官

望 月 昌 代 氏

家庭科は授業時数及び教員数が減る現状にあるが、生活の基盤をつくる学習をとおして知徳体の基礎を養う重要な役割を担う。一方で学習が実生活に活用されるエビデンス(実証データ)が不足しており、その成果を検証できるよう学校単位での実証化を進めることが今後の課題となる。小中高の学習内容を比較し、校種別の違いや他校種間で反復しがちな傾向、体験学習及び言語活動の充実が緊近の課題であることを学んだ。

(2) 高等学校学習指導要領の改訂と評価規準の作成及び評価方法の工夫改善

共通教科では、2単位の科目に関して、社会などの空間軸と生涯生活を踏まえた時間軸の組み合わせにより、限られた時間の中で効率的な学習が可能となることや専門教科では産業従事者としての倫理観などを含めることなどの説明があった。生活体験が不足している生徒実態に応じて、最小の時間で最大の効果を得るためには実習の工夫や見直しが必要であり、ICTなどによる視覚教材の活用や実験実習も発達段階を踏まえ、科学的に理解させることが求められる。さらに指導内容が評価と一体化することを前提として、評価計画が不明確であるなどの課題が

見られる。また学習評価の妥当性と信頼性を明確にするため、生徒への評価規準の明示が不可欠である。効率的・効果的な評価方法として評価時期とその対象を工夫する多様な見方を活用し、4観点で判断する方法をご教示いただいた。

(3) 演習「指導・評価計画の作成」

実践授業発表

『家族ドラマを取り入れた体験的な学習』

発表者 北海道旭川凌雲高等学校教諭

渡 部 真 紀 氏

(4) 1単位時間の授業づくり

高等学校の指導案作成では中学校で学んだことを生かし、ワークシート活用時はリード文を加え取り組みやすくする工夫が紹介された。

(5) 模擬授業(校種別1単位時間を設定)

ワークシートや板書などの目的を明確にし、効果的な言語活動とすることを学んだ。

○小1グループ～食生活・消費生活分野

○中2グループ～消費生活分野、食生活分野

○高2グループ～食生活分野、家族・福祉分野

3 まとめ

小中高における系統的な学習により基礎的知識及び技術を定着させ、校種間での学習内容を重複せずに生徒の発達段階に応じたものとする工夫や、常に計画と評価の整合性を意識した授業づくりなど、日常の授業を見直す視点を学ぶことができた。今後も教科性を十分に生かし、解を限定しない課題により創造力を育みながら、自己肯定感の育成や体験的学習として実験実習を多く取り入れるなど日々の授業内容の充実に努めたい。

平成25年度産業・情報技術等指導者養成講座を受講して

北海道美瑛高等学校教諭 森 本 鈴 奈

<期日>平成25年8月5日(月)～

8月8日(木)

<研修場所および研修内容>

8月5日 全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「家庭科における授業改善の視点」

文部科学省教科調査官 望月 昌代 氏

・講義「家庭科は生徒を育て、学校を変える！

—家庭クラブ活動と地域連携—」

秋田大学教育文化学部准教授 佐々木 信子 氏

・講義・授業実践事例①

「思考力・判断力・表現力をはぐくむ指導の工夫」

茨城県立太田第二高等学校長 柴田 京子 氏

・講義・授業実践事例②

「子どもと関わる力を高める指導の工夫

—保育技術検定の進め方など—」

埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭 須田 敦子 氏

8月6日 杉野服飾大学

・講義「ファッショントレンド」

杉野服飾大学教授 織田 晃 氏

・講義「現代衣服の黎明期

—ウォルトとドゥーゼー—」

杉野服飾大学教授 北折 貴子 氏

杉野服飾大学教授 吉川 玲子 氏

・体験「衣装博物館見学」

杉野服飾大学教授 鈴木 美和子 氏

・講義・演習

「ファッションカラーコーディネート演習

—色彩の基本と応用—」

杉野服飾大学教授 樽松 次郎 氏

杉野服飾大学教授 肉丸 美香子 氏

・講義「新素材紹介」

杉野服飾大学准教授 軽部 幸恵 氏

・講義・見学「ドレス構成(教育環境見学)」

杉野服飾大学教授 水野 真由美 氏

8月7日(水) 東京栄養食糧専門学校

・講義「思春期の栄養と生活習慣病一次予防の食生活」

東京栄養食糧専門学校長 石井 國男 氏

・講義「思春期の食事摂取基準と健康的な食生活へのアプローチ」

東京栄養食糧専門学校講師 脇村 智子 氏

・講義・演習「ファブリックステンシル」

ステンシル作家 角田 まさ子 氏

・講義「テーブルコーディネート概論

～日々の暮らしは食卓から～」

東京栄養食糧専門学校講師 和崎 恵子 氏

・講義・実習「季節の彩りはお花で」

東京栄養食糧専門学校講師 井超 和子 氏

東京栄養食糧専門学校講師 高橋 ひろみ 氏

8月8日(木) 全国高等学校長協会家庭部会事務局

・講義「家庭科における消費者教育を推進するためには」

消費者教育支援センター総括主任研究員

柿野 成美 氏

・講義「安全・安心な住居をデザインする」

日本女子大学家政学部教授 平田 京子 氏

まとめ・研究協議「授業の工夫」

文部科学省教科調査官 望月 昌代 氏

<まとめ>

各分野における最先端の知識と授業実践を学ぶ中で“家庭科におけるグローバル化”の必要性を強く感じた。そのためには、何よりも地球環境規模の視野に立ち、いかに生きていくべきかを実践的に探る力を育成できる教師一人一人の力が求められる。高い志とともに授業の在り方を今一度顧みる機会を与えてくださった関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

平成25年度北海道高等学校産業教育実技講座を受講して

北海道池田高等学校教諭 館 山 宏 美

<期日>平成26年1月14日(火)～17日(金)

<研修場所および研修内容>

1日目 北方建築総合研究所・旭川市内住宅

○講義「新学習指導要領改訂の趣旨と高等学校家庭科における住教育の推進」

北海道立研究所研究研修主事 後藤あゆみ 氏

○講義「なぜ住教育が大切か？」

北方建築総合研究所 所員 馬場麻衣 氏

○見学「住宅建築の実際」

後藤あゆみ氏からは、人の一生を時間軸としてとらえ、知識基盤社会の時代に対応できる力を学ぶ時代に一生学び続けようとする意欲を育てる必要性の講義があった。また、馬場麻衣氏からは、住まいの役割と住宅の種類・住宅選択・業者選び・住まいの維持管理について講義があった。木造住宅と鉄筋コンクリート住宅等との違いや特徴、業者選びではハウスメーカーと設計事務所の違いや特徴、ライフステージに合わせた住宅選びの必要性を学ぶことができた。

2日目 北方建築総合研究所

○講義・演習「住宅選択のポイント」、「北方型住宅の紹介」

北方建築総合研究所 所員 松村博文 氏

松村博文氏から北海道の住宅と歩みや寒さとの戦い、省エネの歴史の講義を受けた。また、結露のメカニズムの実験・防音・遮音の実験を通して、快適な居住環境には全室暖房・高断熱・高气密・計画換気といった北国4兄弟が必要であること及び結露の予防策を学んだ。音の実験では高音ほど遮音しやすく質量(面密度)の大きいものほど遮音性能が高いことがわかった。実験は興味深くぜひ生徒の授業等で活用していきたいと感じた。

3日目 同所・株式会社カンディハウス

○講義・演習「住宅購入と住宅ローン」

金融広報アドバイザー 白川京子 氏

○説明・見学「消費者ニーズをとらえた商品・サービスの開発」

株式会社カンディハウス人事総務部

松原秀浩 氏

○演習「自校における住教育の課題」

白川京子氏から人生最大の買い物である住宅の取得時期と身の丈にあった住宅取得のための知識や住宅ローンについての講義があった。また、松原秀浩氏から旭川は家具の三大産地の一つであること、家具選びのポイントは健康な材料で修理メンテナンスができることであることを学んだ。

3日目 北方建築総合研究所

○講義「高等学校における住教育の在り方」

北海道建築士会女性委員会 早川陽子 氏

○演習「『私らしい住まい』の設計～はじめての一人暮らし～」北海道建築会女性委員会

○講義「『君の椅子』プロジェクトから地域コミュニティの再生へ」

『君の椅子』プロジェクト代表 磯田憲一 氏

早川陽子氏から住生活における消費者教育として長持ちする住宅と維持管理の必要性・環境に配慮した住宅の考え方を学んだ。また演習では一人暮らしを想定した間取りを考えた。磯田憲一氏からイスは居場所の象徴であり、「生まれてくれてありがとう」「君の居場所はここにあるからね」というメッセージがある。3.11に誕生した赤ちゃんのお話しから、女性が命を生むことがこんなにも奇跡的であること、人の心にアプローチする分野であり子ども達の心を育てる分野であることに改めて気づかされた。

<まとめ>

今後住宅を選択するにあたり、北国ならではの知識が必要であること、地域の建築士との連携が必要であることを学んだ。家庭科の住教育でこれらの貴重な体験を活かしていきたい。

平成25年度第14回

福祉に関する教科・科目設置校研究協議会を終えて

函館大妻高等学校長 池田延己

《期 日》平成25年9月20日（金）

《開会式》

北海道高等学校長協会家庭部会長加藤和美北海道江別高等学校長の主催者挨拶及び主管校の北海道留寿都高校中川秀樹校長の挨拶に続き、森雅志教育長、後志教育局木村哲也教育指導班主査より来賓ご挨拶があった。

《講 演》

特別養護老人ホーム ニセコハイツ 業務課長の福山典子様が、「明るい笑顔～三者の絆と福祉の力で育てる豊かな心～」の演題で講演。体験の裏付けがある言葉の説得力に感激しました。特に『看護師は病気を看る、介護士は人を見る』という言葉が印象に残っている。

《基調報告》

主として8月6日～7日にかけて開催された全国福祉高等学校長会第19回総会・研究協議会の内容を中心に基調報告がなされた。校長会からは、①加盟校数が214校、②平成26年度は高知大会、その後は岐阜県、北信越、東北のローテーション、③北海道の分科会担当は平成27年度が「現場実習」、平成29年度が「資格取得」があたっている。④「全国高校生介護技術コンテスト」は、書類審査による10校が出場し、11月10日（日）に愛知県で開催、平成26年度以降は研修部で作成した課題による2名1組のブロック予選を実施後全国大会出場、詳細は本校の畔田学科主任から、⑤「理事長表彰」は、福祉系高校の成績優秀者に卒業時に授与、ただし、要請のあった学校のみ、⑥平成26年度（第20回）大会は高知県の室戸高校が主管校。

文部科学省からは、①国家試験受験者・合格者一覧表、②国家試験の出題範囲等の在り方に関する検討会の経過報告で、平成27年度（第28回）以降の卒業生に「医療的ケア」が出題さ

れる、③教科「福祉」の教員要件の高度化に伴う研修事業について、校長会主催は今年から中止するが各都道府県教育主催は可、④経過延長措置についての報告があった。

引き続き5月26日に第一回理事会・学科主任代表者会議が、東京都立つばさ総合高校で開催された際に、北海道代表理事として「提案と要望」を提出したことの報告。①「20周年記念誌」の企画・編集委員会の設置、②「介護技術コンテスト」検討委員会の設置、③「介護福祉検定（仮称）」検討委員会の設置、④「介護福祉士国家試験対策委員会」の設置、⑤「授業実践委員会」の設置の5項目について提案させていただいた。8月5日に開催された鹿児島大会の校長会理事会で①～③の採用が決定し、既に動き出している。特に③は家庭科や保育の検定同様、4級～1級を考慮。④と⑤は持ち越し議題となった。

《教科科目設置校校長会確認事項》

○北海道代表理事

H26年大妻、H27・28年一置戸、H29・30年一江陵

○研究協議会開催校

H26年一江陵、H27年一剣淵、H28年一置戸、H29年一大妻、H30年一留寿都

○介護技術コンテスト

一次審査―書類審査

二次審査―実技 北翔大学で実施

実行委員会委員長―北海道代表理事

《分科会》

分科会1「福祉教科授業内容・教材について」

分科会2「介護職員初任者研修（教材・外部実習）について」

分科会3「医療的ケア・外部介護実習について」

VI 各管内(ブロック)家庭科研究会の一年間の活動状況等

石狩管内

◆実施日 平成 25 年 5 月 14 日(参加者 39 名)

①総会

- ・平成 24 年度高教研石狩地区支部家庭部会事業報告
- ・平成 25 年度高教研石狩地区支部家庭部会研究協議会計画(案)
- ・平成 25 年度からのブロック編成、平成 25 年度以降(『研究協議会』)運営の割当(案)
- ・平成 25 年度全道事務局グループ編成
- ・平成 24 年度高教研石狩地区支部家庭部会会計決算報告
- ・平成 25 年度高教研石狩地区支部家庭部会会計予算(案)

等

②研究発表

「石狩南高校における家庭基礎の実践」

発表者 石狩南高等学校

吉 田 敬 子 教諭

◆実施日 平成 25 年 9 月 10 日(参加者 32 名)

①講演「高校生に伝えたい美味しい野菜料理」

講師 シニア野菜ソムリエ

吉 川 雅 子 氏

◆実施日 平成 25 年 11 月 12 日(参加者 39 名)

①講演「簡単に家庭でも作れる！本格的フランス菓子和デザート」

講師 札幌観光ブライダル・製菓専門学校

製菓学科 伊 藤 勇 氏

◆実施日 平成 26 年 1 月 28(参加者 40 名)

①発表「消費者教育推進法について」

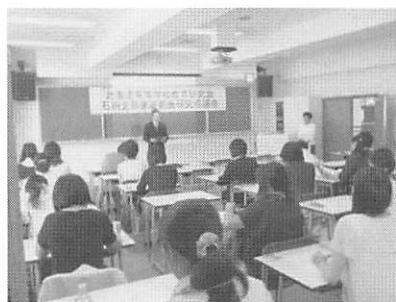
発表者 北海道立教育研究所企画・研修部
研究研修主事

後 藤 あゆみ 氏

②講演「生涯を見通した経済計画～年金の仕組み等」

講師 日本生命札幌支社担当支社長兼
ランチヘッドマネージャー

千 崎 和 夫 氏



渡島・檜山地区

◆実施日 平成 25 年 10 月 25 日(参加者 14 名)

①研究協議

「各学校の実態と課題」

②実技講座

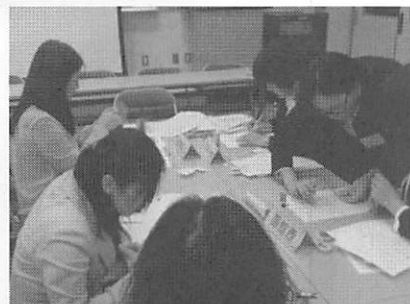
「授業に活かせる住生活講座～私らしい住まいの設計～」

講師 北海道建築士会女性委員会

早 川 陽 子 氏

工 藤 美智子 氏

吉 田 幸 恵 氏



後志管内

◆実施日 平成 25 年 10 月 1 日（参加者 12 名）

①総会

- ・ 役員確認
- ・ 平成 24 年度事業報告
- ・ 平成 24 年度会計決算報告
- ・ 平成 25 年度事業案
- ・ 平成 25 年度会計予算案

等

②講演 1

「新学習指導要領における消費者教育の推進」

講師 北海道立研究所企画・研修部

後 藤 あゆみ 研究研修主事

③施設見学

北海道小樽水産高等学校

水産食品科食品製造実習室

栽培漁業科飼育実習室

③実技研修「握り寿司体験」

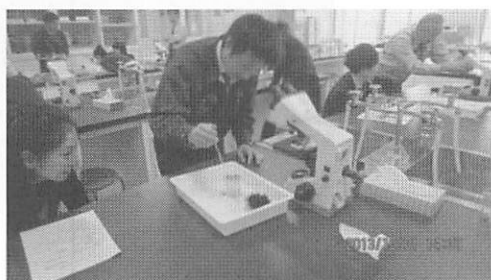
講師 小樽異鮭花園店店長

高 見 信 也 氏



④講演 2 「ウニの人工授精」実験実習

講師 小樽水産高校 栽培漁業科教員



空知管内

◆実施日 平成 25 年 6 月 7 日（参加者 19 名）

①総会

- ・ 平成 25 年度会員・規約の確認
- ・ 事務局ローテーションの確認
- ・ 次回研究協議について
- ・ 研究協議に対する意見・要望について

②研究協議

- ・ 実習費について各校より情報交換
- ・ ネットトラブル、携帯アプリの仕組み
- ・ 被服実習、調理実習指導の情報交換

◆実施日 平成 25 年 10 月 2 日（参加者 18 名）

①講演

「本校生徒の現状について」

講師 北海道岩見沢高等養護学校

自立活動教諭 安 部 勝 子 氏

②研修「施設見学」

社会法人『クピド・フェア』



旭川地区

◆実施日 平成 25 年 5 月 14 日（参加者 18 名）

①総会

- ・平成 24 年度研修報告・会計決算・監査報告
- ・役員改選
- ・平成 25 年度研修計画(案)・予算(案)
- ・その他

②研究協議 1

「今後の研究協議会の方向と名寄地区との統合について」

③研究協議 2

「教科書採択についての情報交換」

◆実施日 平成 25 年 10 月 9 日（参加者 15 名）

①研究協議 1

「旭川地区研究協議会の見直し案について」

②研究協議 2

「北海道高等学校家庭科教育研究協議会の提言について」

③環境プログラム研修「富良野自然塾」

◆実施日 平成 26 年 2 月 6 日

①講演「職場の権利教育に関する講演」

講師 NPO 法人

職場の権利教育ネットワーク

代表理事 道 幸 哲 也 氏

②講演「消費者教育に関する講演」

講師 北海道立教育研究所企画・研修部

研究研修主事 後 藤 あゆみ 氏

◆実施日 平成 26 年 3 月 27 日

①役員会

名寄ブロック

◆実施日 平成 25 年 9 月 12 日（参加者 6 名）

①公開授業「家庭総合」

～食生活をみつめよう～

②講話

「新学習指導要領のポイント」

「消費者教育」

講師 北海道立教育研究所企画・研修部

研究研修主事 後 藤 あゆみ 氏

③講話・実習

「農家さんからの立場から、高校生・先生に伝えたいこと」

講師 きたごりんふぁーむ代表

五十嵐 広 司 氏

食品加工（ラズベリージャム、山菜漬け）

留萌管内

◆実施日 平成 25 年 11 月 7 日（参加者 3 名）

①研究協議Ⅰ「各校の実態と課題」

②公開授業 2 年「家庭基礎」

③講義

「新学習指導要領における消費者教育の充実について」

講師 北海道立教育研究所企画・研修部

研究研修主事 後 藤 あゆみ 氏

④研究協議Ⅱ

『家庭基礎』2 学年

衣生活～被服材料の種類と性能～

授業者

羽幌高等学校 磯 江 智 美 教諭

指導・助言

上川教育局教育支援課高等学校教育指導

班指導主事 石 川 博 史 氏

宗谷管内

※隔年度開催のため、今年度は実施なし

オホーツク管内

◆実施日 平成 25 年 6 月 5 日(参加者 18 名)

①講演

「新学習指導要領における家庭科教育について」

講師 北海道立教育研究所企画・研修部
研究研修主事 後 藤 あゆみ 氏

②総会

- ・平成 24 年度事業報告及び決算報告
- ・平成 24 年度監査報告
- ・平成 25 年度事業及び予算審議
- ・平成 25 年度事務局校、当番校の確認
- ・その他

③研究協議

「今後のオホーツク管内高等学校家庭科教育
研究会の在り方について」



釧根地区

◆実施日 平成 25 年 10 月 25 日(参加者 14 名)

①総会

- ・平成 24 年度事業報告
- ・平成 24 年度決算報告
- ・平成 25 年度事業計画(案)について
- ・平成 25 年度予算案について

等

②体験実習

「地域の食材を生かした調理」実習

講師 標津漁業協同組合

女性部部长 林 裕 子 氏

実習内容

- * 鮭のちらし寿司
- * 鮭のあら汁
- * 鮭の味噌マヨネーズ焼き



③講演

「若者の消費者トラブルについての現状と対策」

講師 一般社団法人北海道消費者協会

非常勤講師 佐 藤 幸 子 氏



十勝管内

<全体会>

◆実施日 平成 25 年 5 月 30 日(参加者 24 名)

①総会

- ・平成 24 年度事業報告及び決算報告
- ・平成 24 年度会計監査報告
- ・平成 25 年度会員名簿確認

等

②研究協議

「つながり(小中高、地域、家庭、社会)を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日 平成 25 年 10 月 31 日（参加者 17 名）

①講演

「家庭科教育の魅力と威力を発揮させよう」

講師 宇都宮共和大学子ども生活学部長

牧 野 カツコ 氏

②授業見学・体験

「3 学年 選択科目 課題研究」

講師 帯広南商業高等学校商業科教諭

③研究協議「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日 平成 26 年 1 月 29 日

①消費者教育講話

「新学習指導要領における消費者教育の充実」

講師 十勝教育局教育支援課

高等学校教育指導班指導主事

佐 紺 摂 子 氏

②ブロック会議報告他

<ブロック会議>

◆実施日 平成 25 年 9 月 5 日

A ブロック研究協議

「つながり（小中高、地域、家庭、社会）を重視した家庭科教育のあり方」

◆実施日 平成 25 年 9 月 30 日

B ブロック研究協議

「自立と共生という視点からつながりを重視した家庭科教育のあり方」

蕎麦打ち体験実習

講師 百姓（笑）庵 庵主

長 崎 勉 氏

◆実施日 平成 25 年 10 月 2 日

C ブロック研究協議

「つながりを重視した家庭科教材・実践報告」

胆振管内

◆実施日 平成 25 年 10 月 31 日（参加者 18 名）

①総会

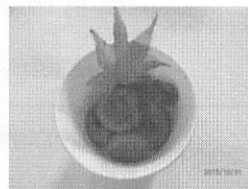
・平成 24 年度事業報告・決算報告

・平成 25 年度事業（案）・平成 25 年度予算（案）

・会則の改訂及び申し合わせ事項の変更

②研修会

実習「くま笹茶、よもぎ団子作り」



③情報交換

日高管内

<全体会>

◆実施日 平成 25 年 12 月 12 日（参加者 7 名）

①授業参観

「1 学年 家庭総合」

洋食献立

・チキンピラフ

・クールポタージュ

・フレッシュサラダ

・米粉を使ったベイクドチーズケーキ

②研究協議

「家庭基礎における調理実習の取組について」

③講義演習

「高等学校における消費者教育の推進」

講師 北海道立教育研究所

企画・研修部研究研修主事

後 藤 あゆみ 氏

各管内（ブロック）の家庭科研究会事務局・加盟校数一覧〔平成25年度〕

管内等		名称	運営母体	事務局（年度）		実施回数	①加入校数（管内数） ②加入教員数（管内数）
1	石狩管内	北海道高等学校教育研究会石狩地区支部家庭部会	高教研石狩地区支部	H25	札幌真栄高校	4回/年	①41校/68校 ②62名/127名
				H26	札幌真栄高校		
				H27	旭丘高校		
				H28	旭丘高校		
2	渡島・檜山地区	渡島・檜山地区高等学校家庭科部会	渡島・檜山地区高等学校教育研究会 （地区校長会組織）	H25	函館商業高校	1回/年	①27校/31校 ②37名/37名
				H26	清尚学院		
				H27	函館白百合学園		
				H28	函館水産高校		
3	後志管内	後志管内高等学校家庭科研究会	後志管内高等学校教育推進委員 （管内校長会組織）	H25	小樽水産高校	1回/年	①17校/20校 ②20名/23名
				H26	共和		
				H27	未定		
				H28	未定		
4	空知管内	空知管内高等学校家庭科研究会	空知教育研究会 （管内校長会組織）	H25	滝川西高校	2回/年	①28校（30校） （公立+私立+特支） ②53名/78名
				H26	岩見沢高等通達		
				H27	奈井江商業高校		
				H28	月形高校		
5	旭川地区	旭川地区高等学校家庭科教員研究会	旭川地区高等学校教員研究会 （地区校長会組織）	H25	旭川農業高校	3回/年	①20校（23校） （公立+私立） ②34名/37名
				H26	旭川北高校		
				H27	旭川東高校		
				H28	鷹西高校		
6	名寄ブロック	名寄ブロック家庭科教育研究会	名寄ブロック校長協会 （ブロック校長会組織）	H25	士別東高校	1回/年	①5校（公立8校） ②10名（10名）
				H26～	旭川地区と統合		
7	留萌管内	留萌管内高等学校家庭科教育研究会	留萌管内高等学校家庭科教育研究会	H25	羽幌高校	1回/年	①4校（7校） ②4名（5名）
				H26	羽幌高校		
				H27	天塩高校		
				H28	天塩高校		
8	宗谷管内	宗谷管内高等学校教育研究会家庭部会研究協議会	宗谷管内高等学校教育研究会 （管内校長会組織）	H25		1回/2年	①7校/7校 ②7名/7名
				H26	豊富高校		
				H27			
				H28	未定		
9	オホーツク管内	オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会	オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会	H25	遠路高校	1回/年	①25校/26校 （公立+私立） ②27名/32名
				H26	小清水高校		
				H27	東藻琴高校		
				H28	北見緑陽高校		
10	釧根地区	釧根地区高等学校家庭科教育研究会	釧根地区高等学校研究会 （管内校長会組織）	H25	標津高校	1回/年	①21校/25校 （公立+私立+特支） ②24名/24名
				H26	釧路北陽高校		
				H27	標茶高校		
				H28	羅臼高校		
11	十勝管内	十勝管内高等学校家庭科研究会	北海道高等学校校長協会十勝支部	H25	帯広南商業高校	3回/年	①23校/24校 ②34名/35名
				H26	本別高校		
				H27	帯広北高校		
				H28	清水高校		
12	胆振管内	胆振管内高等学校家庭科研究協議会	胆振管内高等学校家庭科研究協議会 （管内校長会組織）	H25	室蘭工業高校	1回/年	①22校/27校 ②34名/37名
				H26	厚真高校		
				H27	伊達緑丘高校		
				H28	未定		
13	日高管内	日高管内高等学校教育研究会家庭科研究会	日高管内高等学校教育研究会 （管内校長会組織）	H25	浦河高校	1回/年	①6校/8校 ②8名/8名
				H26	平取高校		
				H27	未定		
				H28	未定		

VII 特 別 寄 稿

家庭科は授業改善の先鋒たれ

北海道高等学校長協会家庭部会副部長

北海道登別青嶺高等学校長 松 澤 正 枝

北海道高等学校長協会家庭部会が60周年を迎えました。設立の年、昭和28年は私の生まれた年でもあり、共に還暦を迎えたところです。

資料によれば、家庭部会は当初から家庭科教育の研究集会を主催したり、実習ノートを発行するなど、一貫して家庭科教育の振興を主軸に活動してきたことがわかります。

重要な主催事業である「高等学校家庭科教育研究協議会」の歴史を見ても、研究主題には「～の効果的な指導の在り方」という表現が随所に見られ、家庭部会が教員の指導力向上に大きな役割を果たしてきたことが窺えます。

この研究協議会は発足から平成 19 年度の第 56 回大会までは当番校方式により全道各地で移動開催されていましたが、校長協会の一連の組織等の見直しという流れの中で、同様に見直しが進められました。

私が駆け出しの校長であった平成 17 年度には改編の草案に着手し、18 年度には家庭科の校長・教頭で構成する作業部会で具体的な内容の審議を進め、19 年 4 月の家庭部会役員会で新規約・内容が決定に至りました。

そして平成 20 年度第 57 回大会から、実践発表と分科会、講座別体験研修という内容で、全道各地区から選出された運営委員による研究協議会として、新たなスタートを切ったのです。

現在では、運営委員を自主的に選出する地区も増え、運営の主体性も高まるなど、「自分達の研究会を自分達の手で」という改編の趣旨が着実に具現化されてきたと感じています。

今年度、「全国高等学校家庭科実践研究会」主管地区として本道家庭部会が責任を果たせたことは、これまで企画委員会が築いてきた実績

があればこそその成果だったと思います。

お力添えを頂いた校長先生方、運営委員の先生方に改めてお礼を申し上げます。

また、今年度から本格実施されている新学習指導要領では、言語活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成や、体験的学習の重視による問題解決能力・活用能力等の育成が強く打ち出されました。しかし今求められていることの多くは、言うまでもなく家庭科では従前から実践して来たことであり、今更ながら、教育の不易の部分を担ってきたのだと実感します。

今、中教審高校部会では、すべての生徒に身に付けさせるべきコアについて検討されていると聞きますし、大学入試制度も 5 年以内に大きく変わるといわれており、今後、教育課程の大幅な見直しが必要になることと思います。

家庭科の先生方には、「総合的な人間力」を育てるという教科の特性や、持てる様々な指導法を生かした実践で、指導要領の趣旨をいち早く具現化する、いわば授業改善・教育課程改善の先鋒として大いに力量を発揮して頂きたいと思います。そして、広い視野で家庭科が果たすべき役割を認識し、教科指導以外の様々な分野でも力を発揮して頂き、存在価値をゆるぎないものにしてほしいと願うばかりです。

家庭科が男女必修修になって 20 年、当時の高校生も子育て世代になりました。この先、世の中がどのように変化していくのか、この 20 年の家庭科教育が如何なる成果をもたらすのか、興味深いところです。

結びに、家庭部会の今後益々の発展をお祈りと共に、これまでお世話になった皆様に心よりお礼を申し上げます。

家庭科教育の根幹

北海道高等学校長協会家庭部会副部会長
北海道南幌高等学校長 阿 部 広 美

○ホームプロジェクトとの出会い

生活の簡便化や利便性を追求する状況にあつて、食品表示の偽装や冷凍食品への農薬混入等食の安全にかかわる問題はなくなり、また、高齢者をターゲットにした問題、インターネットを巡る問題も含めると、ますます多様化・複雑化した消費者問題が発生しています。規制する法令も数多く整備され、消費者庁も設置されましたが、子どもから高齢者までを対象にした消費者教育の必要性が高まっています。

私が消費者問題に関心を持ったのは、高校1年（S44）に、人工甘味料チクロの発ガン性が指摘され、使用禁止になったことでした。ですから、ホームプロジェクトのテーマを「加工食品と食品添加物」とし、市場での主婦への聞き取り調査、ハム工場見学、北海道消費者協会（S44設立）での活動をグループで行いました。残念ながら学校代表になれず、家庭クラブ全道大会での発表はできませんでしたが、私の進路決定や家庭科教員の原点になりました。

北海道高等学校家庭クラブ連盟は昭和27年に札幌東・北高校、帯広三条高校等が中心になって設立され、翌年全国連盟の設置とともに全国に加盟しました。全道・全国連盟ともに60年以上にわたり、家庭科教育を支えています。

さて、戦後の我が国の教育は、アメリカを中心とする占領政策によって6・3・3制や男女共学等の新しい教育制度や教育方法が取り入れられました。家庭科教育（S22）にあつては、アメリカの教育学者キルパトリックが提唱したプロジェクト・メソッド（問題解決学習）が導入され、以来、幾度の学習指導要領の改訂があつ

ても、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動は、学習内容や指導方法に位置付けられてきました。それは、答えを教える学習ではなく、「plan → do → see」を通して、学び方を学ぶさせる学習であり、家庭科教育の根幹です。だから、多くの家庭科教員が、「生きる力」や思考力・表現力・言語活動等をはぐくんでいると感じているのでしょう。

○男女が共に学ぶ家庭科

1970年代前半に、学生運動が波及した高校時代を過ごした私にとって、家庭科不要論や女性の自立に関心を払わずにはいられませんでした。男性と同じくように働き、同じように収入を得るために、また北海道消費者協会の実験室に勤務できたという思いもあつて、教員養成系の大学に進学しました。入学後は、女子のみが学ぶ家庭科教育の歴史、栄養学や洗濯等に関する化学的な内容、家庭経済や家族関係論等に関する社会学的な内容等も学びました。ですから教職に就いた時は、大学時代に抱いた家庭科教育のイメージと現実の差は大きいものでした。しかし、多くの先輩・同輩諸氏と意を同じにしていたことは、良妻賢母教育や単なる技術教育ではなく、国民の一般教養教科（市民教育）として、男女が共に学ぶ教科にしたいということでした。

家庭科の男女必修が実施され、20年目を迎えます。その理由の一つに、男女共同参画社会の推進があります。これは、戦後の家庭科教育が民主的な家庭の建設ためにスタートしたことと一致しており、ここに、もう一つ家庭科教育の根幹があります。

編集後記

「おかげさまでした！」「有難うございました！」の言葉を・・・

北海道高等学校長協会家庭部会誌「2014 こですHOKKAIDO」が、おかげさまで完成しました。

まずもって、お忙しい中にもかかわらず、原稿を執筆していただきました多くの皆様方に、心より感謝申し上げます。有難うございました。

今年度（平成25年度）は、本部会創設六十年を迎えた年であり、高等学校家庭科が男女必修となつてから二十年が経過する年となりました。その節目の年に発行される「こですHOKKAIDO」の業務を本校が担うこととなり、家庭科の浅川寛子教諭とともに、貴重な経験をさせていただきました。

特に、過去に発行された「こですHOKKAIDO」を読ませていただくなかで、これまで家庭部会がどのように全道高等学校の家庭科教育や福祉教育の推進に尽力してきたかを改めて確認することができたとともに、長い年月、各時代を背景として高校家庭科が果たしてきた役割を知り、家庭科に携わってくださった校長先生方、教職員の皆様方の思いまでが染みこんでいる部会誌であることを痛切に感じたところでした。

そこで、これまでの「こですHOKKAIDO」の流れを踏まえ、いくつかの工夫をさせていただきました。

一つ目は、本部会誌前段に「六十年のあゆみ」として調査研究員会のまとめを記載したこと、二つ目には、今年度開催された「全国高等学校家庭科実践研究会～北海道大会～」の内容等について、企画委員長（南幌高校長）阿部広美校長先生より詳細にわたる記録を頂戴し、記載することができたこと、そして三つ目には、調査研究委員会の今年度の取組については、教育課程の履修状況調査であったことから、データのまとめを本誌に記載したこと、です。

改めて、関係各位の皆様方のご協力に感謝し「おかげさまでした！」と「有難うございました！」の言葉をお伝えするとともに、「2014 こですHOKKAIDO」が、これまでと同様に、多くの高等学校で活用していただけたら幸いです。

最後となりましたが、平成26年3月末をもってご勇退されます 家庭部会長（江別高校）加藤和美校長先生、地区代表委員（北広島高校）三品純一校長先生、副部会長（登別青嶺高校）松澤正枝校長先生、そして（南幌高校）阿部広美校長先生、長い間、家庭科教育及び福祉教育を推進し、校長協会家庭部会の発展にご尽力いただきまして、誠に有難うございました。

「こですHOKKAIDO」担当校

北海道洞爺高等学校長 佐々木 淑子

北海道高等学校長協会家庭部会　こですHOKKAIDO

発行日　平成26年3月31日
発　行　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
（北海道江別高等学校）
編　集　北海道洞爺高等学校
印刷所　社会福祉法人　共有会　札幌福祉印刷
札幌市西区西町北15丁目5番7号
TEL（011）667-7771
FAX（011）667-9750

こ で す H O K K A I D O と は

Collected papers 集 録
Domestic Science 家庭科
Studies 研 究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる
こーして、しあげることを、でかすと解釈
し北海道は、こーですヨ という意味です